

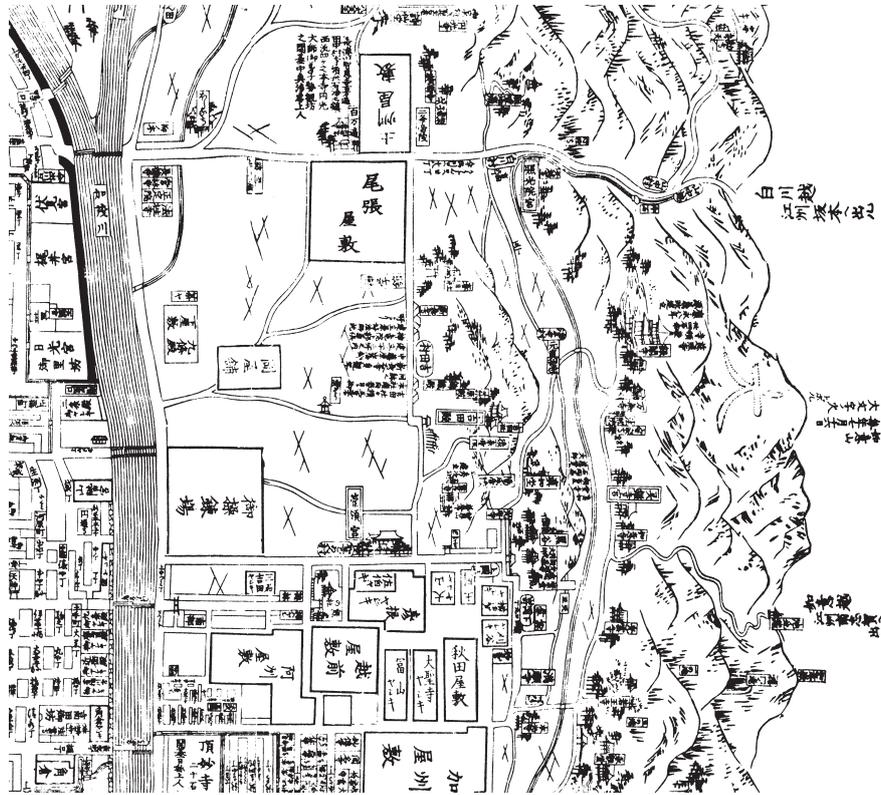
# 「都市化」とは何か

—歴史都市京都近郊における長期的検証—

(課題番号：22K00985)

令和4～6年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究成果報告書



2025年3月

研究代表者 伊藤 淳史

(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)

# 「都市化」とは何か

—歴史都市京都近郊における長期的検証—

(課題番号：22K00985)

令和4～6年度科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究成果報告書

2025年3月

研究代表者 伊藤 淳史

(京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)

## 例 言

- ・ 本書は、令和4～6年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：22K00985）にかかる研究成果を刊行するものである。
- ・ 研究課題名 「都市化」とは何か—歴史都市京都近郊における長期的検証—
- ・ 研究組織は以下の通り（所属・職階は令和6年度時点）
  - 研究代表者 伊藤淳史（京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター助教）
  - 研究分担者 千葉 豊（京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター准教授）
  - 富井 眞（大正大学文学部教授）
  - 笹川尚紀（京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター助教）
  - 内記 理（愛知県立大学日本文化学部准教授）
- ・ 交付決定額

令和4年度	直接経費 1000千円	間接経費 300千円	計 1300千円
令和5年度	直接経費 1100千円	間接経費 330千円	計 1430千円
令和6年度	直接経費 800千円	間接経費 240千円	計 1040千円
合 計	直接経費 2900千円	間接経費 870千円	計 3770千円
- ・ 執筆者名は各章の冒頭に記した。
- ・ 初出の掲載誌がある場合は章末に記載しており、転載にあたりレイアウト等を調整した。
- ・ 本書は、研究分担者のほか、京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門の協力を得て、伊藤淳史が作成・編集した。

# 目 次

はじめに	1
第一部 調査・報告編	3
第1章 1981年京都大学北部構内B D30区の発掘調査 —幕末期の調査成果を中心として—	3
第2章 京都大学北部構内における物理探査結果	48
第3章 2023年度京都大学北部構内B C28区における試掘調査	53
第4章 土佐藩白川邸範囲復元に向けての試行と課題	61
第5章 吉田山西麓で採集した中世遺物	65
第二部 研究・論考編	69
第6章 「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討	69
第7章 タキシラ探索記 —2023年度のパキスタン現地調査—	102
おわりに	120
活動の記録	121
参考資料	123

## はじめに

伊藤淳史

**本研究の目的と意義** 鴨川の東で京に隣接し、近江など東方との重要な交通路として機能してきた白川道を含む吉田・北白川・聖護院といった地域は、古代宮都から中近世へと性格を変容させながらも中心であり続けた京の、近郊として重要な地理的位置にある。本研究は、道により密接に都市と関連するこの近郊空間に焦点を当て、開発と衰退が繰り返される長期間の土地利用や人流・物流の実態を、考古学的手法を基盤に定点観測的に検証し、他地域の事象との比較検討を行う。そして、そうした作業を通じて、「都市化」と呼ばれるような事象を左右する人的・環境的要因は何かを具体的に明らかにすることを目的としている。

近年では、中世京都について、鴨東の白河や嵯峨など近郊の開発された空間を衛星都市として位置づけ、ひとつの都市圏として「巨大都市複合体」とみなす見解も提出されている（例えば、山田邦和『京都市史の研究』2009年、同『変貌する中世都市京都』2023年など）。本研究で対象とするのは、さらにその周縁にあたる空間となるが、それ故に、都市圏として継続的に包含された履歴はなく、社会変動を鋭敏に反映した開発と非開発の反復を読み取ることは適した地域とも言える。開発された段階のみを都市に包含して評価するのではなく、長期的かつ近郊側からの視点に立って複数の画期を認識し、比較検証を果たすことで、最終的に「都市化」のもつ本質的意味の呈示へと至ることを見通している。その結果は、近郊地域のもつ歴史的文化的価値の再認識と、文化資源として地域未来像を展望することへもつながるであろう。

**研究の経緯と経過** 本研究は、古道である白川道に焦点を当てた2019～2021年度の共同研究「都市近郊歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—」（基盤研究(C)19K01094・代表千葉豊）を発展的に継承するものである。その際に未決として残された、古代における道の遡源状況解明についてを再び課題として掲げるとともに（課題1）、道が介在しながら歴史を刻んできた都市近郊の対象地域について、中世における開発繁忙期の検証（課題2）、近世～幕末変動期の実態解明（課題3）、歴史時代を中心とした地形環境変遷の検討（課題4）の4点を、開始時の課題として設定した。またあわせて、研究メンバーそれぞれの関心と専門領域に鑑みて、考古情報に限定しない文献史料も含めた探究を推進するとともに、出土物の理化学的分析による産地同定や、「道」にかかわる地域の国際的な比較研究など、研究課題の学際的・総合的研究を積極的に指向する方針をたてた。

課題1については、京都大学本部構内において確認される白川道の路面遺構が、さかのぼっても12世紀代までのものであることから、先行する白川道は異なるルートではしっていた可能性を考慮した探索が求められた。この点では、前回の共同研究の成果である博物館展示に際して、北部構内BD28区297地点（北白川追分町遺跡）における10世紀前半の道路遺構を「白川道の前史」として紹介している（京都大学総合博物館2021年度特別展・文化財発掘Ⅷリーフレット『埋もれた古道を探る』2022年3月）。東西方向に直線的にはしる路面状遺構が50mにわたり確認されたものであり<sup>(1)</sup>、古代の白川道と位置づけ得る第1候補であった。今回、その延長の把握と詳細な路面構造の再検証をおこなう

べく、西側の地点での遺跡探査と試掘調査を計画した。探査結果詳細は本冊第2章に依られたいが、路面の延長の可能性ある反応は把握されたものの、現地表下3m前後であり、トレンチ掘削での確認は見送った。課題の解決は今後に持ち越されることとなるが、東方に400mあまり離れた地点での立合調査においても古代の道路可能性を示す所見が報告されており<sup>(2)</sup>、こうした過去の調査履歴も再精査しながら、検証の継続と調査機会の確保に努めたいと考えている。

課題2・課題3については、構内遺跡で蓄積されてきた情報量の多い中～近世でありながら、報告や検証が不十分であった調査や遺物を、この機会に重点的にとりあげて研究を進めることで、解決に接近することとした。第6章で示した、俗称で塩壺と呼ばれてきた京都の中世に特有の土師器鉢形土器の集成的検討は、その一環であり、住空間の都市化とも関連する屋内用火器の地域類型、として遺物への注目を促している。また、課題3にかかわる幕末藩邸期については、1981年の調査で未報告となっていた土佐藩白川邸関連の瓦の内容を明らかとした。大坂式文様の軒瓦や、道具瓦や塀棧瓦など、既往の報告で注目された土佐に由来する刻印をもつ一群以外の瓦が一定量存在しており、当該期の流通状況への理解や藩邸内での使い分けといった問題について、検証をさらに深めていく貴重な材料を加えることができた。そして、さきに述べた遺跡探査においては、現地表下1～2mで東西方向にはしる反応が確認された地点があり、藩邸北堀の可能性を考えてその部分に試掘トレンチを設定した。第3章にその調査報告を収めている。結果として、反応は近代のコンクリート構造物であり、北堀の存在は認められなかったけれども、藩邸の敷地が北へとさらにひろがっていたことは、再確認できたと考えたい。このあたりを含めた簡潔な考察は、第4章にまとめた。

課題4については、今回の研究期間中にそれのみに特化したフィールドワークや分析を実施するには至らなかったが、上述の試掘調査をはじめ、構内遺跡の発掘調査機会に乗じて地質考古学的な知識の深い研究者を交えて積極的な意見交換をおこなった。試掘調査においては、下部に古代以前の厚い堆積が把握されたことから、平安時代における谷状の地形環境と開発や交通路との関連が、今後の検証課題として新たに浮上してきたといえる。また、構内の近世～幕末期堆積として認識している黒色系の腐食土壌の由来についても、理化学的な分析も含めた検証が、今後必要であろう。

以上のほか、比較考古学的に交通路と周辺地域の開発を考察する対象として、商業や交通上の要衝として著名でありながら解明の手が及んでいない西北インドの歴史都市タキシラの踏査報告を、第7章に収めた。対象小地域の悉皆的で緻密な検証成果を相対化し、国内外に普遍的なものとして活かしていくためにも、共同研究としてこうした比較研究を今後も積極的に継続していければと考えている。

#### 〔注〕

(1) 富井眞・吉江崇・伊東隆夫・外山秀一・上中央子2007「京都大学北部構内B D28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』

(2) 北部構内B C35区（『京都大学構内遺跡調査研究年報2004～2006年度』表1-325地点）

## 第一部 調査・報告編

### 第1章 1981年京都大学北部構内B D30区の発掘調査

—幕末期の調査成果を中心として—

伊藤淳史・長尾 玲

#### 1 経緯と経過

調査地点は、今出川通りに面した北部構内南門から北へ150mあまりに位置し、北白川追分町遺跡に含まれる(図1-109)。1981年、ここに実験排水処理槽施設の建設が計画され、予定地の272㎡について発掘調査がおこなわれた。その成果はすでに報告されている〔浜崎1983〕。しかし、9～10世紀代の平安時代を中心とした内容にとどまり、整理箱25箱の出土遺物中19箱を占めていたとされる近世に関する成果は、ほとんど紹介することができなかった。その後、1992年に208地点で堀と大量の棧瓦が発見され、あらためて幕末期の土佐藩白川邸の存在が認識されることになるが〔浜崎ほか1995〕、範囲や内実を知る手掛かりは、依然として乏しいまま今に至っている。そうした現状において、藩邸敷地内となる可能性が高いこの地点の調査内容は、稀少かつ貴重な成果として、すみやかに公開し検討の土俵に乗せるべきものと言える。よって今回の共同研究を契機に、調査時の記録と幕末期を中心とする近世の出土遺物を再整理し、ここに報告するものである。作業の実務は長尾玲(京都大学教務補佐員)を中心におこない、磯谷敦子(同)と河野葵(同技術補佐員)が補佐した。本稿は長尾と合議を経て伊藤が執筆した。

#### 2 層 位

東壁の一部はすでに報告されているが、今回は東壁の全体と、西壁の段差部分を中心とする一部についてを示す(図2)。調査地は、南半が高くなる地形となっており、古代以降の遺物包含層は凹地

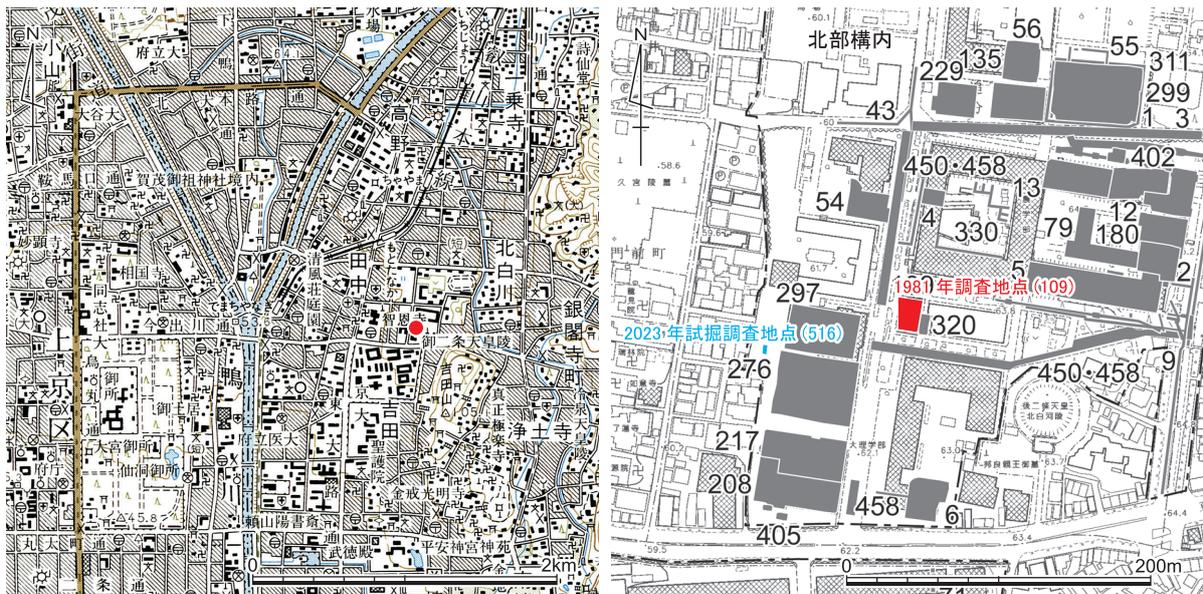
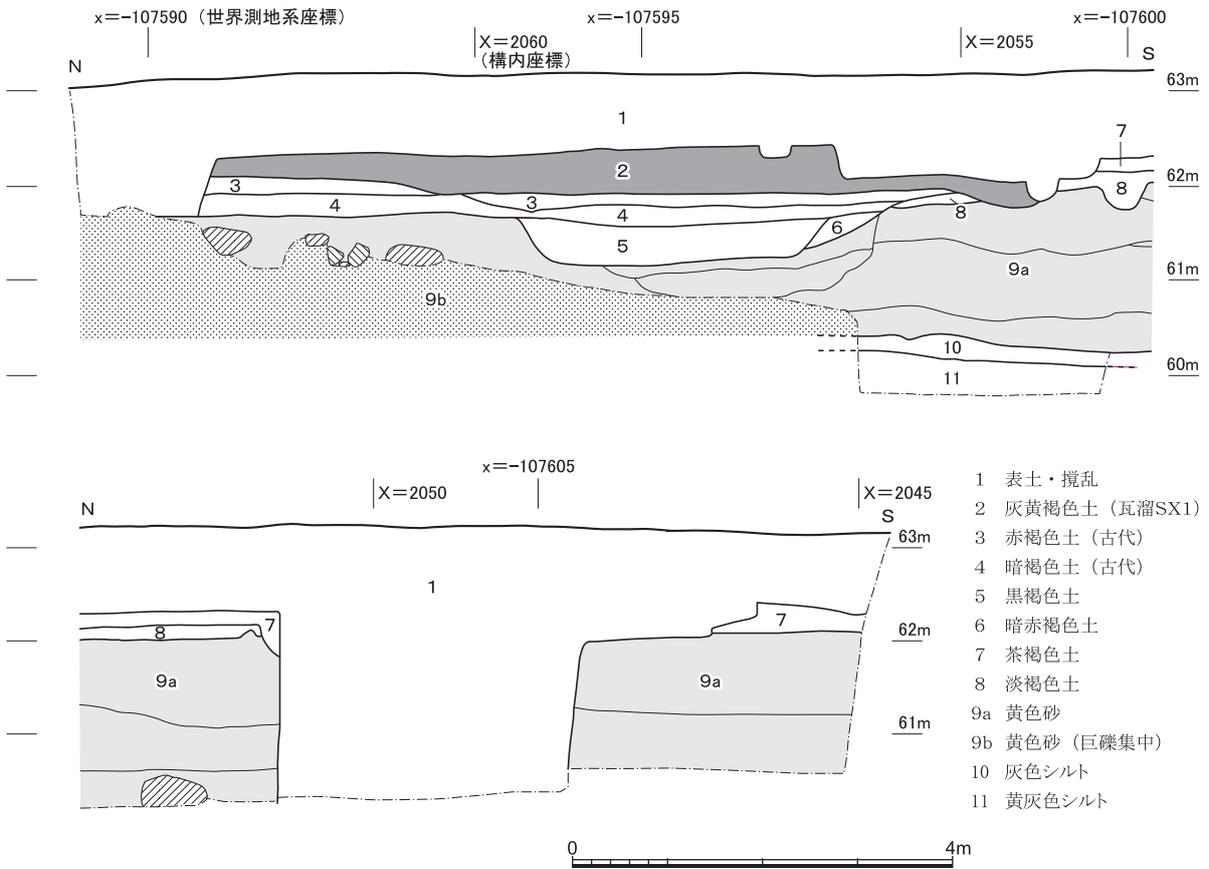


図1 1981年調査地点の位置(赤色) 縮尺1/5万(左)および1/5000(右)

〔調査区東壁の層位〕



〔調査区西壁の層位 (段差付近の一部)〕

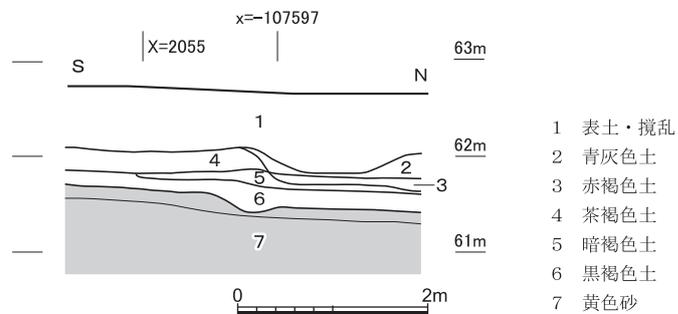


図2 調査区東西壁面の層位 縮尺1/80

状に低くなる北半部にのみ認められる。東壁では、近世層である青灰色土（西壁での第2層）は瓦溜SX1の掘り込みによってとり除かれて現れていない。このように青灰色土は、遺構で後述するように、明治初頭期の土佐藩白川邸廃絶後の片付けにともなう遺構では掘削の対象となっている。そして、遺物では藩邸期であることが確実な鉛製銃弾が層中から出土しており、藩邸が機能していた幕末期段階の堆積も一部含むもの、とも認識される。第3・4層は平安時代の遺物を包含するが、第3層の赤褐色土は古代層が中世に削平・整地されたものである可能性がある。第5～8層は無遺物とされ、うち第5・6層は、土坑状断面の上部に埋積しているもので、さらにその下部の砂層内にも堆積の乱れが観察されている。ただし、これら下部は人為的な掘削によるものでなく、風倒木痕のようなものに影響を受けたものとみなし、今回は第9層に含めた。第7・8層は、第9層の土石流堆積層が弥生中

期に形成されて以降、古代までの間に形成された土壌化層であろう。調査地南半では、これらより上の層はすべて削平されてしまっている。

なお、第9層の黄色砂は、弥生前期末～中期初頭の一時期の洪水層として構内でひろく確認されている鍵層だが、この調査地点では、下部に2mを超える花崗岩巨礫のまとまった包含が北辺部で確認され、9b層としている。西方へと流れ下った土石流本体の南端が及んでいるものと理解され、その上部を覆う9a層もそれほど時間差なく堆積した一連のものだろう。こうした堆積環境が、古代以降における地形起伏の形成要因となっていることがわかる。第10層直上からは縄文晩期末の突帯文土器小片が出土している。

西壁は、南から北へと下る部分の状況が確認される部分を抽出して示した。近世層である第2層青灰色土、その下部の第3層赤褐色土は、第4・5層を大きく削り込むような段差内に堆積しており、中世以降近世を通じて、棚田状の段差が形成されていたことがうかがわれる。

### 3 近世の遺構 (図3)

遺構はほとんどが調査区北半の低位部分で確認されている。椀瓦の瓦溜遺構SX1～SX4と、近世の耕作関連遺構群をまとめて表示した(図3)。瓦溜は先述したように青灰色土の上面から掘り込んで形成されており、耕作関連遺構は青灰色土の上面から下部へ掘り下げていく過程の複数面で検出されている。

**瓦溜SX1～SX4 (図版1・2)** SX1は東壁際に南北7.7mに達する長さで検出された椀瓦の集積で、青灰色土を10～20cm掘り下げて瓦を盛るように廃棄している。全体に均等ではなく、内部に3つのブロック状のまとまりも認めることができる。SX2・SX3は、調査区中央付近でみつけた小規模な浅い瓦溜。SX3には、瓦片のほか、花崗岩製の大型石製品片(図4-19)も多数含まれていた。SX4は上部を攪拌されていたが、1m程度と深い方形を呈するもので、含まれる瓦片も大きい。

これらの瓦溜は、土佐藩白川邸が廃絶した後の片付けによるものと考えるのが自然だろう。文献史料による笹川尚紀の検証によれば、明治3年(1870)6月5日からほどなくして白川邸の建物はとり壊されるにいたったと推測されており[笹川2018]、瓦溜もそれと近い時期に形成されたことになる。瓦溜の相互間で接合関係にある瓦が多数認められることから、それぞれのまとまりには、同時性以外の有意性は薄いのではと思われる。

**耕作関連遺構** 真北から約11度東に振る方位の溝や柵列が多数検出されている。溝はいずれも幅20cm足らずの浅いもので、南北溝のSD1・2と東西溝のSD3～8は青灰色土上面で、南北溝SD9・10と東西溝SD17は青灰色土中で、残りの東西溝SD11～16は北部の暗褐色土や赤褐色土の上面で検出された。繰り返して耕作された累積があらわれているものだろう。溝の間隔はいずれも1.3m前後をはかることから、畑の畝間の溝であったのかもしれない。方形の小柱穴が主体に並んでいる柵列SA1～8は、耕作物乾燥等に用いられたもので、これも複数回建て替えられた累積が検出されたとみてよい。これらは、土佐藩白川邸となる以前の土地利用状況をおもに示しつつ、藩邸破壊後帝国大学敷地となるまでに30年以上が経過しているため、青灰色土の上面で検出されている遺構群は、その間耕作地に戻った段階の遺構も含んでいる可能性も考慮しておく必要がある。

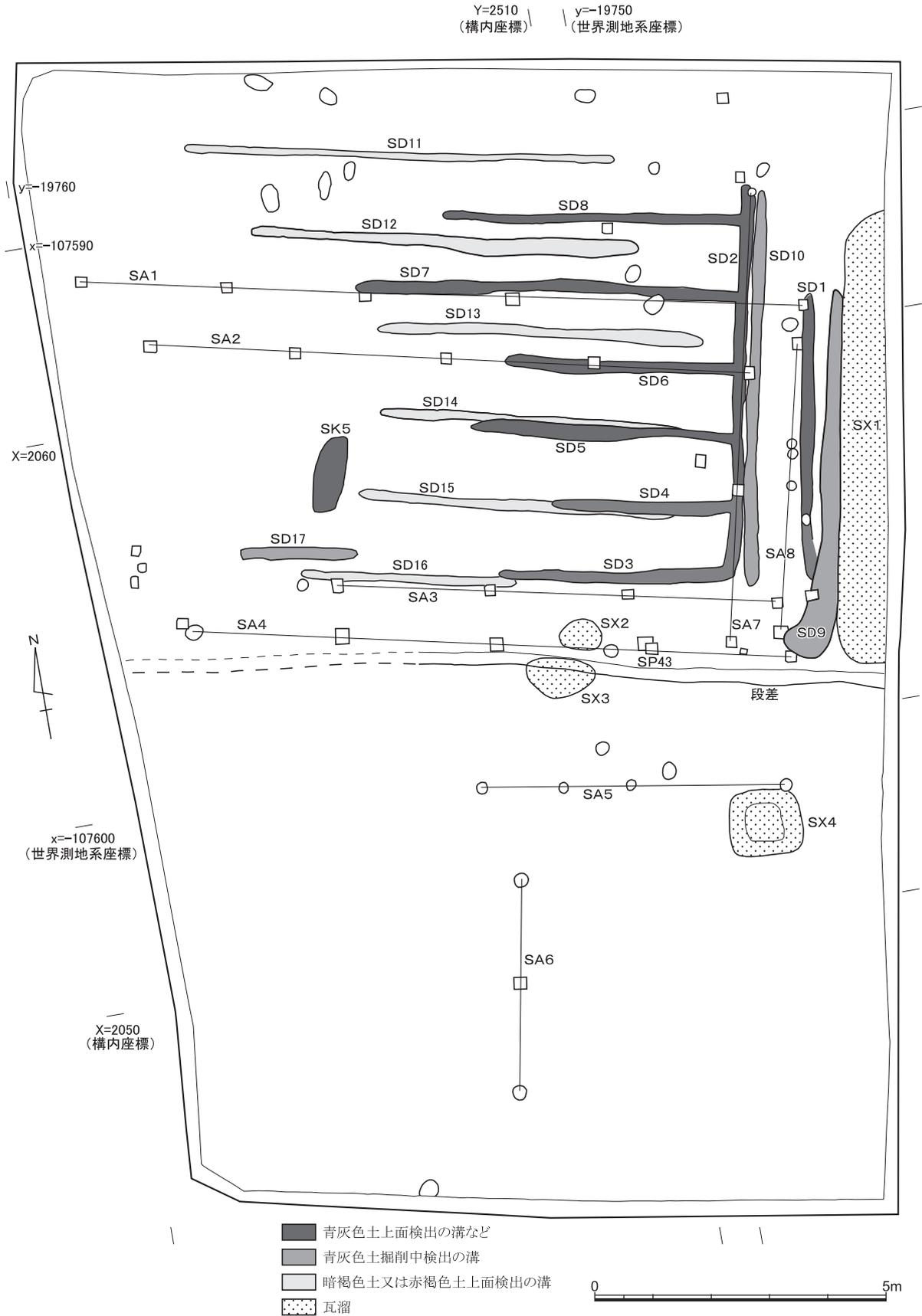


図3 近世の遺構 縮尺1/100

#### 4 近世の出土遺物その1：瓦磚類以外（図4・5）

冒頭で述べたように、総出土遺物25箱のうち19箱がこの時期のもので、うち15箱が瓦溜出土の瓦磚類となる。ごく少量の陶磁器類・石製品・鉛製銃弾類など、それ以外の資料をまず呈示し、瓦磚類はその後にまとめて報告する。

**陶磁器・土製品・銅製品類** 図化可能なものの多くが表土・攪乱中から採集されたものとなる。うち、(図4-12)は底面に「岐」「□065」の統制番号がクロム釉で印字されており、第二次大戦中の下る時期の磁器製品とわかる。青灰色土出土の磁器染付(4)、陶器の灯明皿(7)や蓋(8)、板状や人形の土製品(15・16)や耳かき状の銅製品(17)や寛永通宝(18)は近世後半期とみてよからう。瓦溜SX1にともなった数少ない資料のうち、土瓶の注口部(14)は棧瓦と同時期の幕末期とみて差し支えないが、ともに出土している陶器摺鉢片(13)は、黒灰色の堅緻な焼成で、中世にさかのぼる備前製品の可能性がある。このように陶磁器類は、残念ながら質・量ともに土佐藩白川邸の生活状況を明らかにできるような内容には乏しいといえる。

**石製品** 瓦溜SX3からは、10～30cm程度の塊状や板状に割れた花崗岩片が棧瓦に混在して出土し、整理箱の半分程度になる量が回収されている。また、出土状況の写真では、SX1・SX2にも同様な石片が混在していた様子がうかがわれるが、現存していない。回収されている石片には、面をもったり段状の加工を認めるものが含まれ、ここでは最も残りの良い状態のものを呈示する(図4-19)。この資料は石臼などの一部かとみられるが、このほかには凸状の加工を施したかとみられるような石片も含まれる。燈籠や手水鉢など、別種の石製品があった可能性もあろう。

**鉛製銃弾** 5点確認されている(図5)。1が攪乱、2が近世ピットのSP48、3～5が青灰色土からの出土。いずれも鉛製弾とみられ白色を呈する。ミニエー銃と総称されている銃の一種に使用されたエンフィールド銃弾と呼ばれる範疇の製品で、本来は椎の実形を呈していたと考えられるが、1～4は著しく先端がつぶれて扁平にひろがる形状となる。5は本来の形をとどめているが、裾部がひしゃげている。こうした変形の特徴から、いずれもこの地で試し撃ちに供されたのであろう。以下それぞれ現況の法量を列挙すると、

- 1：全長20.5mm，最大径14.4mm，重量31.3g
- 2：全長18.5mm，最大径15.7mm，重量28.7g
- 3：全長17.4mm，最大径15.1mm，重量32.7g
- 4：全長21.5mm，最大径15.9mm，重量30.9g
- 5：全長29.3mm，最大径14.6mm，重量31.1g

となる。挿図では特徴的な面を2面選び呈示した(90度回転面か180度回転面)。

なお、近隣での同種銃弾の出土として、病院構内で3例〔千葉・長尾2014 pp.60-61〕、同志社今出川キャンパスで7例〔同志社大学歴史資料館編2014 p.214〕が報告されている。前者は幕末期～明治初期における会津藩とその後の新政府操練場、後者は幕末期薩摩藩邸に関連付けられる地点である。今回の事例も含めると、幕末期頃の藩邸施設においては銃器の存在と使用が珍しいものではなかった状況がうかがえる、といえよう。

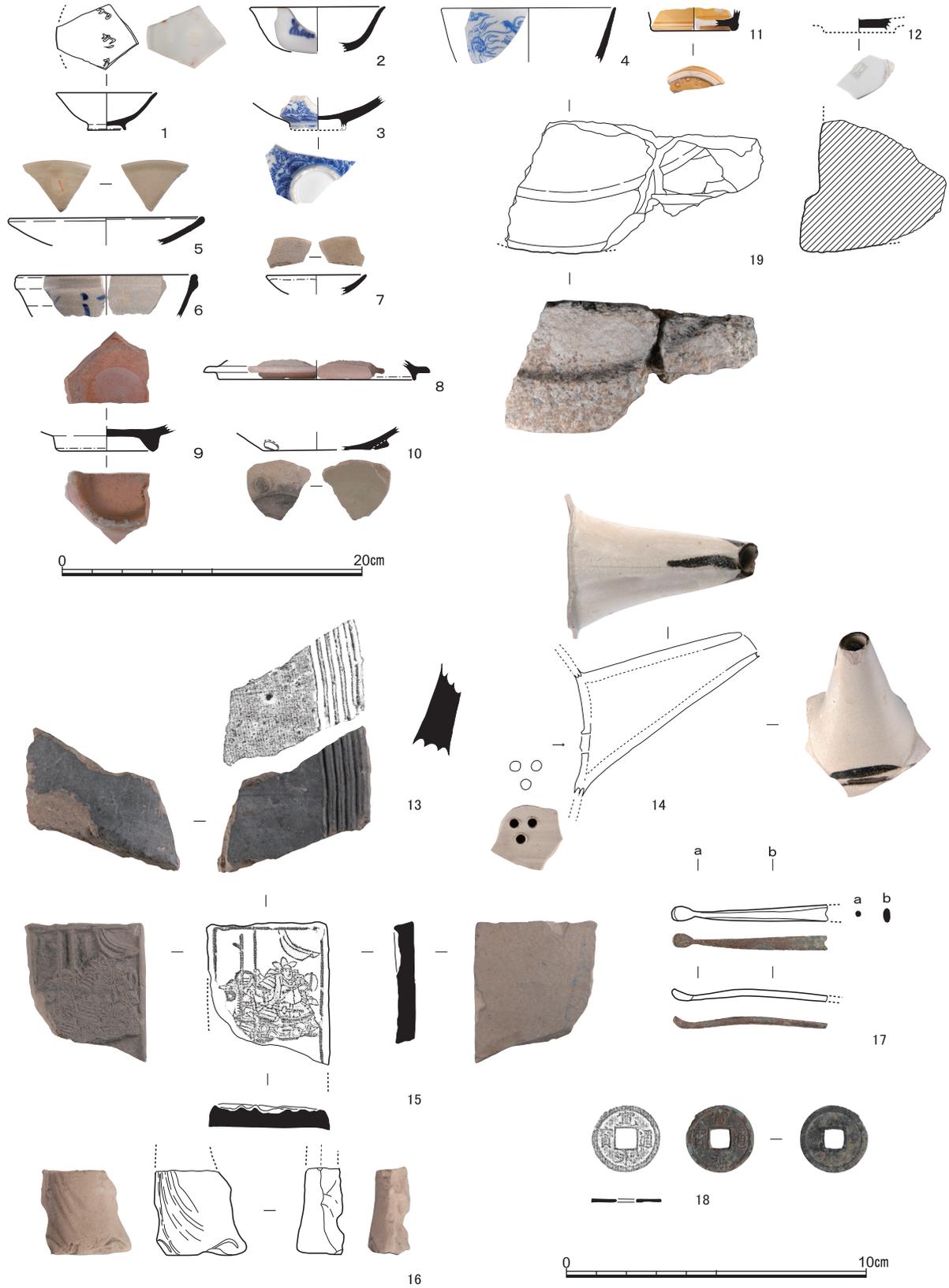


図4 表土・攪乱出土遺物（1～3・12磁器，5・6・9～11陶器，15・16土製品），青灰色土出土遺物（4磁器，7・8陶器，18寛永通宝），耕作溝出土遺物（17銅製品），S X 1出土遺物（13・14陶器），S X 3出土遺物（19石製品） 13～18は縮尺1/2，ほかは縮尺1/4

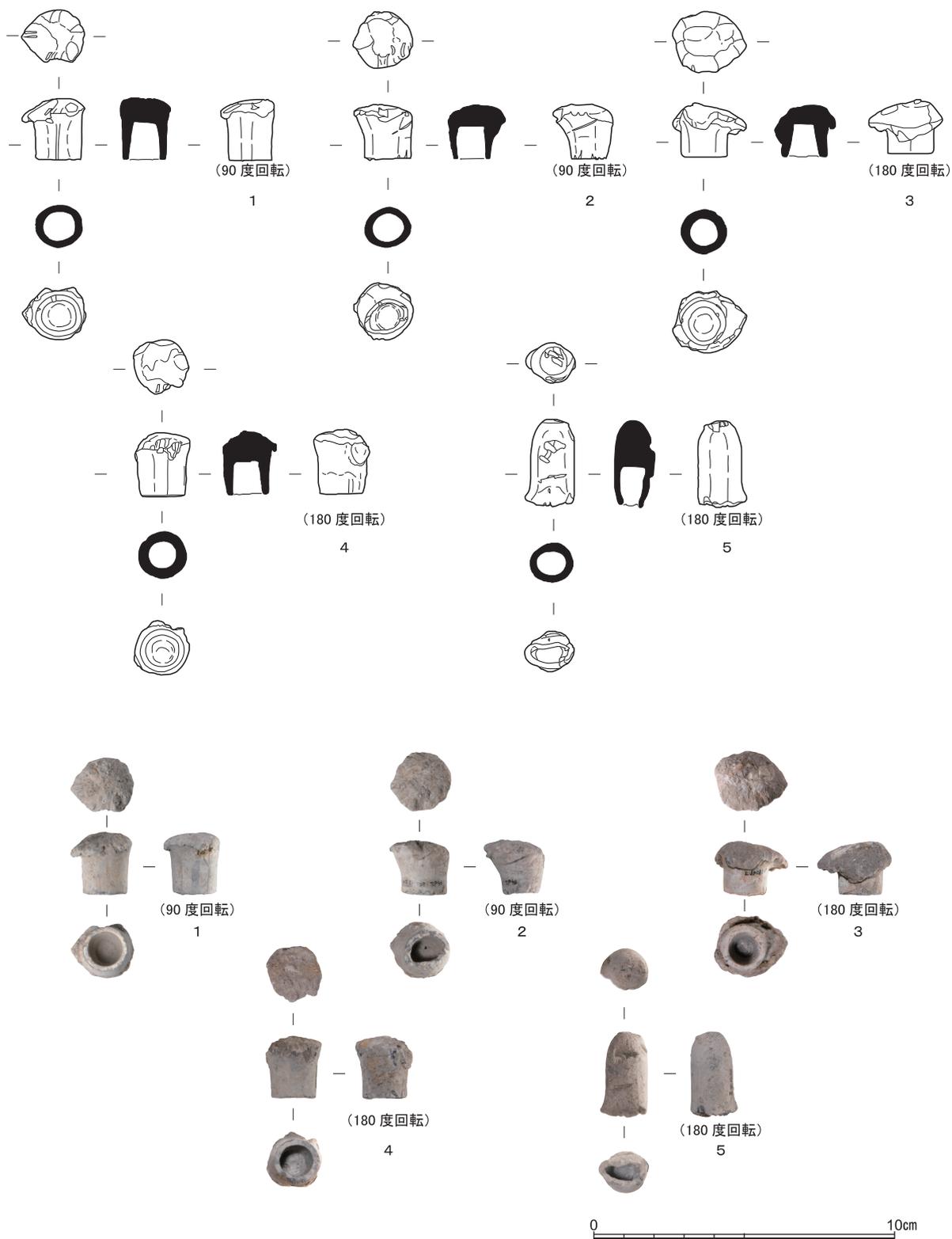


図5 鉛製銃弾 縮尺1/2 (1:攪乱, 2:近世ピット, 3~5:青灰色土出土)

## 5 近世の出土遺物その2：瓦磚類（図6～図17）

整理箱に15箱の瓦磚類は、幕末期の土佐藩白川邸に用いられていたものである。1992年度のBA28区（208地点）の調査で大量に出土した棧瓦を中心とした資料は、刻印も含めて詳細に報告・分析されている〔浜崎<sup>ほか</sup>1995 pp.91-105〕。ここではその報告にならいつつ、おおまかな種類ごとに順次呈示していく。刻印の内容や出土点数については、その後にあらためて考察を加える。なお、瓦磚類はそれのみで1～124までの通し番号を付し、各資料の出土遺構や層位は（表3）にまとめている。

**軒棧瓦・軒平瓦（1～24）** 瓦当文様をもつ軒瓦のうち刻印の確認できるものを（図6-1～5）に、確認できないものを（図6-6～19・図7-20～24）に示す。後者は遺存度から本来的になかったのか欠失しているのかは決めがたい。また、軒棧瓦か軒平瓦かを確実に判別可能な個体は2と12のみにとどまる。

1と6は三つ巴文を中心飾りとする均整唐草文。同種の瓦当文様は、巴の巻く方向を違えるものを含めて北部構内で多数が確認されており、土佐では19世紀以降主流となるとされる〔渡邊2017〕。刻印は文様区左脇に押されている。BA28区の所見によると、刻印は、軒右棧瓦では文様区の左脇、軒左棧瓦では文様区の右脇すなわち山形になる方側に押捺されることを通有とする。1は向かって右端面側は遺存するものの、左端側が欠失しているため軒棧瓦かどうか決め手を欠くが、刻印位置と左右の比率を考慮すると、軒右棧瓦であった可能性が高いだろう。6は両側面が欠失して刻印の有無も定かでは無いが、右側に向かって瓦当幅が広まる傾向がうかがえるので、棧部の高まりが右側にくる軒左棧瓦となるかもしれない。

2は瓦当面がほぼすべて残っており、軒平瓦であるとわかる。宝相華文風の中心飾りをもつ均整唐草文で、文様区に向かって右脇に刻印をもつ。これまで北部構内では確認されていない瓦当文様で、10も同文様の小片である。範は異なるが同種の中心飾りについては、高知市弘人屋敷跡の攪乱出土とされる軒平瓦に認めることができる〔高知県文化財団埋蔵文化財センター編2014 第12図h118〕。

3～5はいずれも小片で、軒棧瓦かどうかは決めがたい。3は文様区の右脇、4と5は左脇に刻印をもつ。

7～9は中心飾りが橘文となるもの。それぞれ範は異なる。この橘状の中心飾りをもつモチーフは、いわゆる「大坂式」を特徴づけるものとして知られており〔金子1996〕、208地点でも2点出土している〔浜崎<sup>ほか</sup>1995 図63IV212・IV213〕。土佐では近世前半期には大坂より瓦が搬入され、この種のモチーフが広く認められているが〔山崎2008 pp.149-158〕、後半期の在地生産による刻印瓦には、この種のモチーフは認められなくなる〔渡邊2017〕。既出の2点とここでの3点ともに、刻印の有無は不明だが、7は瓦当幅が他と較べてかなり狭いもので、また器表面の離れ砂のざらつきが著しい。また、9も焼成がやや甘く白っぽい色調を呈している。このように形状や質感に他と異なる特徴が認められることを考慮すると、これらの産地は土佐ではない可能性も考えておく必要がある。この点は、刻印の問題も含めてあらためてとりあげる。

11～19は、瓦当の唐草文の一部が把握できる軒瓦片。12は左側の棧部が残っており、軒右棧瓦とわかる。16の崩れて巻かない唐草文の末端は、208地点出土の桐葉文を中心飾りとする軒平瓦と同文であろう〔浜崎<sup>ほか</sup>1995 図64IV219〕。

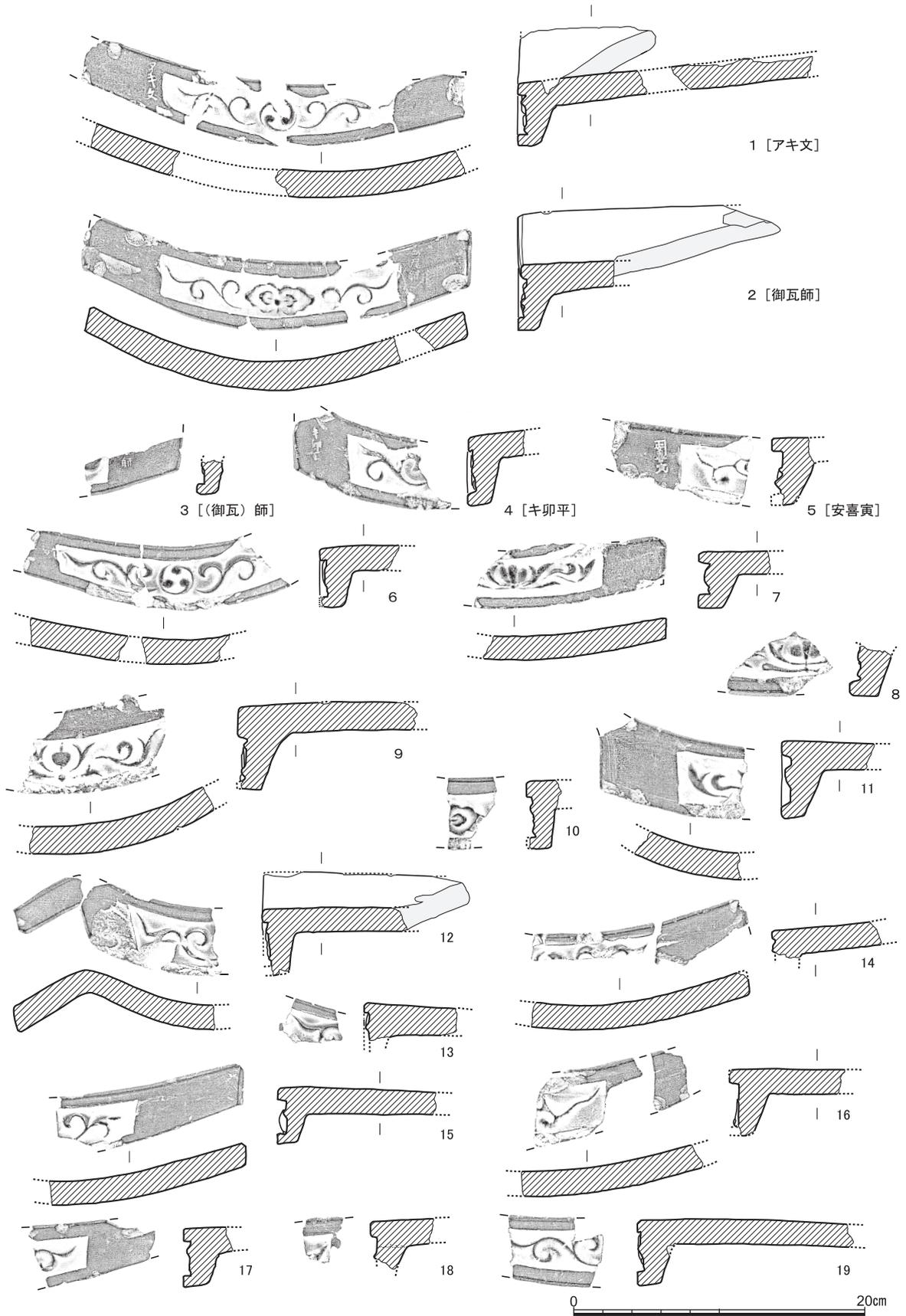


図6 軒瓦 (刻印あり) (1・3～5), 軒平瓦 (刻印あり) (2), 軒瓦 (刻印なし) (6～19)

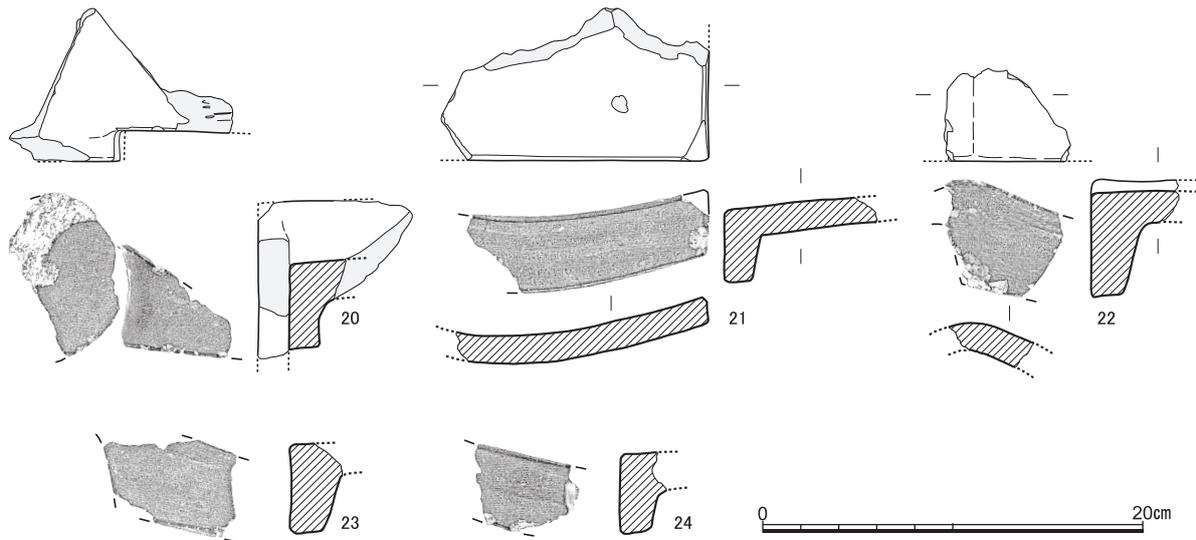


図7 軒瓦（模様なし）（20～22），軒瓦（模様不明）（23・24）

20～24は文様の確認できない軒瓦。いずれも軒棧瓦とみられ、20には偏平な小丸瓦当の一部が残り、石持軒瓦とも呼ばれているものだろう。21は無文の右半部。22・23は棧部の盛り上がり部分の破片で、瓦当の左側面が遺存している。24は左半部とみられる小片。いずれも残存範囲に刻印は確認できない。

**刻印ある棧瓦・平瓦・丸瓦（25～55）** 刻印の確認できる瓦類をまとめて示す。208地点の所見では、棧瓦の場合、頭部側の平部端面に、右棧瓦の場合向かって左向き、左棧瓦の場合はその逆に刻印を押すことが基本となることが判明している〔浜崎ほか1995 p.101〕。ここでも、棧部や隅の切り込みが遺存して棧瓦と認定できる28・30・32・34・38・47・49のうち、銘が判読できるものはその約束事を踏襲している。その他は遺存率の悪さから棧瓦か平瓦か判別できない。なお、38にみられる枠囲みの刻印「中佐」銘と、右棧瓦の棧部端面とみられる39の○囲みで「イ」の刻印は、ほかに出土例のない刻印である。

また、40は丸瓦の凸面に、長軸に直交する向きで枠囲み「谷川丸市」の刻印が押される。この資料と刻印については、すでに紹介と検討が加えられており〔笹川2018 注(20)、および笹川編2020〕、和泉で生産されたいわゆる谷川瓦に相当するものと考えられている。土佐藩白川邸が大阪の住吉陣営より移築されたものという履歴からみて、土佐で生産された瓦に加えて、大阪で調達された瓦が含まれることは不自然ではない。これらの問題もあらためて後述したい。

**鬼瓦類（56～63）** 多数の破片があるが、大型品の同一個体である可能性もある。本来の形状は復元しがたいが、仮に大型品であれば参考図のような形態を候補のひとつとして呈示しておく。56は、雲形に巻き込むような意匠の部分で、裏側の筒状となる部分内面には、筋状の圧痕が顕著に残されている。幅広の巻き簾状のものが丸い内型に用いられたものとみられる。表側の装飾部の境となる内面には強い撫でがあり、裏側の筒状部と接合して組み合わせていることがわかる。57～63は、そうした、装飾部の部分とみられるが、部位は特定は難しい。いずれにも刻印は確認されていない。なおこのなかで58は、蒲鉾形の隆帯を貼り付けた板状の破片だが、裏の側とみられる未調整の面には切り合う複数刻線がある。遺存範囲が狭く判然としないが、籠描の刻字であった可能性がある。

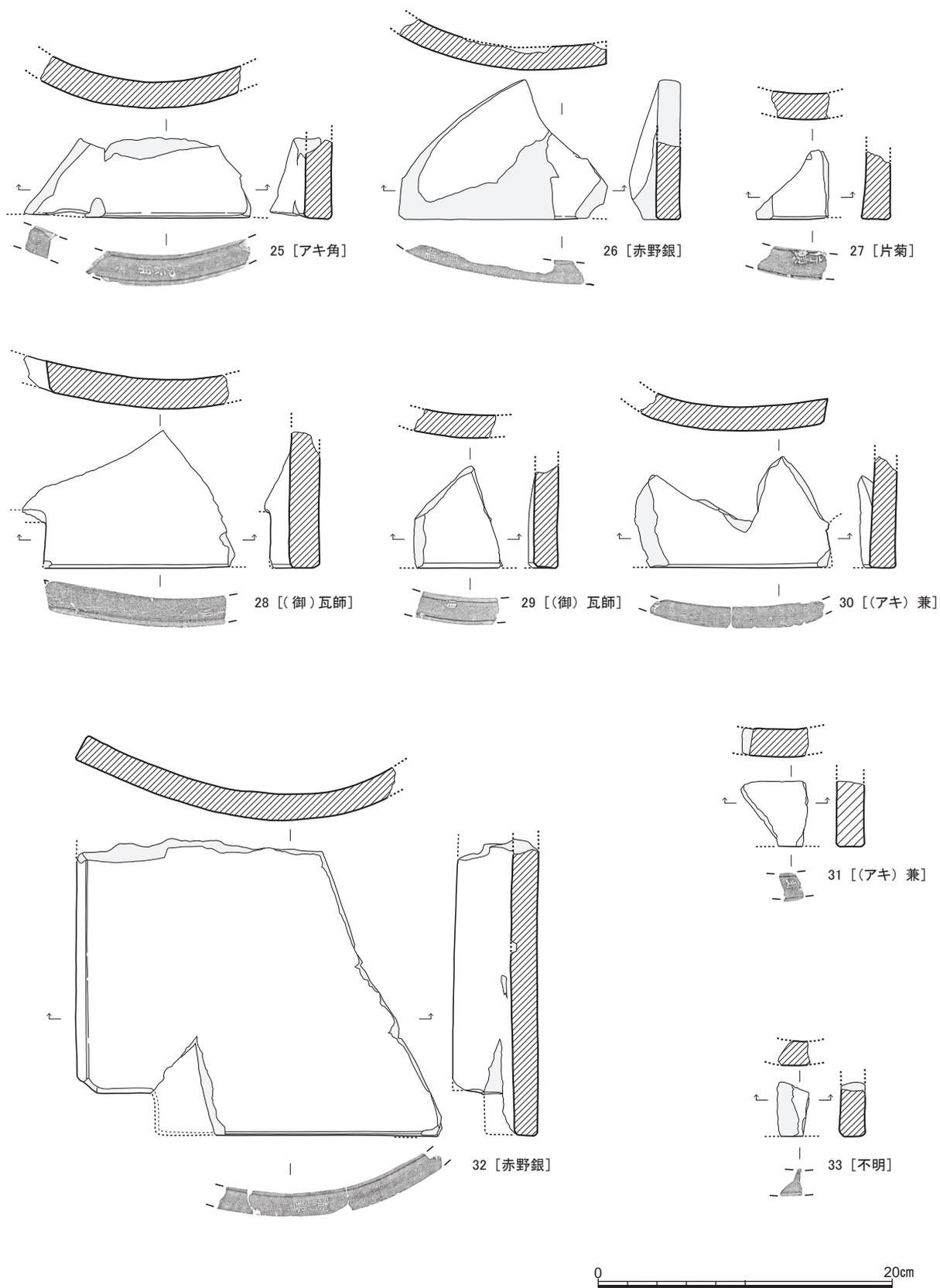


図8 SX1出土刻印瓦(25~29), SX3出土刻印瓦(30~33)

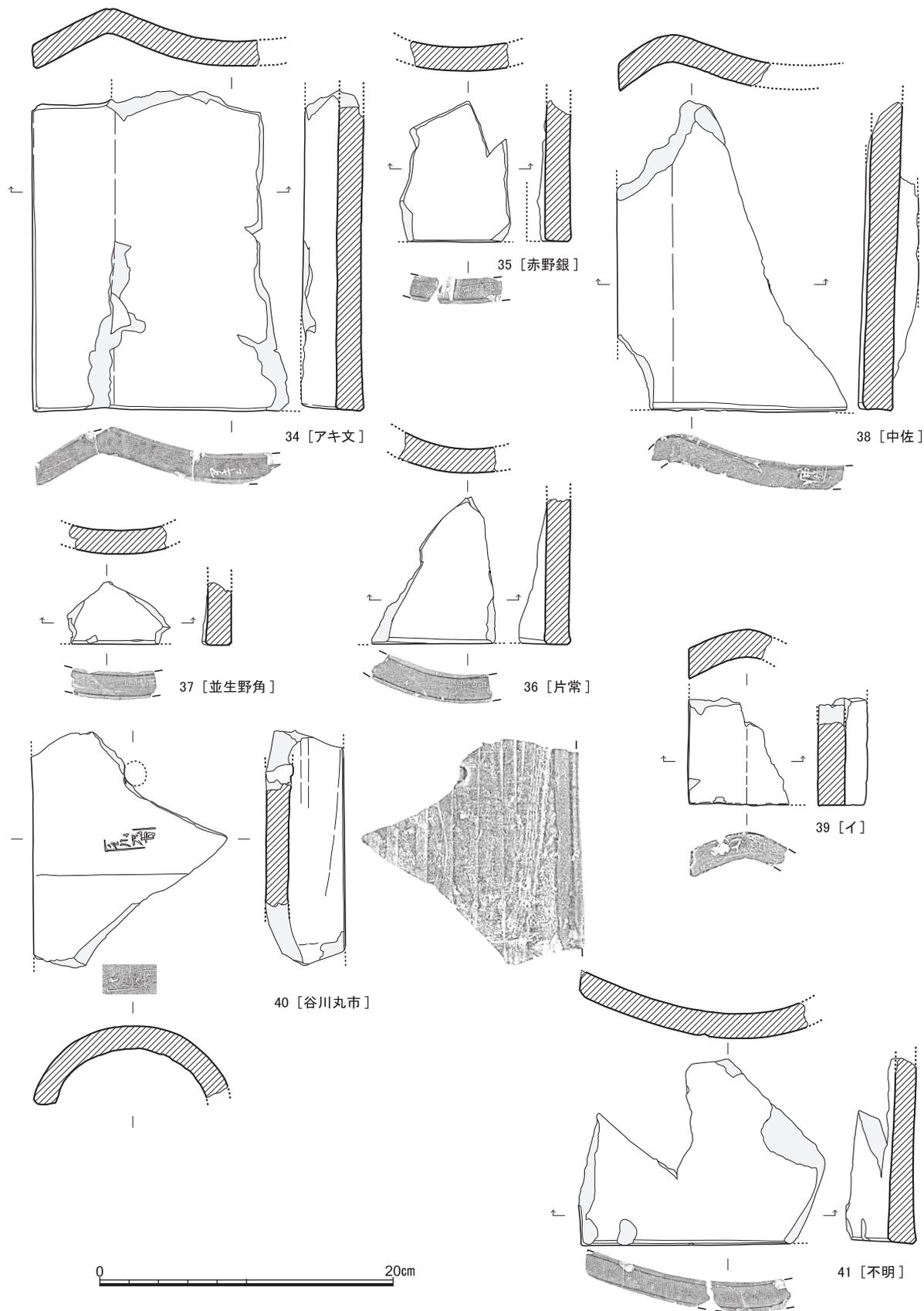


図9 SX4出土刻印瓦(34~41)

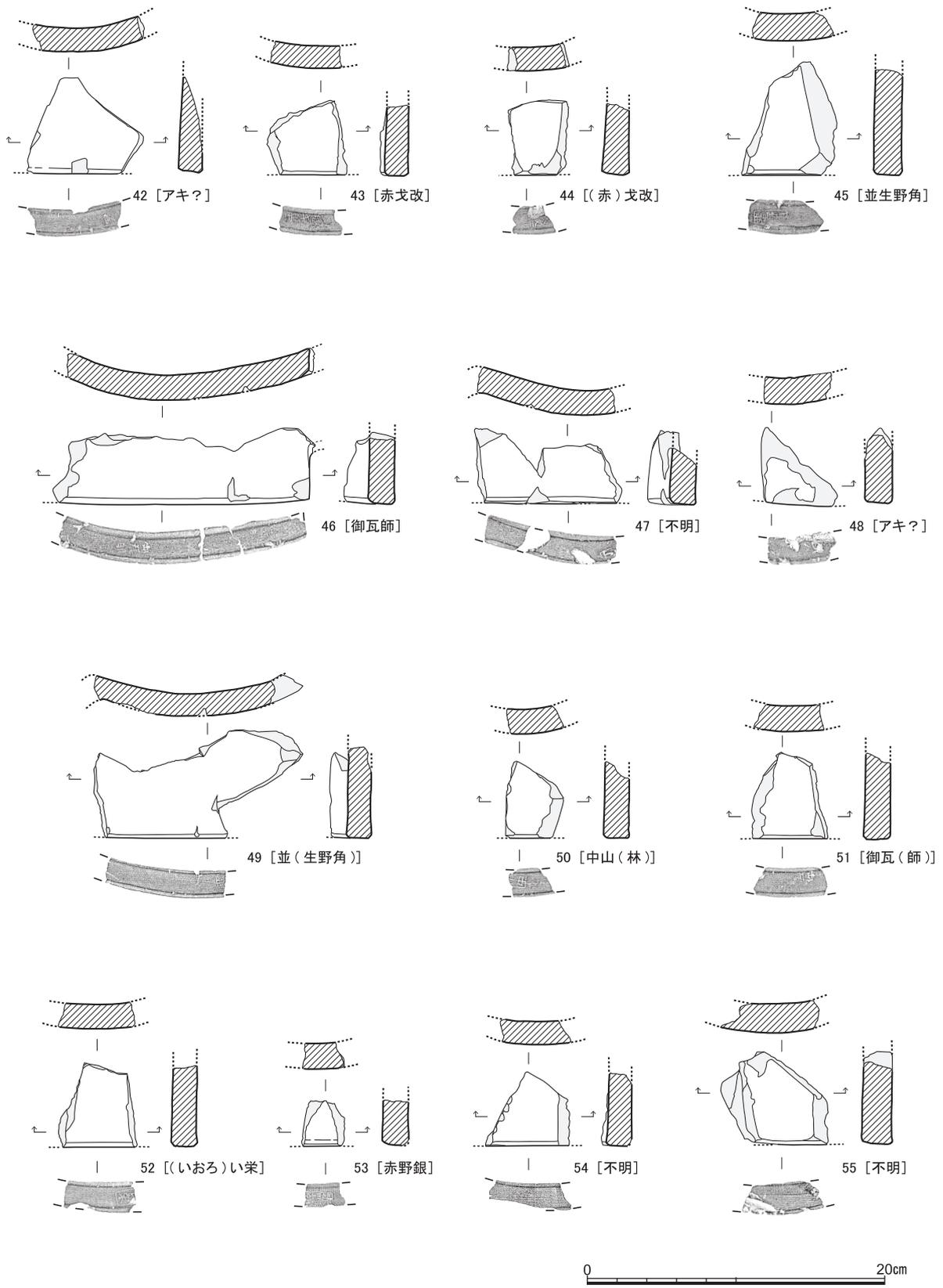
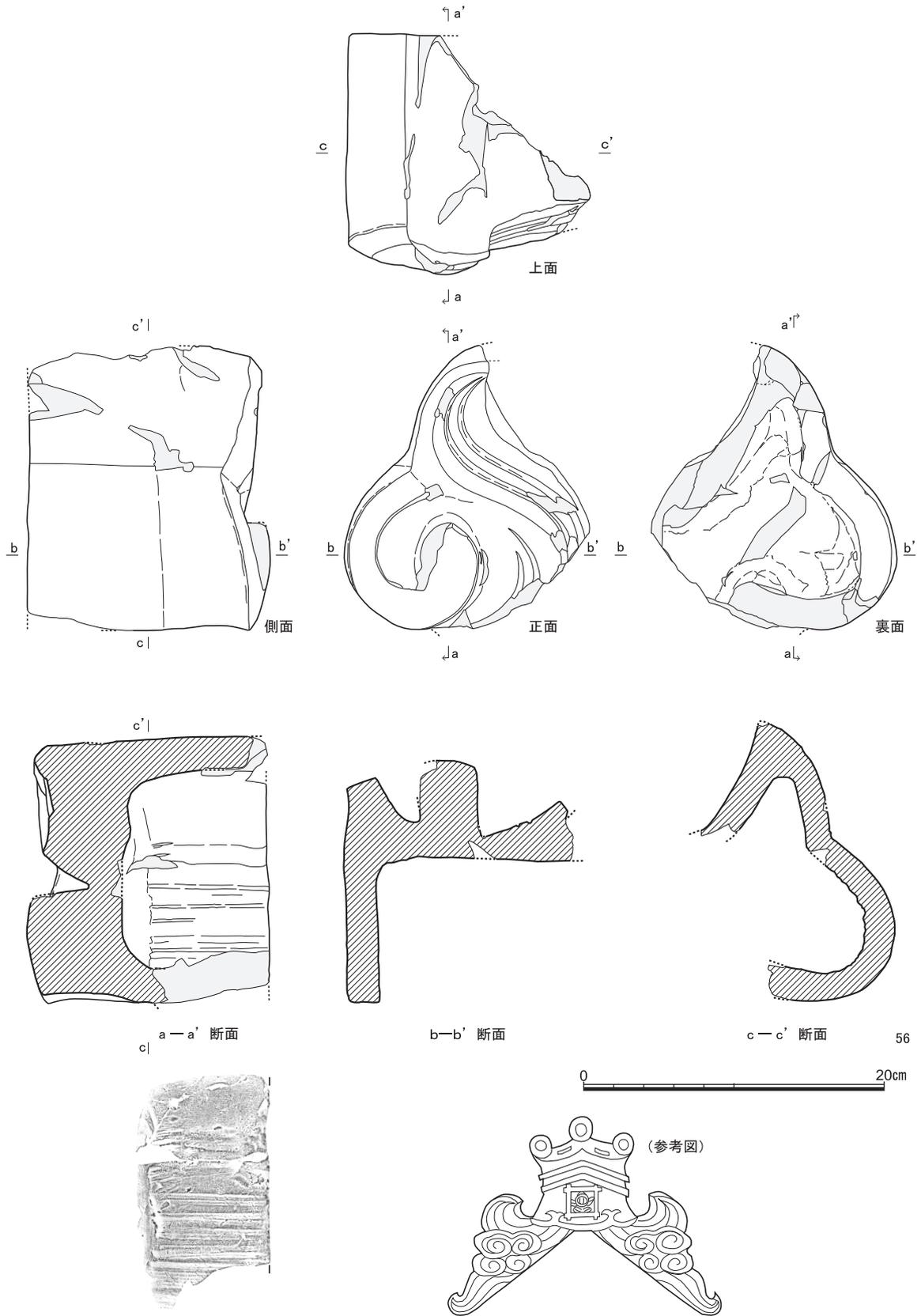


図10 暗褐色砂質土出土刻印瓦 (42～47), 盛土Ⅲ出土刻印瓦 (48～52), 青灰色耕土出土刻印瓦 (53～55)



類例：経の巻き蛇の目蕨形大棟鬼（『日本の瓦屋根』理工学社 1976 より p.66 参照）

図11 鬼瓦類の一部(1) (56 : S X 4 出土)

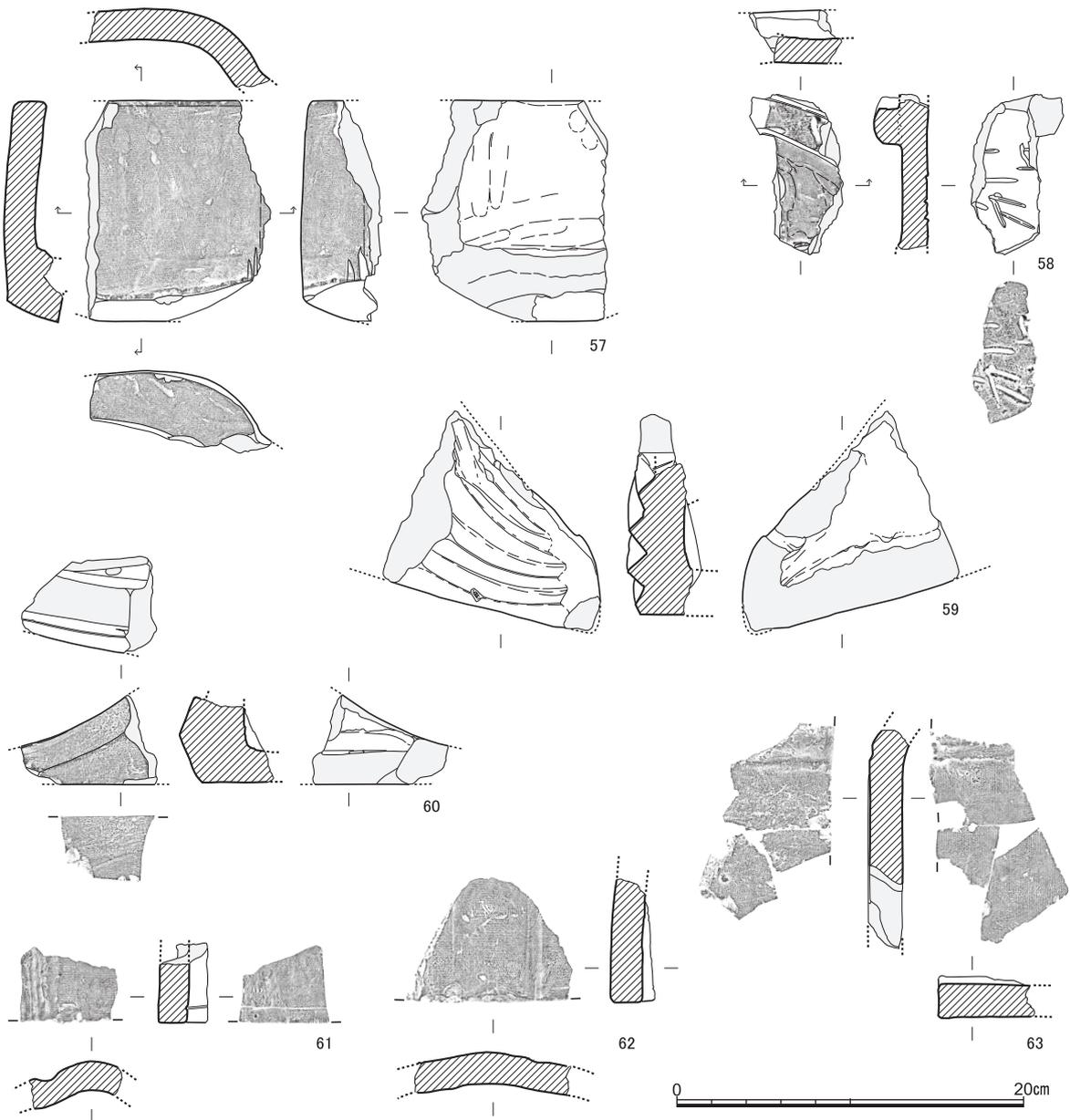


図12 鬼瓦類の一部(2) (57～63)

**塀棧瓦 (64～83)** 葺き接ぎのための棧を端部に一部重ねて段状に接合した板状の平瓦。塀などに用いられている棧瓦で、現在工業的には「目板瓦」などとも呼ばれている。208地点では1点のみであったが、ここでは多数の破片が出土している。ただし、刻印を確認出来るものは無い。

最も残りの良い64でみると、左右幅は28cm、うち棧部幅は6.7cm、2cm強が平瓦面との接合部で、4cm程度が重ね葺きの突出部分となる。棧が接合されている面には、棧と反対側で端部から4cmの位置に2条の刻線が天地方向に鋭く施される。この刻線の位置は、ちょうど重ね葺きした場合の隣接瓦の棧部端にあたることから、雨水を流すための工夫であったものと思われる。塀棧瓦における同様な刻線は、時期が若干遡るが、仙台城二の丸第6次地点で大量に出土した塀棧瓦に認めることができる〔東北大学埋蔵文化財調査委員会編1990 pp.30-37〕。

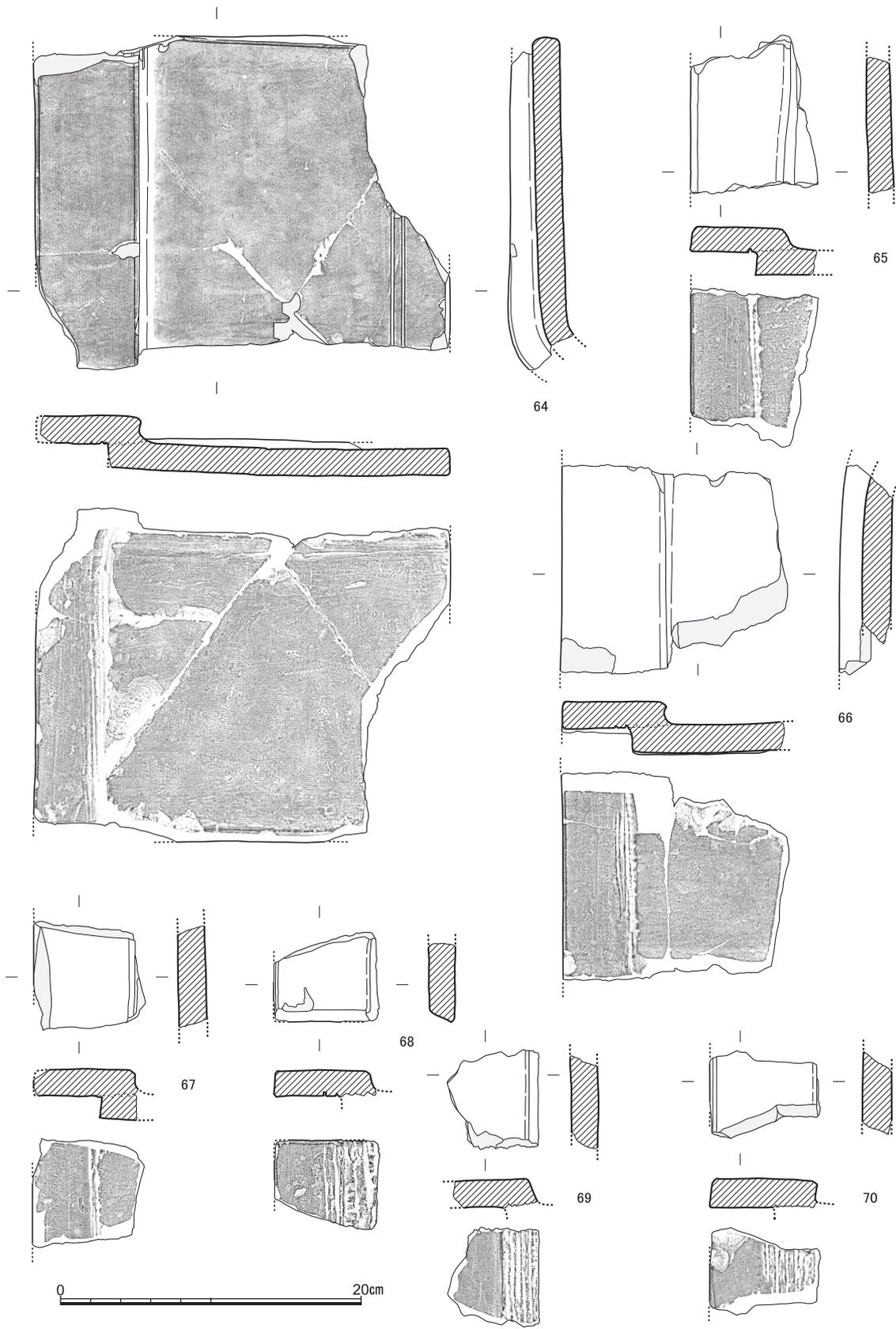


図13 塀棧瓦(1) (64 ~ 70)

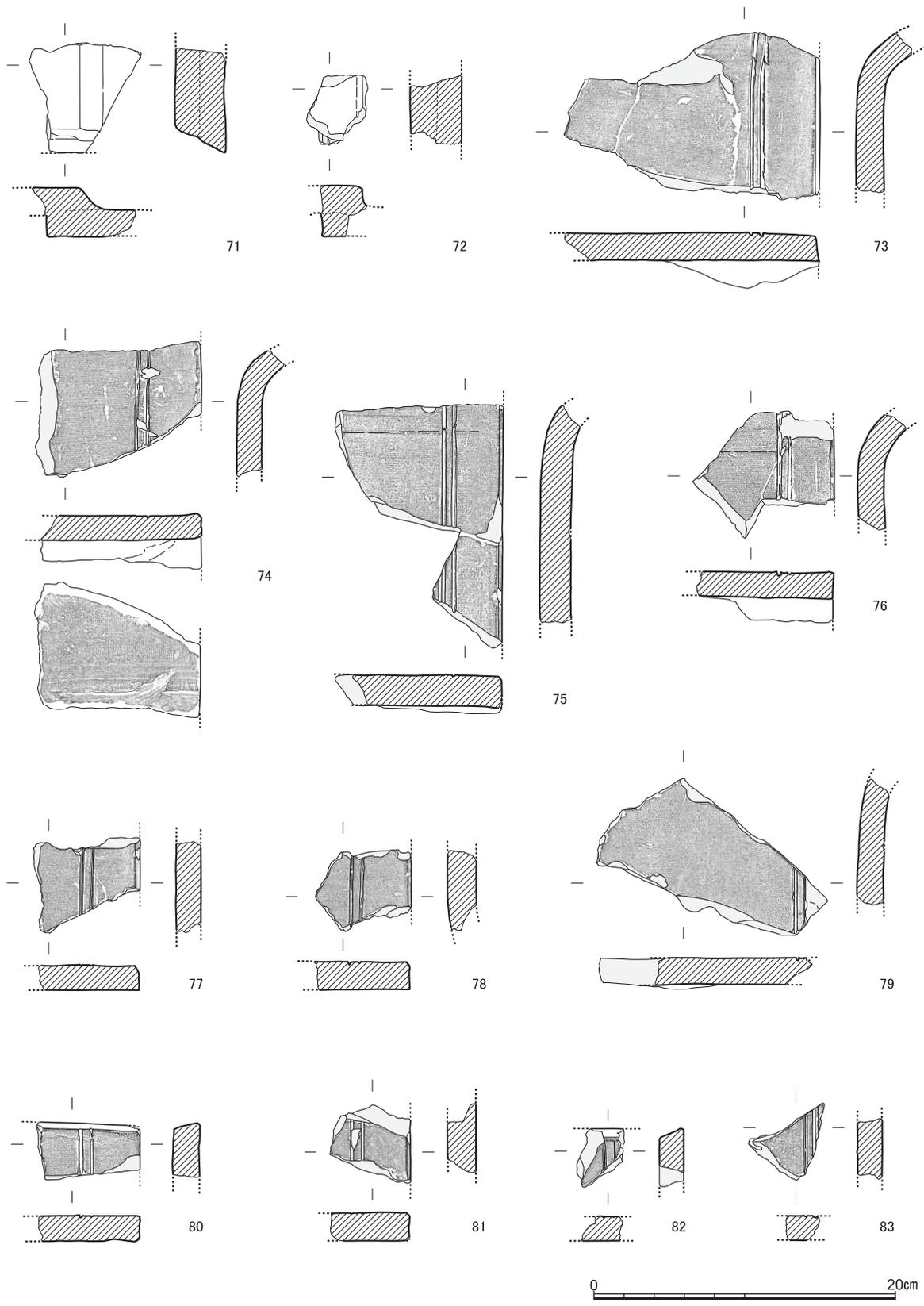


図14 塀棧瓦(2) (71～83)

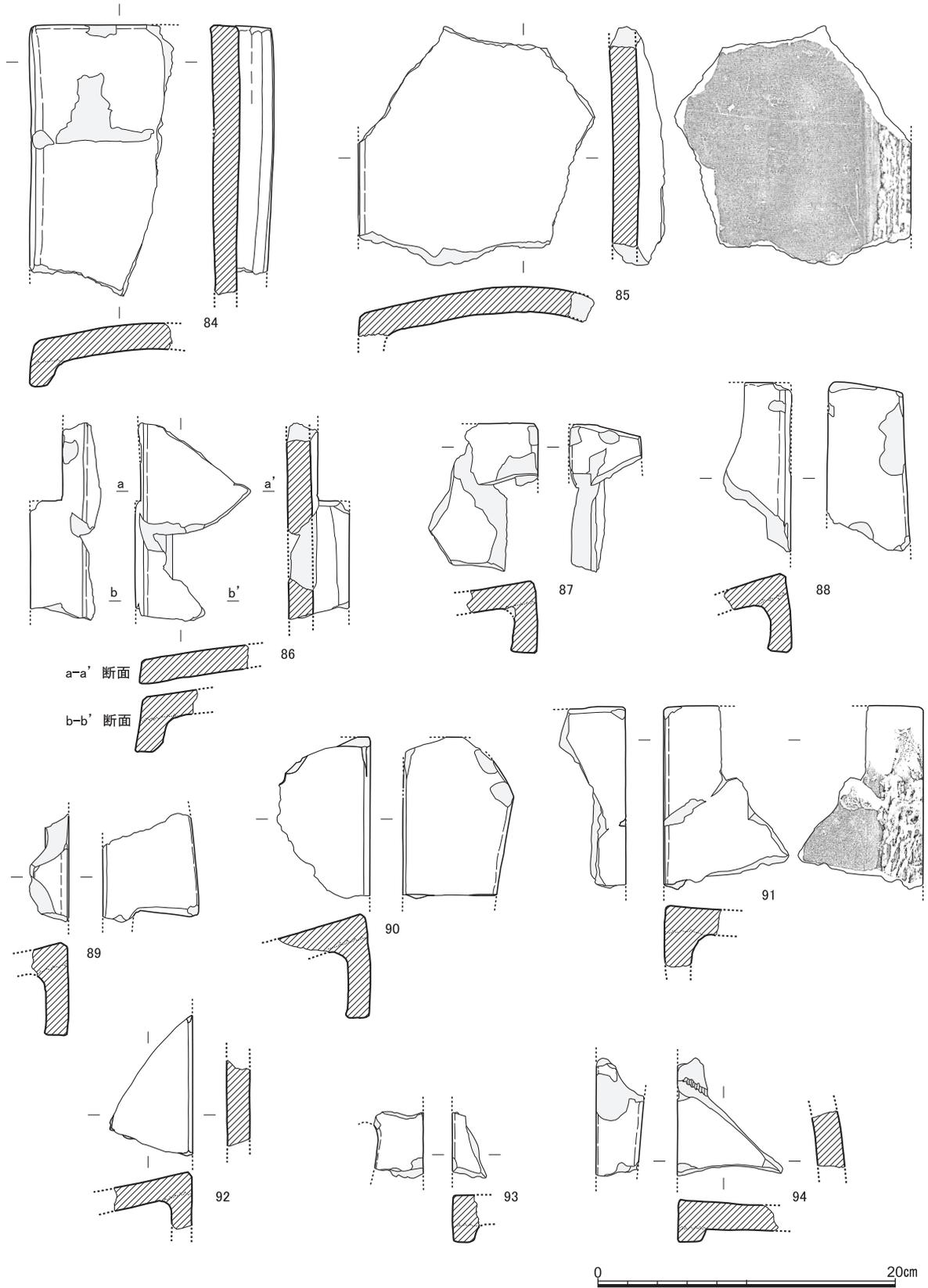


図15 伏間瓦・熨斗瓦・袖瓦等 (87～94)

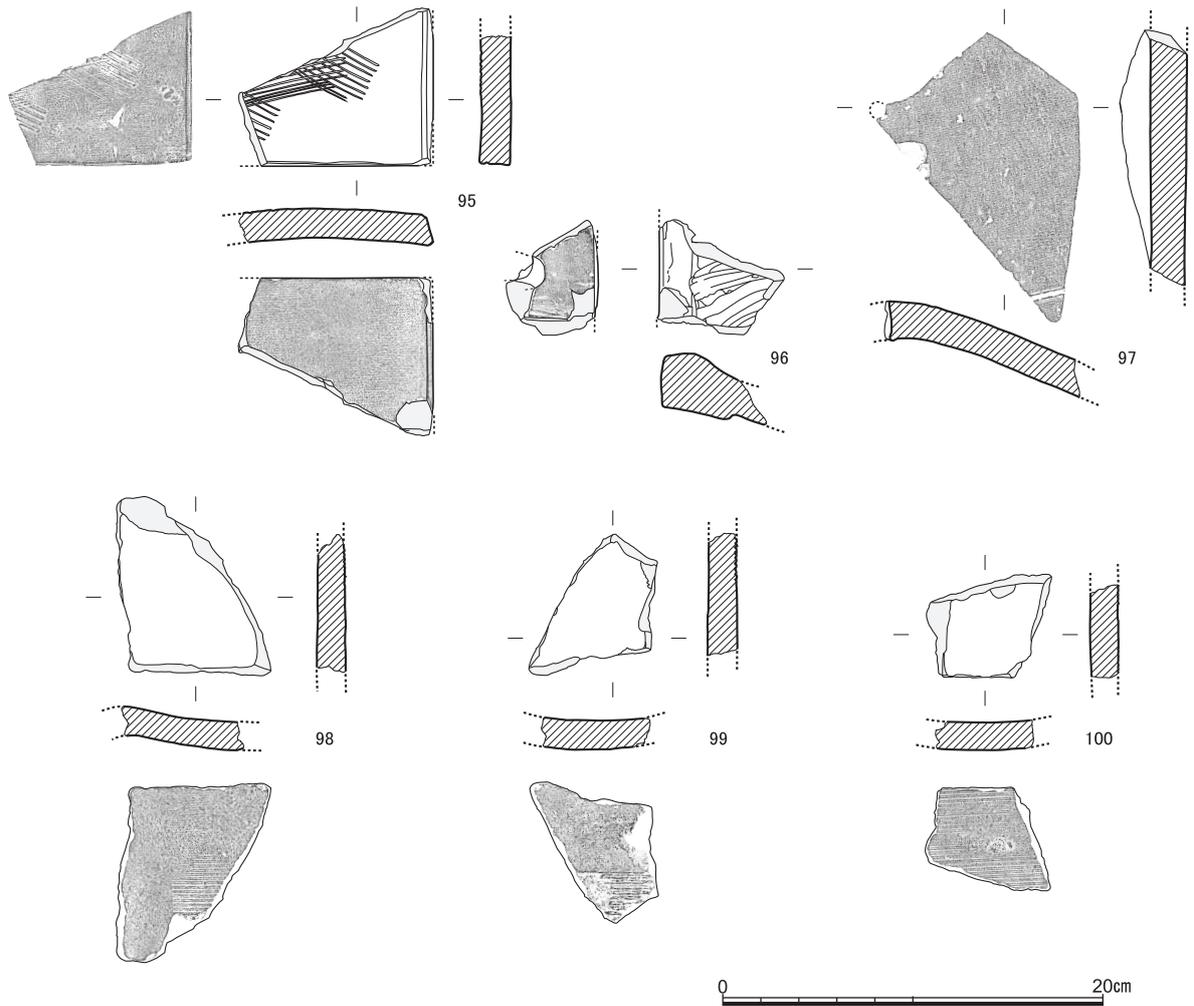


図16 その他の瓦 (95～100)

あわせて特徴的な点は、天地方向で見ると、棧も含めて片側が湾曲する形態を呈することである。湾曲する側の端部まで残る破片は出土しておらず、最終的な湾曲の程度や端面の調整を知ることができないが、反対の平坦部側の端面は磨いて仕上げられている。この平坦部側の端面を下にして、湾曲する側を上棟側として葺くことが自然かと想定するが、類例の出現を待って結論づけたい。

なお、68～70の剥離部分の破片からわかるように、棧部と平瓦部の接着強度を増す工夫として、篋描直線の掻き目を密に施す対処がされている。BA28区の出土品では斜格子刻みとされており、今回とは手法が異なっている〔浜崎ほか1995 図67-IV238〕。

**伏間瓦・熨斗瓦・袖瓦等 (84～94)** 屋根の棟や端などに用いたものかと思われるような、屈曲した端部が認められる瓦片をまとめている。屈曲部は、いずれも接着部分の強度を増すために粗い掻き目を施したうえで部材を貼付けており、幅や角度はさまざまである。84はやや鈍角に幅の狭い屈曲部を貼付し、平瓦部は丸みを帯びる。85も、剥離しているが同種の瓦であるとみられる。86はやや屈曲部が幅広となり、切れ込みが施されているほか、平瓦部も直線的である。これらは、棟頂部の伏間瓦や棟に積む熨斗瓦となるものだろう。一方で87～92は、屈曲部は幅広で鋭角に近く貼り付けられており、89には切れ込みが認められる。これらは、棧瓦葺き屋根の端部などに用いるような袖瓦とな

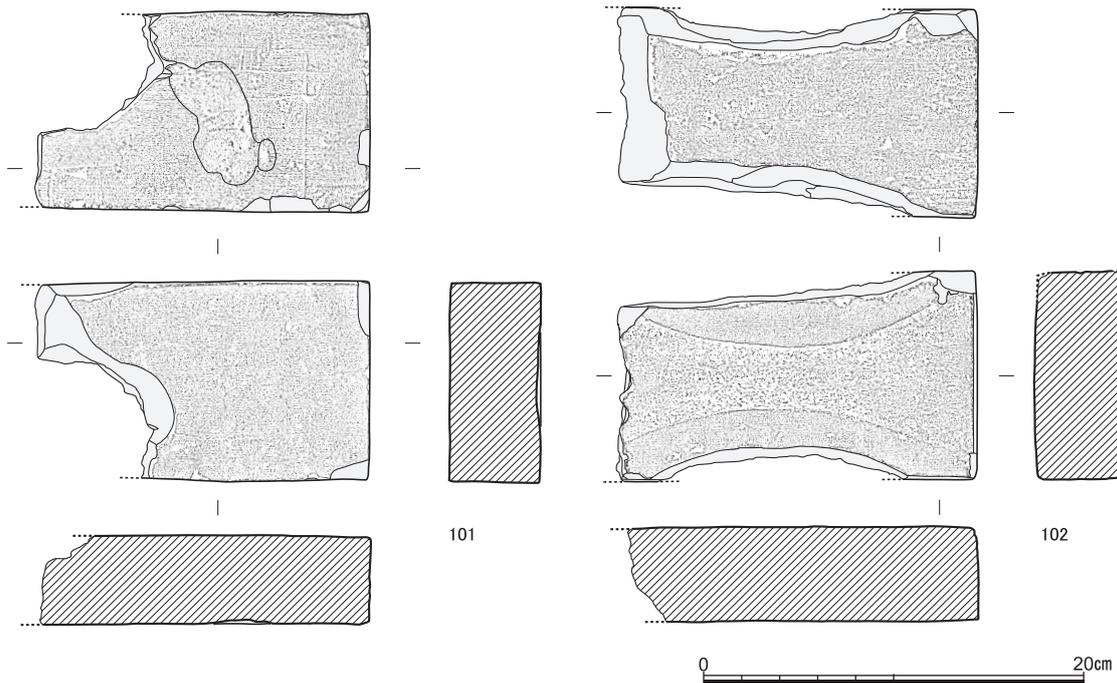


図17 磚 (101・102)

るものだろう。93・94は幅の狭い直角の屈曲部が貼り付けられ、直線的な平瓦部をもつ。

93は切れ込みを施すようだが、遺存が少なく形状ははっきりしない。伏間瓦や熨斗瓦の可能性あるものとしてここに含めておく。

**その他の瓦 (95～100)** 種類や用途が決めがたい異形のものや、沈線や櫛目文の装飾のあるものをまとめた。95は、平瓦状の隅部分で、凸面側に斜格子状の櫛目文が施される。積み上げる際の滑り止めを意図したものであるとすれば、熨斗瓦とみることもできよう。96は、径1cmあまりの円孔があり、残存しているゆるやかな凹面は丁寧に研磨されている。複数の部材が接合された製品の部材のようで、接着のための粗い掻き目が他の面には残る。97は、ゆるやかな丸みを持つ瓦に釘穴と沈線を認めるもの。丸瓦状の形態であるとするれば、沈線は軸に直交する方向で施されていることになる。釘穴を中軸付近にもち、重ね葺きされる部位に水流し用の溝を施した伏間瓦とみることができるかもしれない。98～100は浅い櫛目文が横位に施される棧瓦片。表土や攪乱からの出土であり、時期が下るものであるかもしれない。

**磚 (101・102)** 堅緻に焼成された直方体の瓦質製品。型作りであろう。いずれも長辺は不明で、101は幅105mm厚さ47mm、102は幅110mm厚さ50mm。101は、片面が丁寧に磨かれて黒光りしており、表側になるとみられる。その反対面とすべての側面は未調整で、細かな離れ砂痕と長軸方向の微細な擦過痕が観察される。また反対面には、型造り時の圧痕かとみられる3×5cm大程度の窪みがあるほか、それを囲むようにごく浅い方形の圧痕が認められる。102は、101とくらべて焼成がやや甘く、軟質のざらついた質感となる。片面に鼓型に凹む明瞭な圧痕があり、この範囲に粗い離れ砂痕が顕著に認められる。その範囲外は丁寧に磨いて仕上げているため、こちらの面が表側かと推測され、全体が煤の付着により黒変している。鼓型の圧痕の由来や理由は定かにし難いが、長側面の両側から破損している遺存状況にも意味があるかもしれない。裏面や側面はいずれも未調整である。

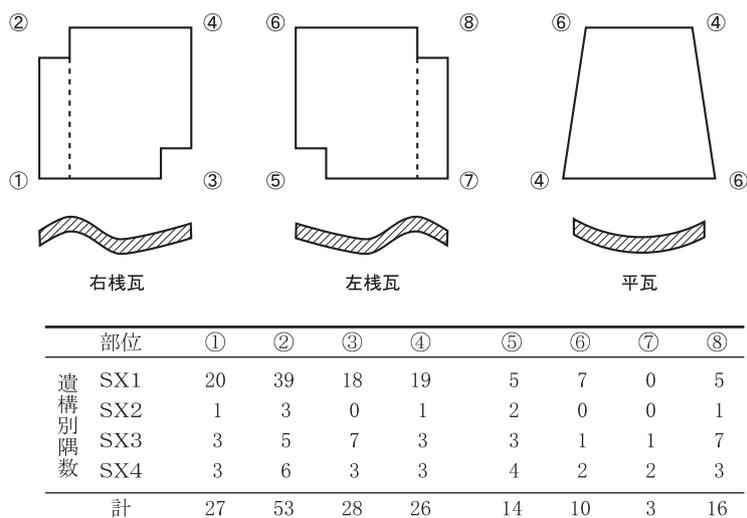


図18 軒瓦以外の遺構別出土偶数

**瓦の出土点数と左右棧瓦の比率** 以上のほかにも、残存範囲のうちでは刻印が確認出来ない棧瓦ないし平瓦の破片は多数出土しているが、図示は割愛し、ここでは、瓦溜出土の軒瓦以外について、刻印の確認出来るものも含めて偶数を示した(図18)。厳密なものとは言えないが、①～③や⑤⑦⑧は、棧瓦に固有の形状であると捉えると、右棧瓦では②の53点、左棧瓦では⑤の14点、が最大数であり、おおよそ左棧瓦：右棧瓦が1：4の比率となる。大量に出土しているBA28区SD1の刻印瓦415点から推定復元した場合は、左棧瓦・軒左棧瓦が右棧瓦・軒右棧瓦に対してそれぞれ43.8%と28.6%で存在すると報告されている〔浜崎ほか1995 p.102〕。対してこのBD30区の場合は、総出土量はBA28区の1割にも満たないものの、瓦溜ごとにみた刻印瓦数(表1)でも、左棧瓦比率の低い傾向はうかがえるだろう。そのあたりの傾向を総覧できるように今回は、BA28区に加えて、少量だが井戸等から刻印瓦が出土しているBC28区(276地点)〔伊藤ほか2005〕のデータも加えて、刻印瓦出土点数の集計表も作成している(表2)。ここにおける刻印番号の1～23と分類のa～gはBA28区に準じるものであり〔浜崎ほか1995 pp.97-100〕、24～28とhはそれ以後確認されたものに今回の報告で付加したものである。

## 6 課題と展望—大坂式瓦当文や新たな刻印銘の存在から—

以上示してきたように、BD30区出土の幕末期と目される瓦は、既存の刻印銘が再確認されつつも、土佐の棧瓦を特徴づけるような左棧瓦の比率は低い傾向にあり、また鬼瓦や塀棧瓦など特異な瓦を多く含んでいることを、知ることができた。従来は、BA28区の調査成果から、白川邸の瓦は土佐からの遠距離搬入の印象のみで語られ、幕末期における流通のありようを示す事例とされてきた〔上原1997 p.137〕。それらが多数を占める傾向は確かに変わらないかもしれないが、その比率はもう少し冷静に見積もりながら評価を下す必要を、今回の成果は示していると思われる。既出であった「住瓦庄」に加えて「谷川丸市」銘が確認され、また、大坂式とされる瓦当文をもつ質感の異なる軒瓦が一定量存在する、という状況からは、最初の建設地である住吉、あるいは移設後の京においても、一定量の補充がなされたことを示している<sup>(1)</sup>。今後は、それらがどのような由来と内容を持ち、いか

表1 調査区内出土刻印瓦一覧

[S X 1]									
番号	分類	刻印銘	軒平瓦	軒瓦	棧右	棧左	丸瓦	不明	計
2	a	アキ文	0	1	0	0	0	0	1
3	a	アキ角	0	0	0	0	0	1	1
4	a	アキ卯平	0	1	0	0	0	0	1
	a	アキ?	0	0	0	0	0	1	1
5	b	安喜寅	0	1	0	0	0	0	1
7	c	赤野銀	0	0	1	0	0	0	1
8	c	赤戈改	0	0	0	0	0	2	2
14	d	片菊	0	0	0	0	0	1	1
16	e	並生野角	0	0	0	0	0	1	1
20	g	御瓦師	0	0	1	0	0	0	1
20	g	御瓦師	0	0	0	1	0	1	2
28		判読不能	0	0	1	0	0	0	1
		計	0	3	3	1	0	7	14

[S X 3]									
番号	分類	刻印銘	軒平瓦	軒瓦	棧右	棧左	丸瓦	不明	計
1	a	アキ兼	0	0	1	0	0	1	2
7	c	赤野銀	0	0	0	1	0	0	1
28		判読不能	0	0	0	0	0	1	1
		計	0	0	1	1	0	2	4

[S X 4]									
番号	分類	刻印銘	軒平瓦	軒瓦	棧右	棧左	丸瓦	不明	計
2	a	アキ文	0	0	1	0	0	0	1
7	c	赤野銀	0	0	0	0	0	1	1
11	d	片常	0	0	0	0	0	1	1
16	e	並生野角	0	0	0	0	0	1	1
24	f	中佐	0	0	1	0	0	0	1
20	g	御瓦師	1	1	0	0	0	0	2
26	g	㊦	0	0	1	0	0	0	1
27	g	谷川丸市	0	0	0	0	1	0	1
28		判読不能	0	0	0	1	0	0	1
		計	1	1	3	1	1	3	10

[青灰色耕土]									
番号	分類	刻印銘	軒平瓦	軒瓦	棧右	棧左	丸瓦	不明	計
7	c	赤野銀	0	0	0	0	0	1	1
		判読不能	0	0	0	0	0	2	2
		計	0	0	0	0	0	3	3

[表土・攪乱]									
番号	分類	刻印銘	軒平瓦	軒瓦	棧右	棧左	丸瓦	不明	計
	a	アキ?	0	0	0	0	0	1	1
16	e	並生野角	0	0	1	0	0	1	2
19	f	中山林	0	0	0	0	0	1	1
20	g	御瓦師	0	0	0	0	0	1	1
21	g	いおろい栄	0	0	0	0	0	1	1
		計	0	0	1	0	0	5	6

なる理由により補われたのかを、着実に論証していくことが必要となろう。刻印銘の手がかりをもたない大坂式文様などの軒瓦や、鬼瓦や塀棧瓦などの具体的産地については、試行的に取り組みつつある理化学的な分析手法による判別なども、有効な手段となるかもしれない〔富井ほか2024〕。今後の課題として掲げておきたい。

## 〔注〕

(1) BC30区で確認されている「福カ瓦作カ」の刻印については、京の瓦工「福田加賀守」との関連を指摘する検討が提出されている〔内記2018〕。

## 〔引用・参考文献〕

- 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005年 「京都大学北部構内BC28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 上原真人 1997年 『瓦を読む』（歴史発掘11・講談社）
- 金子 智 1996年 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター編 2014年 『弘人屋敷跡』（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第140集）
- 笹川尚紀 2018年 「土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書」『京都大学構内遺跡調査研究年報2016年度』
- 笹川尚紀編 2020年 『文化財発掘VI―幕末・近代の文字史料―』（京都大学総合博物館2019年度特別展リーフレット）
- 千葉 豊・長尾玲 2014年 「京都大学病院構内AH12区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2011・2012年度』
- 同志社大学歴史資料館編 2015年 『相国寺旧境内発掘調査報告書 本文編』（同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集）
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会編 1990年 『東北大学埋蔵文化財調査京都大学構内遺跡調査研究年報3』
- 富井眞・高宮幸一・伊藤淳史・木立雅朗・千葉豊・吉井秀夫 2024年 「中性子放射化分析による幕末京都土佐藩邸出土刻印瓦の胎土分析」『日本文化財科学会第41回大会研究発表要旨集』pp.178-179
- 内記 理 2018年 「京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印」『京都大学構内遺跡調査研究年報2016年度』
- 浜崎一志 1983年 「京都大学北部構内BD30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和56年度』
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内BA28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』
- 山崎 信二 2008年 『近世瓦の研究』
- 渡邊 誠 2017年 「四国における近世瓦の生産と流通」『幕藩体制下の瓦―近世都市遺跡における生産と流通―』（第66回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集）

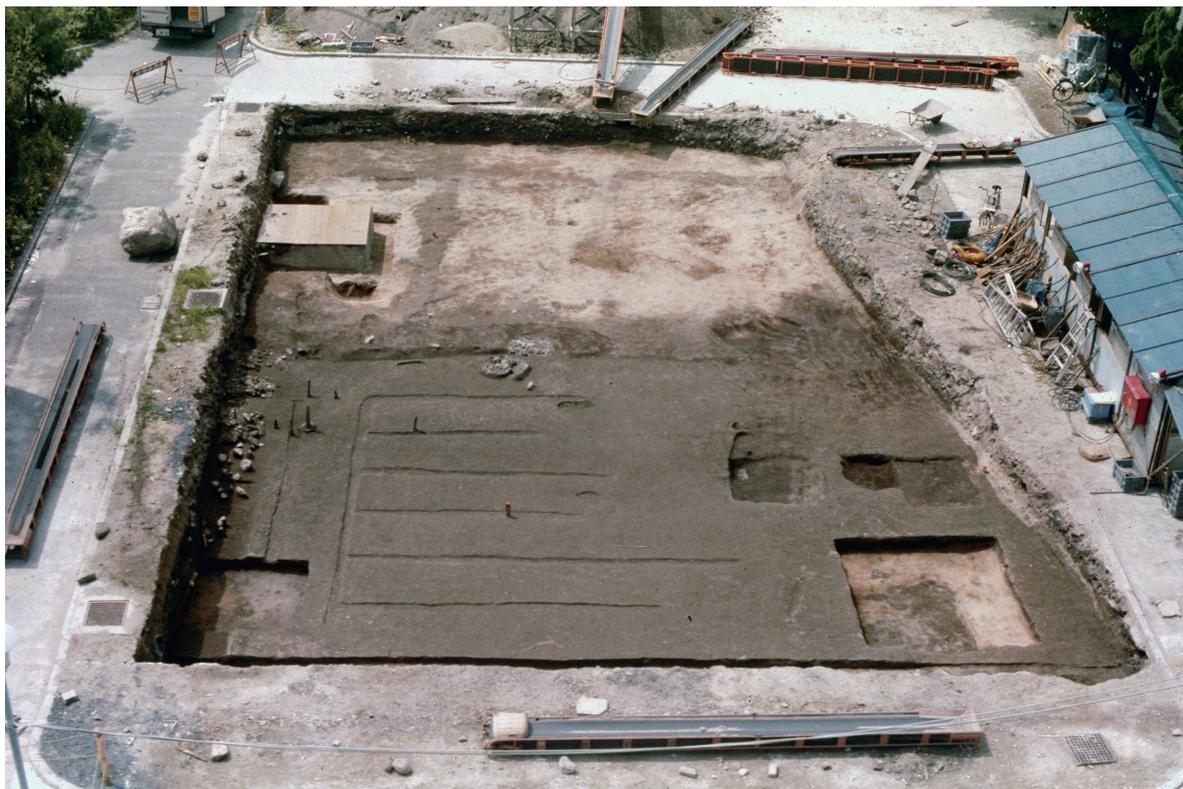


表3 瓦磚類の出土した層位・遺構

図番号	種類(文様)	刻印など	出土層位・遺構	図番号	種類(文様)	刻印など	出土遺構・層位
6 1	軒棧(三巴唐草)	アキ文	SX1	10 52	棧か平	(いおろ)い栄	表土
6 2	軒平(宝相華唐草)	御瓦師	SX4+表土	10 53	棧か平	赤野銀	青灰色土
6 3	軒瓦(唐草?)	(御瓦)師	SX4	10 54	棧か平	不詳	青灰色土
6 4	軒瓦(唐草)	キ卯平	SX1	10 55	棧か平	不詳	青灰色土
6 5	軒瓦(唐草)	安喜寅	SX1	11 56	鬼瓦		SX4
6 6	軒瓦(三巴唐草)		SX1	12 57	鬼瓦か		SX4
6 7	軒瓦(橘唐草)		SX4	12 58	鬼瓦か	裏面に刻字か	SX4
6 8	軒瓦(橘唐草)		青灰色土	12 59	鬼瓦か		SX4
6 9	軒瓦(橘唐草)		SX4+SX3	12 60	鬼瓦か		SX4
6 10	軒瓦(宝相華)		SX1	12 61	鬼瓦か		SX1
6 11	軒棧(唐草)		SX4	12 62	鬼瓦か		SX4
6 12	軒棧(唐草)		SX4+SX1	12 63	鬼瓦か		SX3
6 13	軒瓦(唐草)		SX4	13 64	塀棧		SX4
6 14	軒瓦(唐草)		SX1	13 65	塀棧		SX1
6 15	軒瓦(唐草)		表土	13 66	塀棧		SX1
6 16	軒瓦(唐草)		SX4	13 67	塀棧		SX4
6 17	軒瓦(唐草)		SX1	13 68	塀棧		SX1
6 18	軒瓦(唐草)		SP31	13 69	塀棧		SX1
6 19	軒瓦(唐草)		SX1+SD9	13 70	塀棧		表土
7 20	小丸付軒棧(無文)		攪乱	14 71	塀棧		赤褐色土
7 21	軒瓦(無文)		攪乱	14 72	塀棧		攪乱
7 22	軒棧(無文)		攪乱	14 73	塀棧		SX4
7 23	軒瓦(無文か)		SX1	14 74	塀棧		攪乱
7 24	軒瓦(無文か)		SX1	14 75	塀棧		SX4+攪乱
8 25	棧か平	アキ角	SX1	14 76	塀棧		SX1
8 26	棧か平	赤野銀	SX1	14 77	塀棧		SX 1
8 27	棧か平	片菊	SX1	14 78	塀棧		攪乱
8 28	左棧	(御)瓦師	SX1	14 79	塀棧		SX1
8 29	棧か平	(御)瓦師	SX1	14 80	塀棧		SX1
8 30	右棧	(アキ)兼	SX3	14 81	塀棧		SX1
8 31	棧か平	(アキ)兼	SX3	14 82	塀棧		SX3
8 32	左棧	赤野銀	SX3	14 83	塀棧		SX3
8 33	棧か平	不明	SX3	15 84	伏間か熨斗		SX4
9 34	右棧	アキ文	SX4	15 85	伏間か熨斗		SX4
9 35	棧か平	赤野銀	SX4	15 86	伏間か熨斗		SX1
9 36	棧か平	片常	SX4	15 87	袖瓦		SX1
9 37	棧か平	並生野角	SX4	15 88	袖瓦		SX1
9 38	右棧	中佐	SX4+SX1	15 89	袖瓦		SX1
9 39	右棧	丸囲みイ	SX4+SX1	15 90	袖瓦		SX2
9 40	丸瓦	谷川丸市	SX4	15 91	袖瓦		SX1
9 41	左棧瓦	不詳	SX4	15 92	袖瓦		SX1
10 42	棧か平	アキ?	SX1	15 93	伏間か熨斗		攪乱
10 43	棧か平	赤戈改	SX2	15 94	伏間か熨斗		SX1
10 44	棧か平	(赤)戈改	SX3	16 95	熨斗か		表土
10 45	棧か平	並生野角	SX4	16 96	不明		SX1
10 46	棧か平	御瓦師	SX5	16 97	伏間か		SX4
10 47	右棧	不詳	SX6	16 98	不明		攪乱
10 48	棧か平	アキ?	表土	16 99	不明		表土
10 49	右棧瓦	並(生野角)	表土	16 100	不明		表土
10 50	棧か平	中山(林)	表土	17 101	埴	片面に掌圧痕	攪乱
10 51	棧か平	御瓦(師)	表土	17 102	埴	片面に鼓型圧痕	攪乱

備考：不明は棧瓦，平瓦のどちらかである。  
 アキ?はアキ兼，アキ文，アキ角のいずれかである。  
 軒瓦は軒棧瓦か軒平瓦か特殊な軒瓦の一部か判別できないものである。  
 片?は片九，片常のどちらかである。

図版一  
一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



1 調査区の全景（青灰色土上面・北から）



2 青灰色土上面近世瓦溜検出状況その1（西から）



1 青灰色土上面近世瓦溜検出状況その2（北西から）



2 青灰色土上面近世瓦溜検出状況その3（北から）

図版三 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



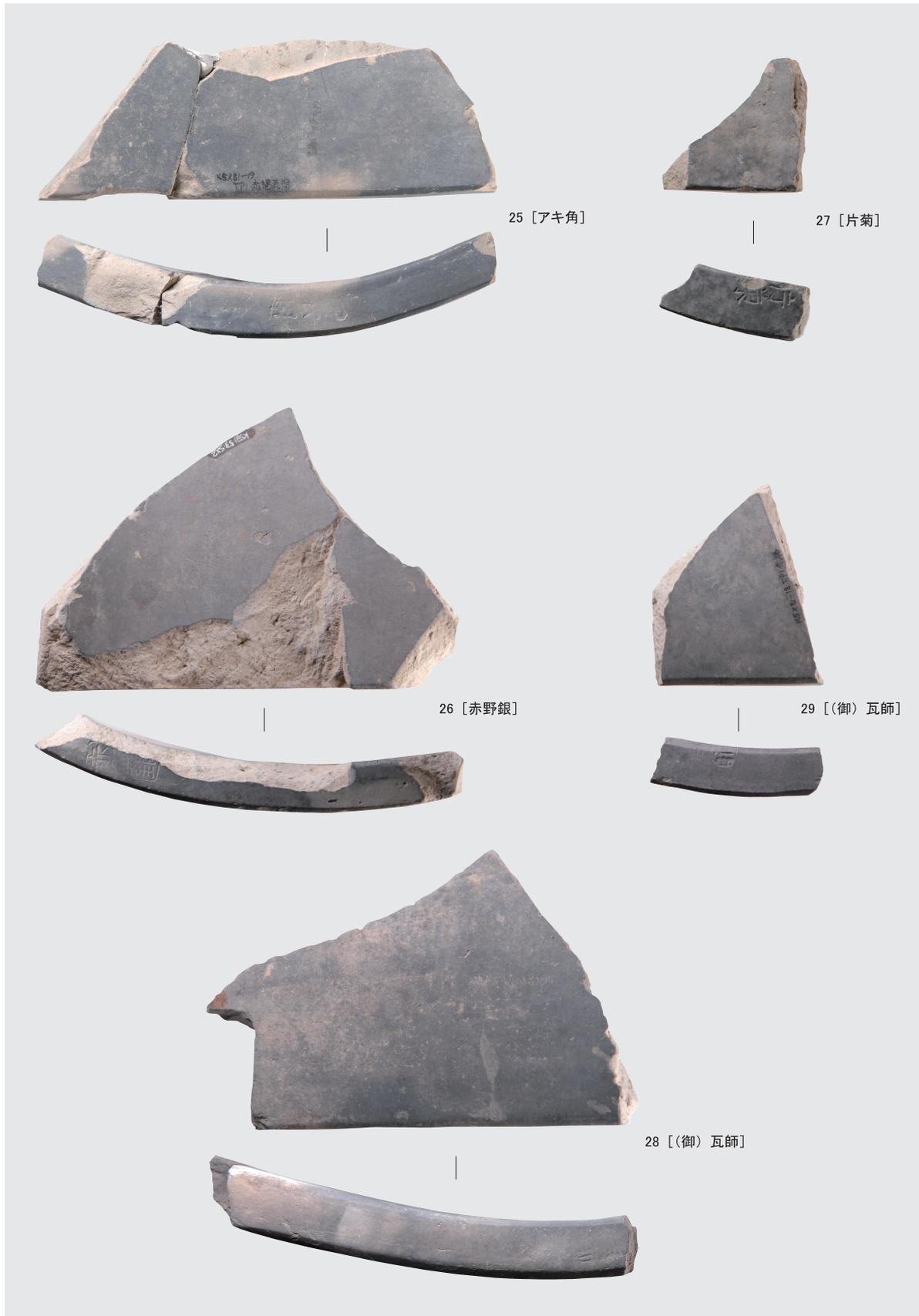
軒瓦（刻印あり）（1・3～5），軒平瓦（刻印あり）（2），軒瓦（6～8，10）  
以下写真の縮尺は約1／2

図版四 一九八一年京都大学北部構内BD30区の発掘調査

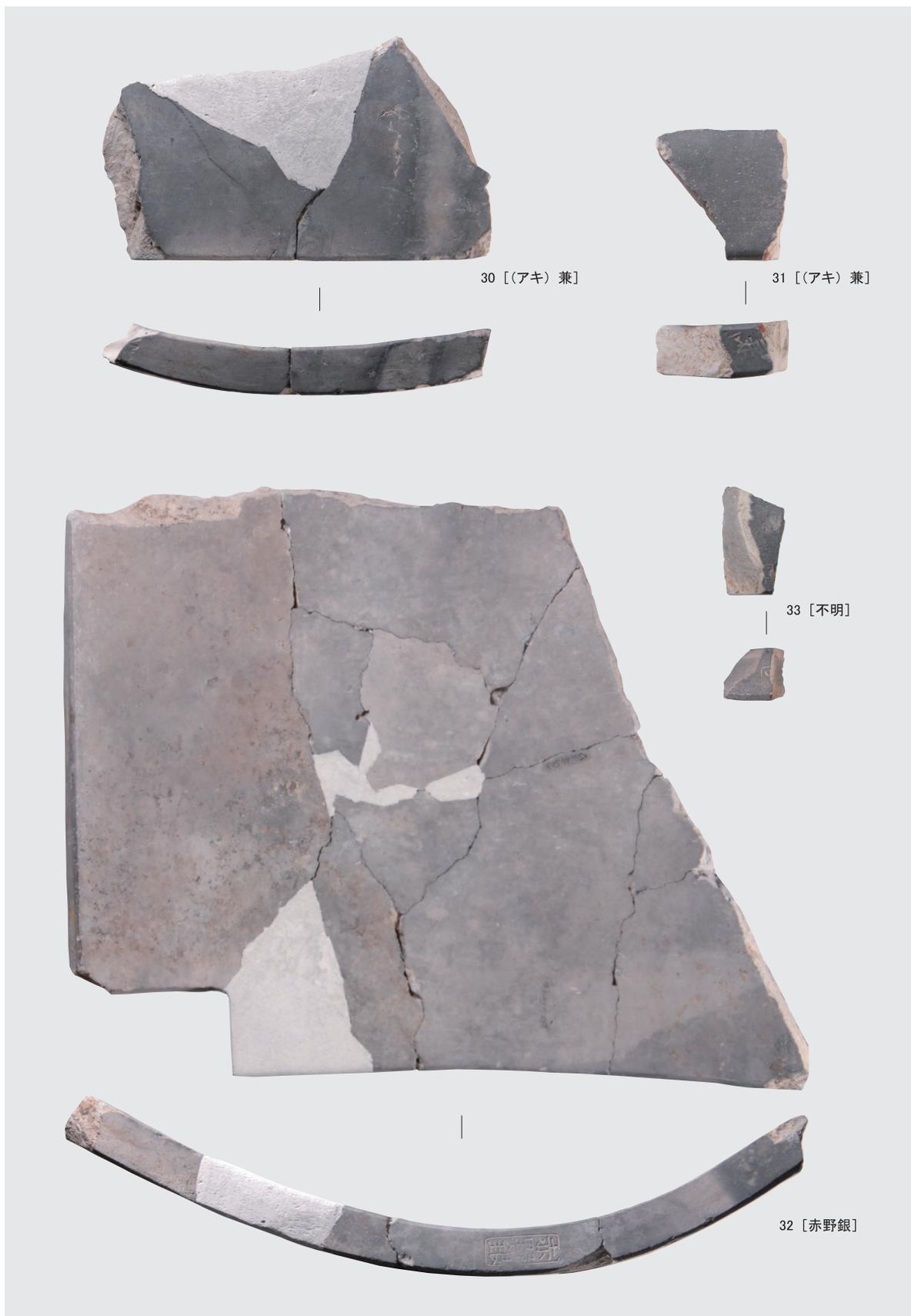


軒瓦（9, 11～19）

図版五  
一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



S X 1 出土刻印瓦 (25 ~ 29)



S X 3 出土刻印瓦 (30 ~ 33)

図版七  
一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



S X 4 出土刻印瓦 (34 ~ 37)

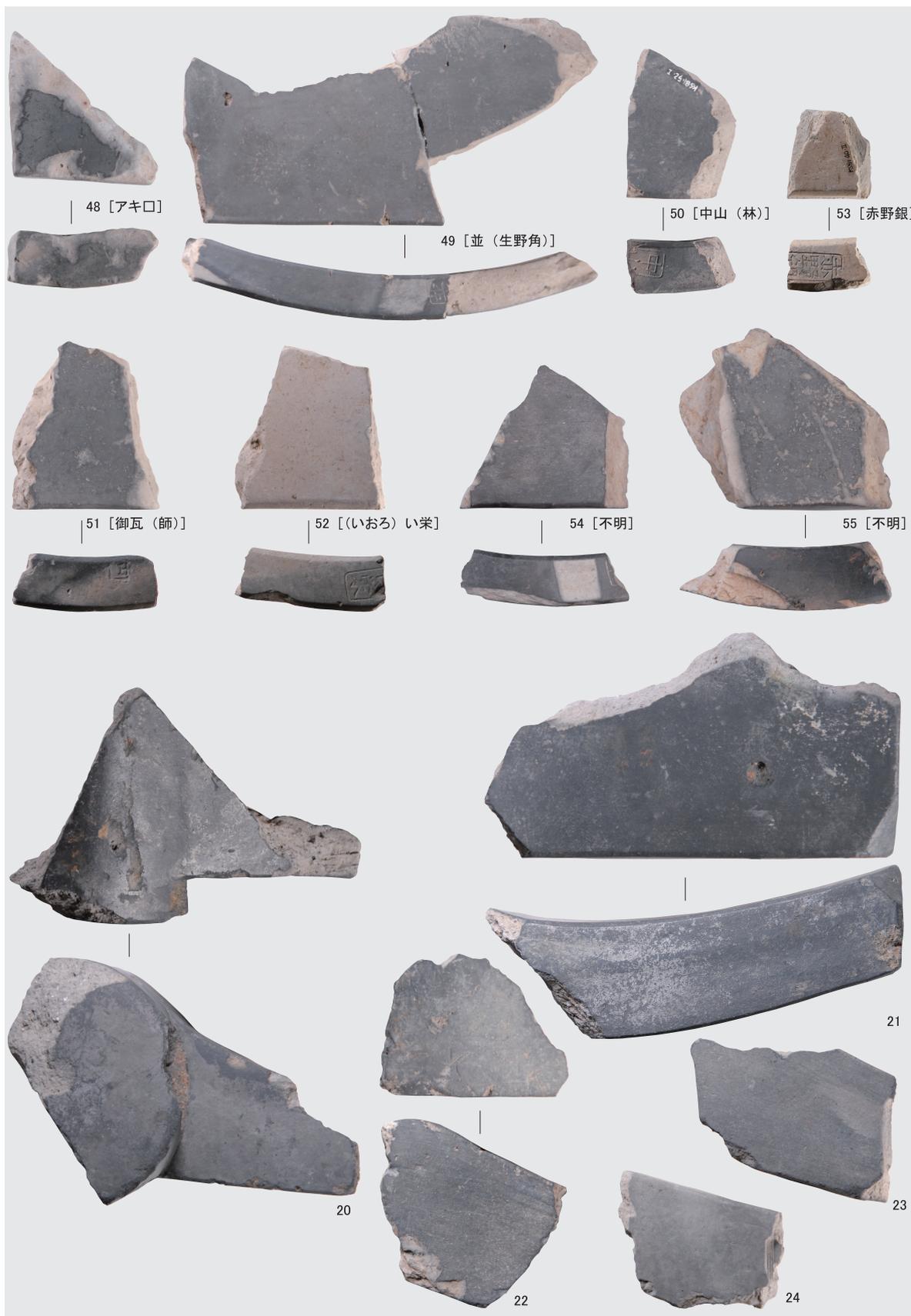


S X 4 出土刻印瓦 (38 ~ 40)

図版九 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



S X 4 出土刻印瓦 (41), 暗褐色砂質土出土刻印瓦 (42 ~ 47)



盛土Ⅲ（表土）出土刻印瓦（48～52），青灰色耕土出土刻印瓦（53～55），  
軒瓦（模様なし）（20～24）

図版二一  
一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査

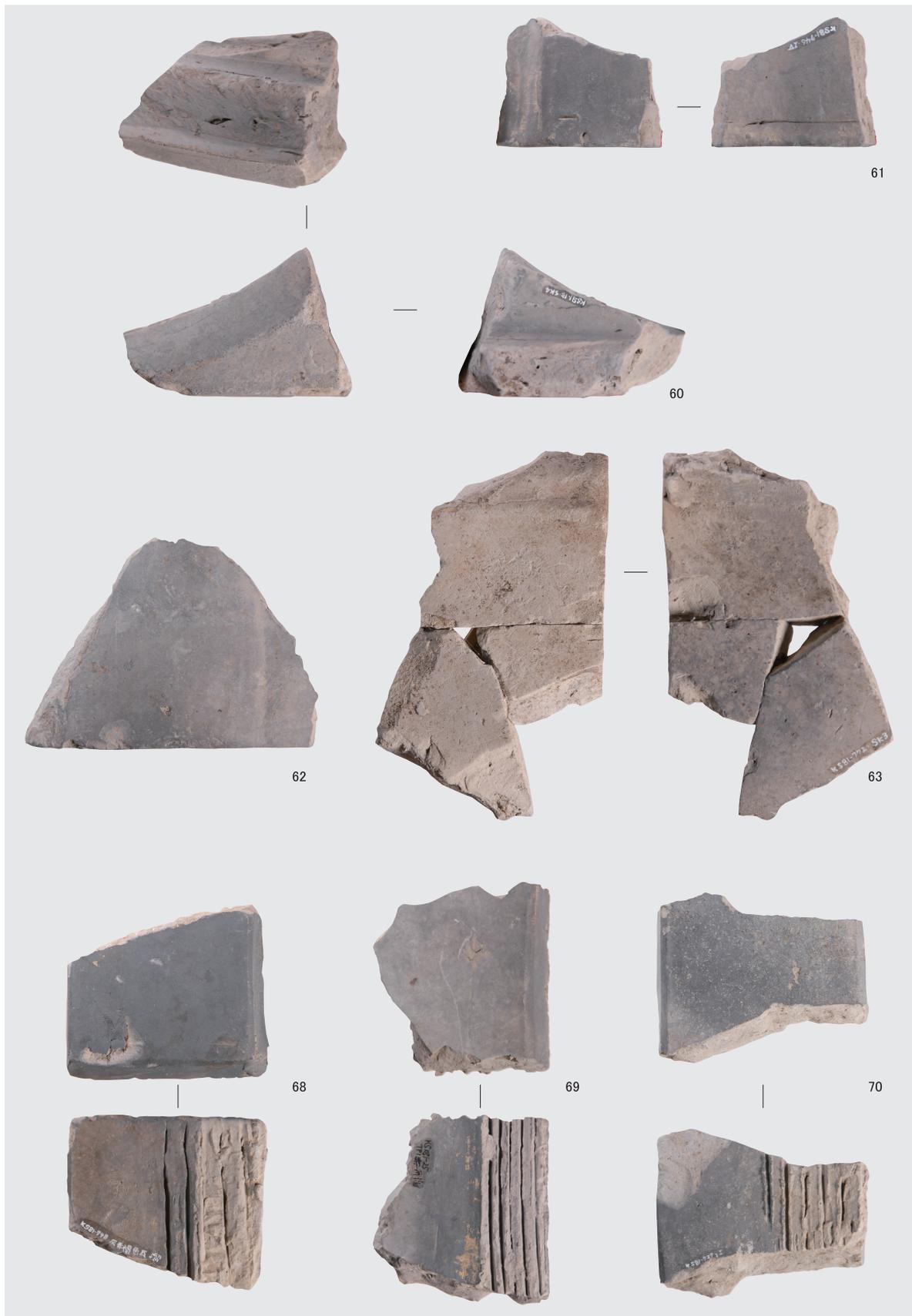


鬼瓦類の一部 (56)



鬼瓦類の一部 (57～59)

図版一三 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査

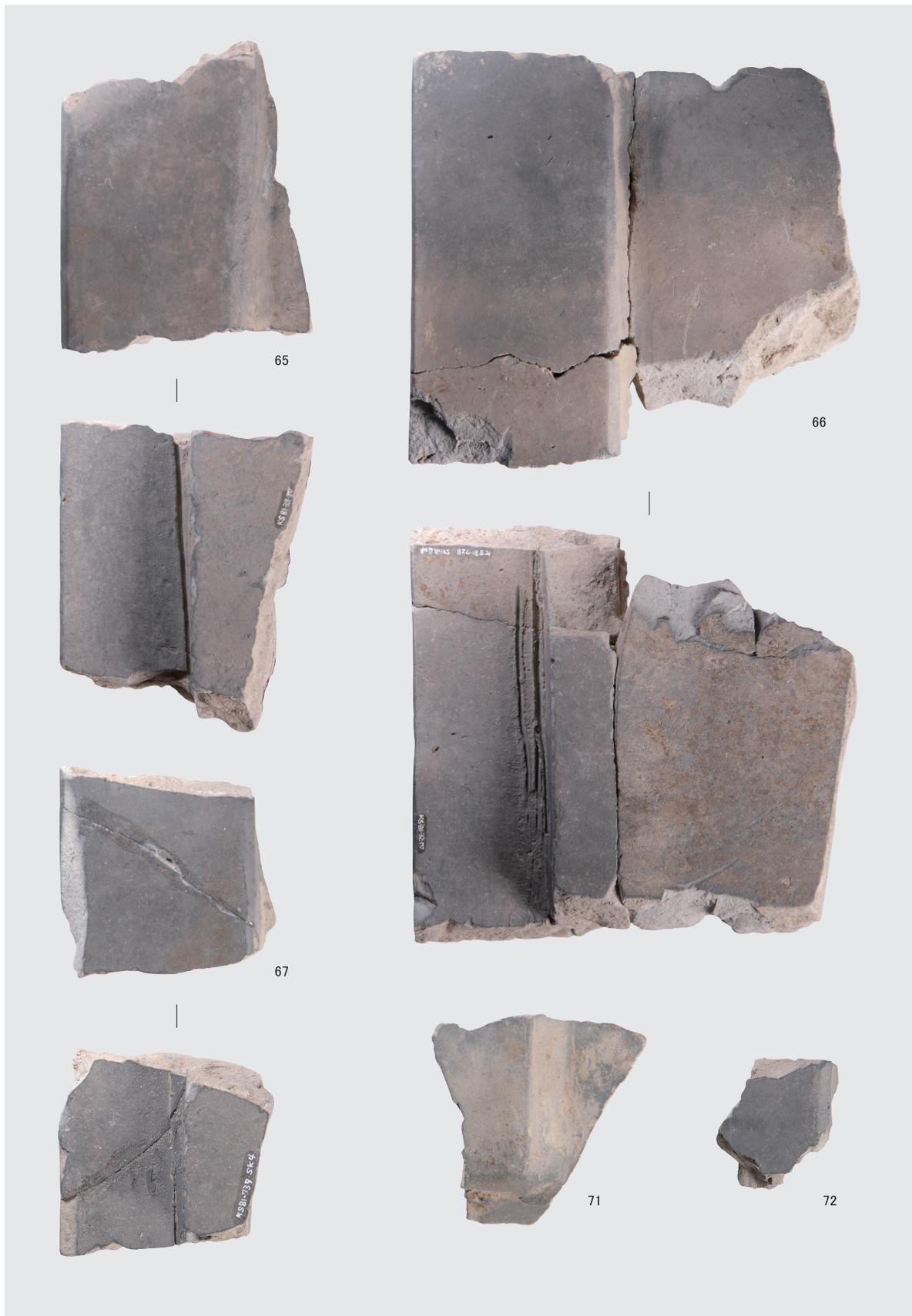


鬼瓦類の一部 (60 ~ 63), 塀棧瓦 (68 ~ 70)

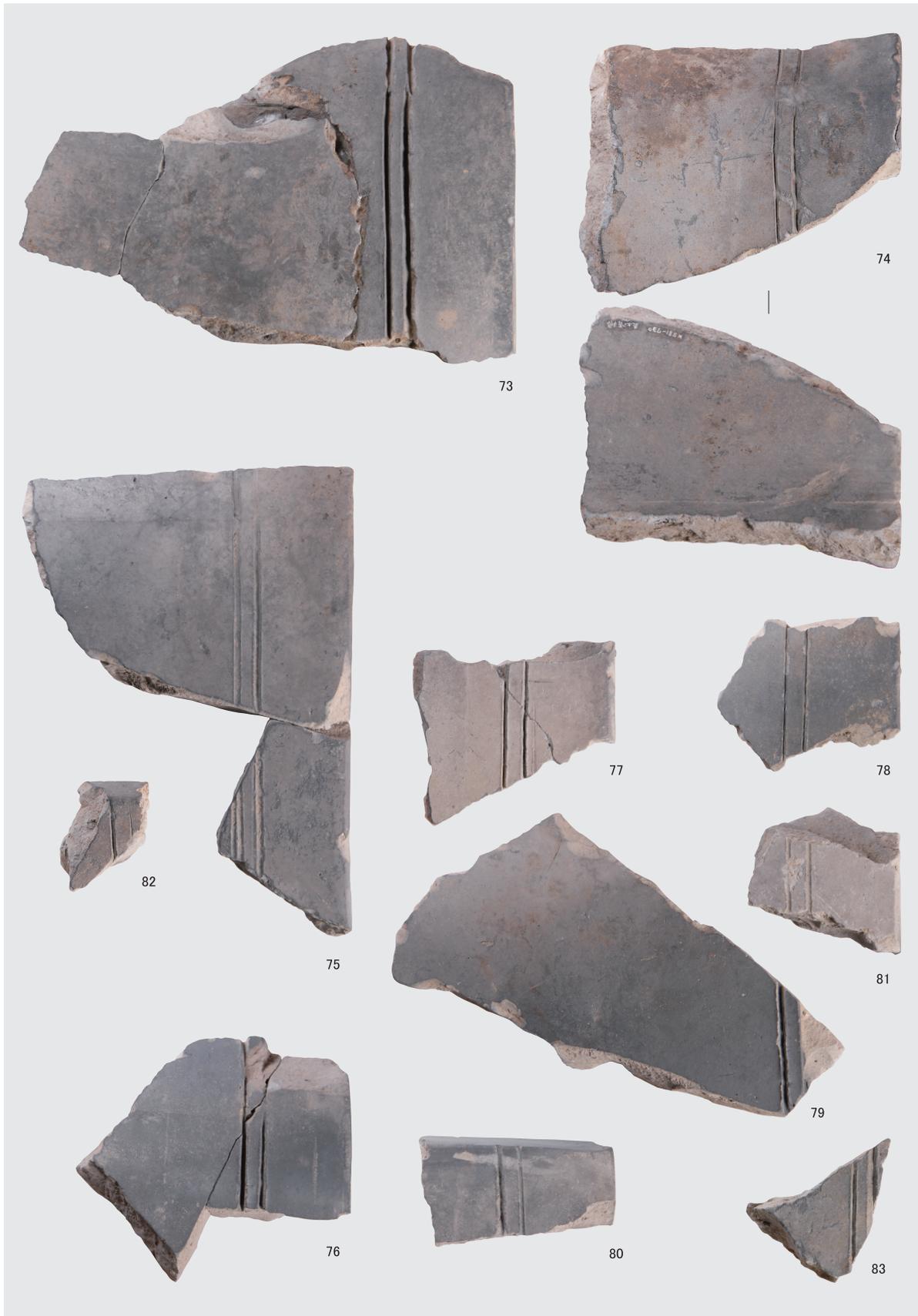


塀棧瓦 (64)

図版一五 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



塀棧瓦 (65 ~ 67, 71・72)



塀棧瓦 (73 ~ 83)

図版一七 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



伏間瓦・熨斗瓦・袖瓦等 (84 ~ 86・93・94)



図版一八 一九八一年京都大学北部構内BD30区の発掘調査

伏間瓦・熨斗瓦・袖瓦等 (87 ~ 92)

図版一九 一九八一年京都大学北部構内B D 30区の発掘調査



その他の瓦 (95 ~ 100)



図版二〇 一九八一年京都大学北部構内BD30区の発掘調査

埴 (101・102)

## 第2章 京都大学北部構内における物理探査結果

岸田徹・桑原久男・小田木治太郎・橋本英将

天理大学遺跡調査チーム

### 1 はじめに

本調査は、2022年度科学研究費補助金基盤研究C「都市化」とは何か―歴史都市京都近郊における長期的検証―（研究代表者：伊藤淳史）」の一環として実施された京都大学北部構内における物理探査の報告である。探査の目的は、土佐藩屋敷の範囲（北側堀）および探査区東隣で検出された道路遺構の延長範囲の推定である。

### 2 探査の概要

探査は2023年2月4日に実施した。地中レーダ探査に使用した機器は天理大学考古学民俗学研究室所有の米国GSSI社製SIR-3000および中心周波数200MHzアンテナである。取得した地中レーダ探査データは、Dean Goodman氏による解析ソフトウェア“GPR SLICE ver.7”を使用し解析を行い、不要なノイズを取り除く各種フィルター処理を実施した後、一定の深度幅での反射強度の平面分布図（time-slice図）を作成した。

電気比抵抗探査は応用地質株式会社製Handy-ARMおよびScanner32を使用した。得られたデータは同社製の解析ソフトウェア“ElecImager2D Lite”を用いて逆解析処理を行い、地下の比抵抗断面モデル図を作成した。

地中レーダ探査範囲を図1に示す。京都大学理学研究科6号館の西側に東西10m、南北50mの探査範囲を任意に設定した。探査区の4隅の座標は表1に示す。同探査区内を測線間隔0.5mで東―西お

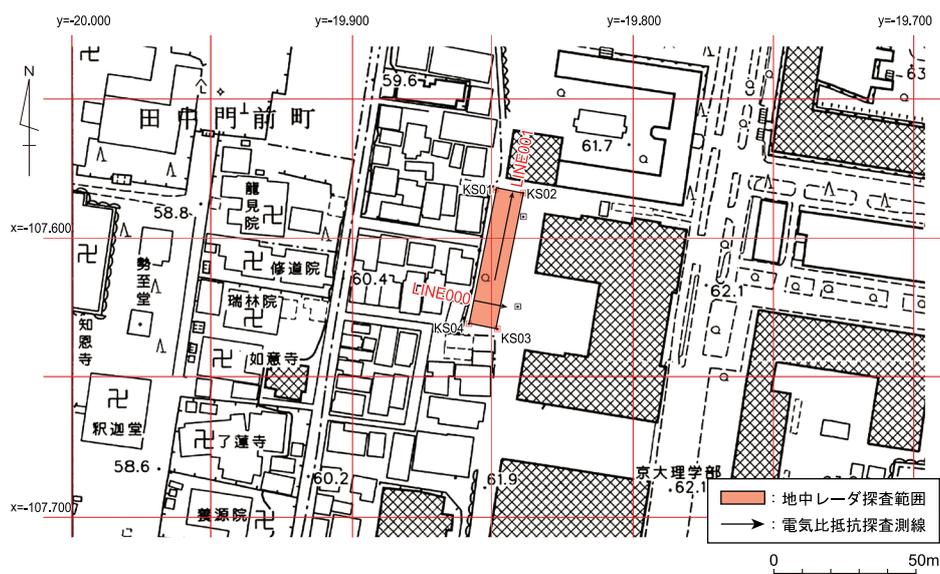


図1 京都大学北部構内における地中レーダ探査範囲と電気比抵抗探査測線の位置

表1 探査区四隅の基準杭座標一覧

ID	X	Y	H	備考
KS01	-107582.082	-19848.313	61.779	北西角
KS02	-107584.004	-19838.505	62.489	北東角
KS03	-107633.061	-19848.116	62.329	南東角
KS04	-107631.145	-19857.918	61.988	南西角

平面直角座標第VI系（世界測地系）

よび南-北両方向で格子状にアンテナを走査した。

電気比抵抗探査は、地中レーダ探査グリッドのY=6mラインをX=0~12mまで（LINE000）と、X=6mライン上をY=19m~50mまで（LINE001）の計2本の測線を設定して探査を実施した。

調査の実施は桑原久男・小田木治太郎・橋本英将（以上天理大学）、岸田徹（同志社大学）、天理大学学生有志（遺跡調査チーム：瀬川裕太郎・有本結香・小池匠・塩尻朗士・清水妃芳・矢口恵子・下城諒・松浦舞）によるものである。

### 3 探査結果

地中レーダ探査結果（time-slice図）を図2に示す。地表~深度18-28ns（推定深度：71-110cm）までは比較的小さな異常応答が探査区の全体に散見される。調査地は西側に隣接する住宅地より1.5m程度標高が高く、盛土が施されていると考えられるため、これらは盛土中に含まれる比較的大きな礫等をもたらす異常と考えられる。

深度27-36ns（推定深度：106-145cm）から深度44-54ns（推定深度：177-216cm）にかけて、探査区の南側、探査区座標Y=10~15m（図中白矢印で示す）において帯状の異常応答が東西に延びるように見える。今回の探査地の南方（現・理学研究科2号館）において、過去の発掘調査により土佐藩屋敷の南端を

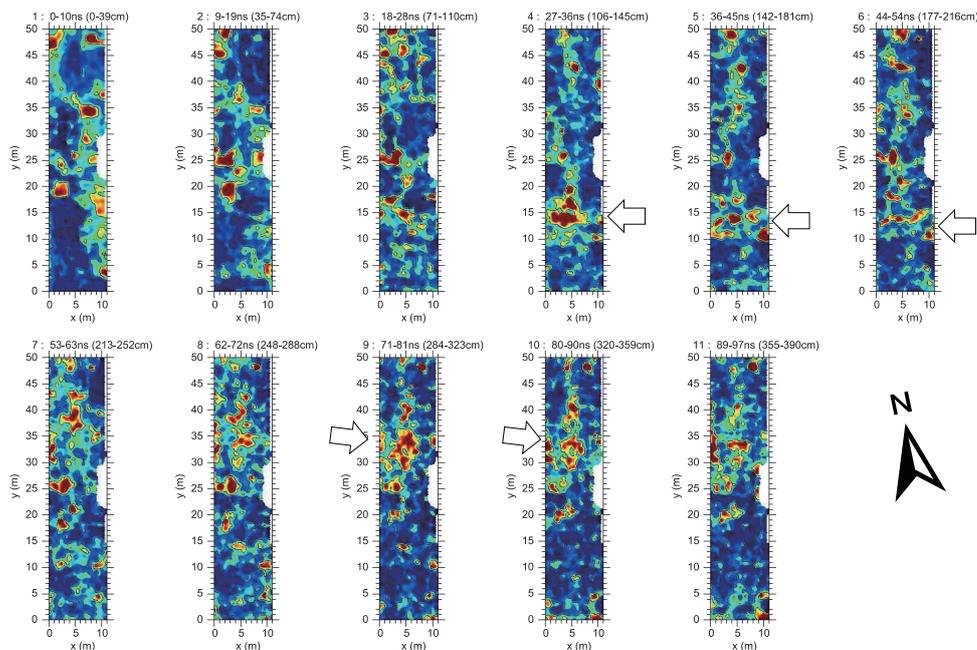


図2 地中レーダ探査結果（time-slice 図）

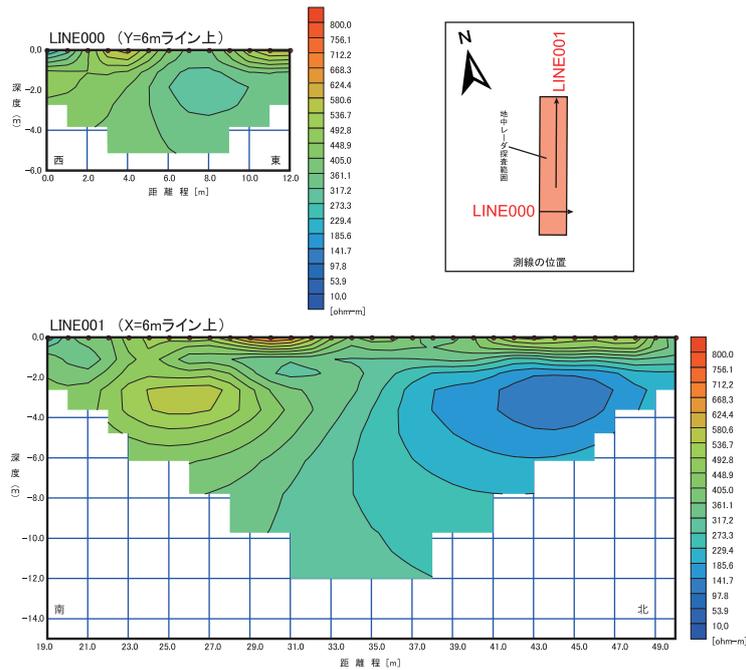


図3 電気比抵抗探査の結果（比抵抗断面図）

限る堀（SD1）が確認されており〔京都大学埋蔵文化財研究センター 1995〕,今回捉えられた異常は、北限を区切る堀跡の可能性が考えられる。

また、さらに深い深度では、深度71-81ns（推定深度：284-323cm）から深度80-90ns（推定深度：320-359cm）にかけて、探査区の中央やや北寄りに異常応答が集中する箇所が認められた。異常は集中しているものの、東西に帯状に延びていくのか、局所的に表れているものなのか判断は困難である。探査地東側の理学研究科6号館において、建設前の確認調査で古代の道路跡が検出されており、それが西側に延びる様子が確認されているが、この異常が道路遺構であるのかどうかは、その位置や深度など、発掘調査成果と比較検討する必要がある。

図3に電気比抵抗探査結果を示す。LINE000（Y=6mライン）では、深度2m、距離6～10mにやや低比抵抗領域が存在するものの、特に目立った異常は存在しない。地中レーダ探査でも、同測線下では顕著な異常は捉えられていない。LINE001（X=6mライン）では深度約3m、距離24～28m地点で高比抵抗領域が、同深度で距離41～47mには低比抵抗領域が捉えられた。地中レーダ探査において、深度約3mで捉えられた異常は電気比抵抗探査のLINE001測線下において距離約28～35mの範囲であり、ちょうど高比抵抗と低比抵抗領域の間にあたる。そのため、これらの異常が何を示しているのか現時点では不明であるが、単純に基盤層の違いを示唆しているのかもしれない。

#### 4 まとめ

京都大学北部構内で実施した地中レーダ探査の代表的な結果を図4に示す。探査深度36-45ns（推定深度：142-181cm）で探査区の南側で、東西方向に続くとみられる帯状の異常応答が認められた。幅は約5mで、軸を数度東へ振って伸びているように見える。幅は想定より広いが、探査区南方で発見された土佐藩屋敷の北側堀を捉えた可能性が考えられる。また、深度80-90ns（推定深度：320-359cm）

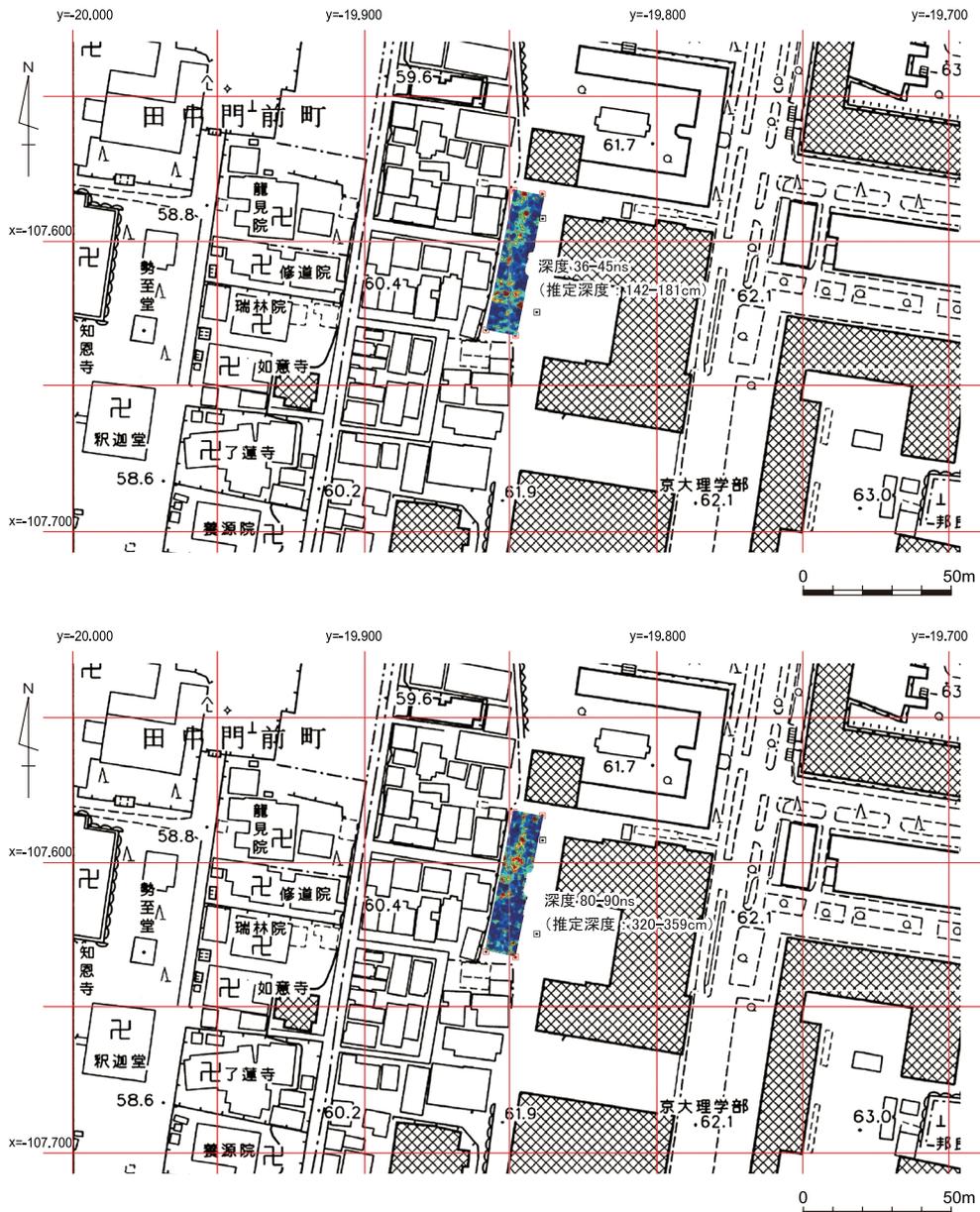


図4 京都大学北部構内における代表的な地中レーダ探査結果  
 上：深度36-45ns（推定深度142-181cm）  
 下：深度80-90ns（推定深度：320-359cm）

では探査区の中央やや北寄り、異常が集中する箇所が捉えられている。ただ、人工物と考えられる構造や形状が捉えられているわけではなく、これが遺構であるかの判断は難しい。現状、この異常が探査区の東隣で検出された古代道路跡かどうかは判断できず、発掘調査の成果との比較と検討が必要であると考えられる。

参考文献

京都大学埋蔵文化財研究センター 1995年 「京都大学北部構内B A28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』

図版一  
京都大学北部構内における遺跡探査



1 西辺部探査風景（北東から）



2 南半部探査風景（北から）

### 第3章 2023年度京都大学北部構内BC28区における試掘調査

伊藤淳史

#### 1 調査にいたる経緯と経過

ここでは、2023年12月18日～12月22日に北部構内の西辺（図1）において実施した試掘調査の結果について報告する。調査は本研究の共同研究者全員が参加した。

2023年2月に実施した遺跡探査の結果についてはさきに報告したところであるが（本書第2章参照）、その後同年6月に、天理大学関係者も含む探査参加者全員でオンラインによる検討会を開催し、試掘トレンチの設定個所について意見交換おこなった。この探査は、①東側の発掘調査（図1-297地点）で確認されていた古代路面の延長の確認〔富井ほか2007〕、②幕末期土佐藩邸に関連する遺構痕跡を見つけること、を主目的としているなかで、①については、地表下3m前後の深い地点で延長に相当する地点で反応が得られており、②については、探査区南半の地表下1mあまりで認められた東西方向の明瞭な反応が、その可能性あるものと判断されている。そして後者の場合、小規模なトレンチで確認できる深度であり、南辺以外は不明な藩邸敷地にかかわる重要な情報も期待される。以上より検討会では、②にかかわる位置に試掘トレンチを設定することが妥当、という結論に至った。

これをうけて、探査の対象とした北部構内西辺の緑地内において、強い反応が認められた地点をカバーしつつ、掘削土置き場の確保も配慮して、東西2m×南北5m（10㎡）でトレンチの設定をした（図2）。

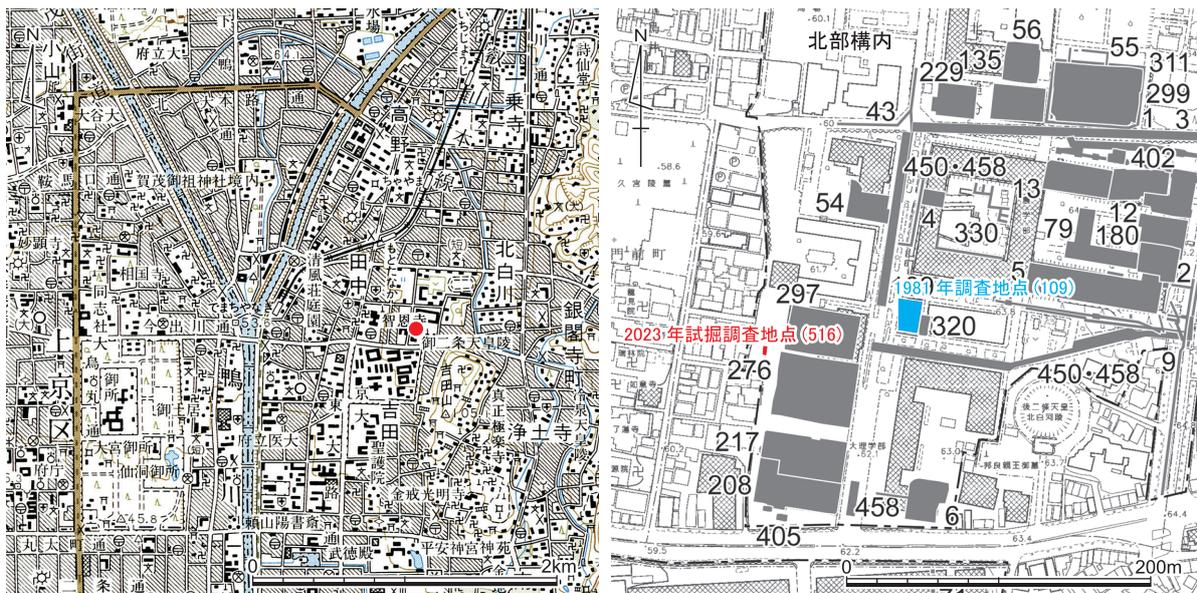


図1 2023年試掘調査地点の位置（赤色） 縮尺1/5万（左）および1/5000（右）

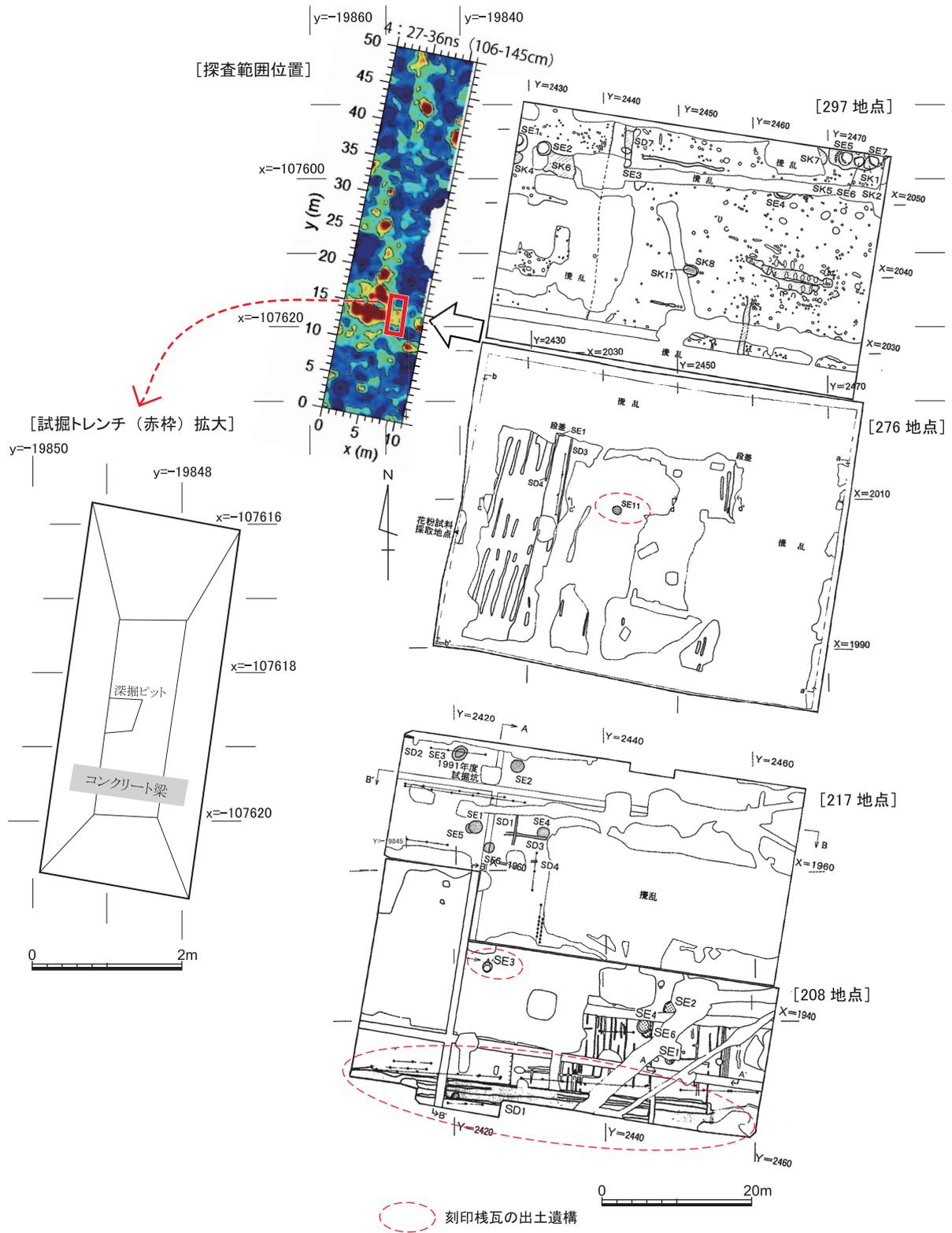


図2 今回試掘トレンチ平面（左：縮尺1/80）および周辺調査の近世遺構と探査範囲（右：縮尺1/800）

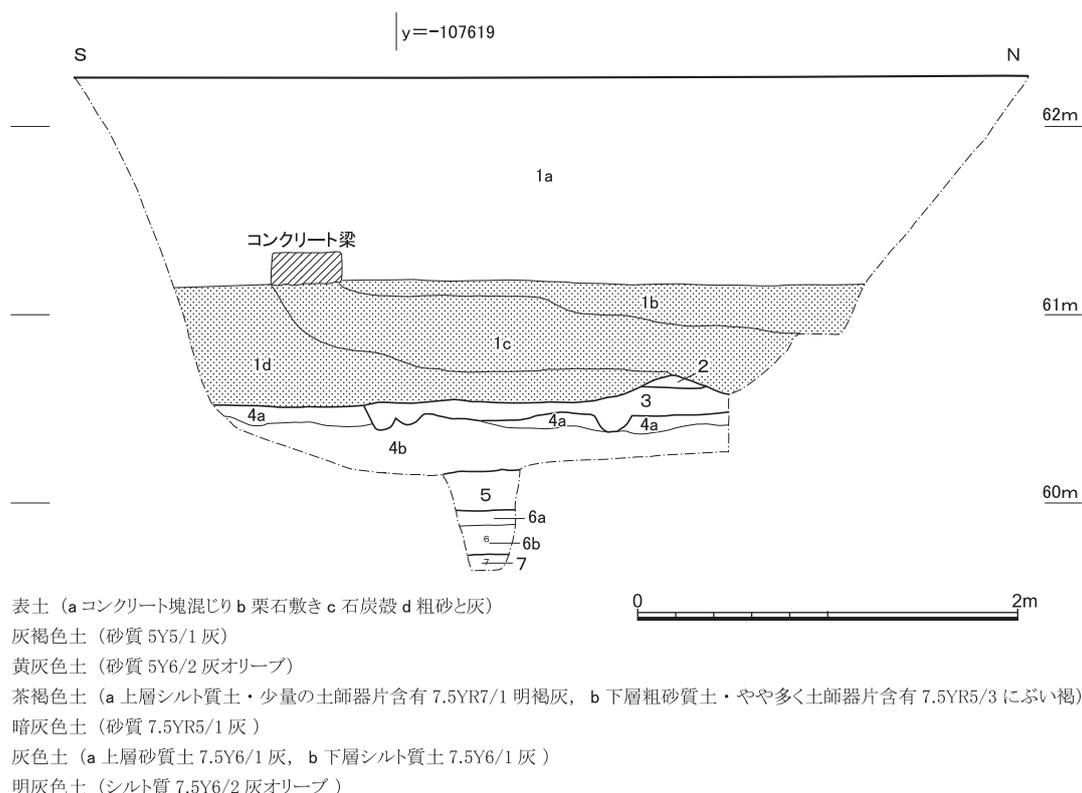


図3 調査区西壁の層位 縮尺1/40

調査は、上部の表土層や攪乱層を機械力で、それより下部の遺物包含層や遺構は人力により掘削する方針で進めた。しかし結果として、地表下1.7m前後までがすべて表土・攪乱層で、安全上から面としてはそれより30cm前後遺物包含層を下げ得たにとどまった。さらに下部については、南壁際の一部範囲を50cmほど深掘りし、遺物包含層の堆積が続く状況を確認して終了している (図3)。

## 2 層 位

上記した遺存状況もあって、トレンチ平面では顕著な遺構は確認できていないが、断面ではいくつか浅い凹みや段差状の落ちが認められ、ピットや細い溝が検出しきれなかった可能性はある。ここではそれらも含め、西壁層位からみた堆積状況を詳述する (図3)。

第1層の表土としてまとめたものは、近代の大学設置以降の堆積で、地表下1.7m前後まで達している。ただし均質ではなく、コンクリート塊等が混じる a が上半1m以上を占め、その下部には石炭殻や焼却灰などが主体となる c・d が埋積する。両者の境界はおおむね水平で、栗石敷き b が認められるとともに、その上面には幅40cm厚さ20cm程度のコンクリート製梁が、東西方向に横たわっていた。この状況から、下部の c・d は大学内で生じた石炭殻等を掘削廃棄したもの、その上面を地業として栗石敷き b で整地・補強したのち、コンクリート梁を基礎とする構造物があったことがうかがわれる。すなわち、大学設置後ある段階までの旧地表面は b 上面の61.1m付近にあり、その後大きく盛土されて現在に至っていると復元できる。

以上の復元は、今回はごく僅かに壁面のみでしか遺存が把握できなかった第2層灰褐色土が、本来

どの程度まで厚さがあったかを想定するうえで重要な情報となる。近世層である灰褐色土は、周辺調査区で破壊を被っていない場合50cm以上の層厚があり、層内は、酸化鉄斑文の集積層である灰赤褐色土との互層が2～3単位繰り返される特徴を示している。水田や畑の耕作が繰り返されながら耕土と床土のセットが堆積したものと見えよう。その最上面はおおよそ標高61m強となっており、大学設置後のある段階までの旧地表面と今回想定した1b層の上面よりも、やや高くなっている(図4)。すなわち、今回調査地も本来は灰褐色土がこの61m付近までは堆積しており、旧地表面はその61m付近に形成されていたこと、塵芥処理のためにこれら灰褐色土が掘削されてそこに石炭殻や灰などが埋められていたこと、が想定されるのである。なお、藩邸期にともなう整地や造成とみるべき堆積は、これまでの調査でも全く認められていない。

第3層の黄灰色土も耕作にともなうものであり、今回の調査範囲内では遺物の包含を認めなかった。東側の276地点の調査所見では、中世後半期以降近世までの堆積で、下部の茶褐色土上面で検出される鋤溝状の細い溝群や、南から北或いは東から西へと下る段差低位側の埋土となっている〔伊藤ほか2005〕。今回も同様な段差や溝の断面が茶褐色土との境に観察される。

第4層の茶褐色土は、土師器の細片を多く含む堆積で、京都大学の構内では病院構内西半を除くとひろく確認されている。中世後半期の整地層とみられ、今回は30cm前後の厚さがある。

第5層より以下第7層までは、小範囲の掘り下げにとどまったため、層序の弁別はやや厳密さを欠いているが、おおむね灰色系の色調の砂質～シルト質土が50cm以上埋積していることは確認できた。上半部からは中世後半期の、下部からは平安中期の遺物が出土している。東側の276地点では、弥生前期末の土石流による厚い黄色砂の堆積後、弥生中期の流れにより形成されていた浅谷状の凹地が、10世紀代～中世後半期に灰色砂質土などで徐々に埋積していった状況が把握されており、今回の調査地点も同じ地形環境にあったとみてよからう。とりわけ今回は、59.5m付近まで掘り下げたが黄色砂上面に到達せず、東側では60mたらずで確認されていることを考慮すると、より深い谷状となっていた可能性も考えられる。

### 3 出土遺物

遺物包含層の遺存が不良であったこともあり、特徴の把握できるものも小片で微量にとどまる。表土中より採集したものを含めて図示する(図5)。

1・2は表土中採集のもの。1は棧瓦片の隅部分。端面に○に―(漢字の「一」ではなく記号の「一」)

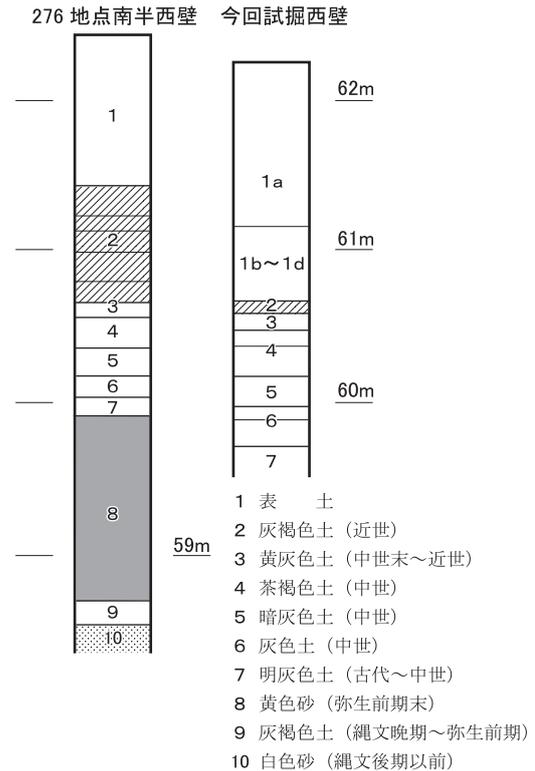


図4 層序柱状図による比較 縮尺1/50

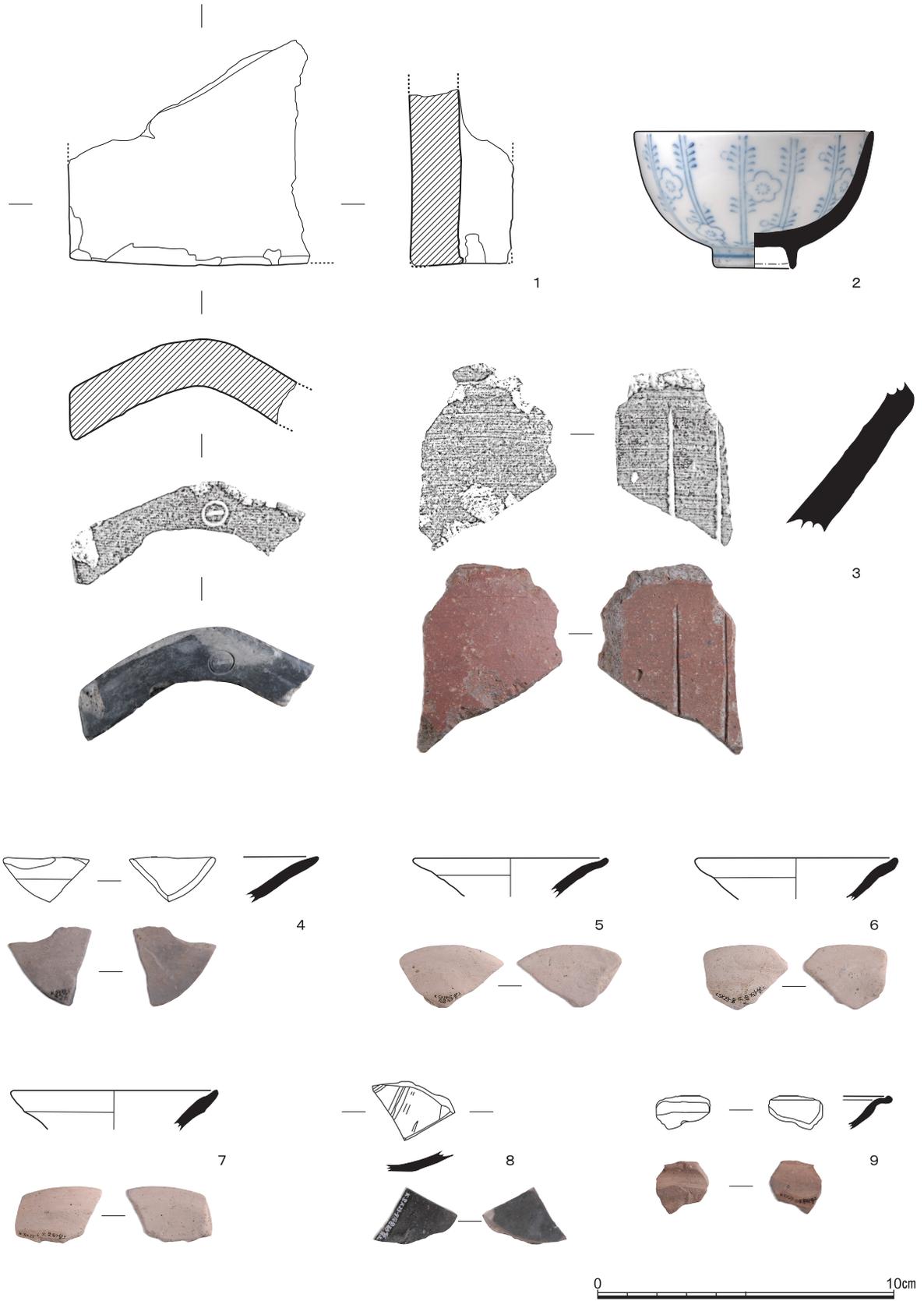


図5 試掘調査出土遺物 (1・2表土出土, 3茶褐色土上面出土, 4茶褐色土出土, 5~9暗灰色土以下出土) 縮尺1/2

の刻印がある。仮に幕末のものであるとすれば、これまで出土していない刻印となるが、時期は特定できない。2は磁器染付の丸椀。口径7.9cmと小ぶりの湯飲み椀で、葉付きの枝と花文が組み合うような意匠が全面を飾る。手描きや印判ではなく機械印刷とみられ、20世紀以降に大学で使用されていたのものかとも思われる。

3は茶褐色土の上面で出土した陶器摺鉢の体部片。口唇部は破損しており、編年的に手がかりとなる先端の形状は不明であるが、内面に篋描によるおろし目を認める。赤褐色の堅緻な焼成からは、信楽ではなく丹波窯産かとみられる。おろし目の特徴から、14世紀代以降、中世後半期の製品であろう。

4は茶褐色土出土の土師器皿口縁部片。暗褐色を呈し、直線的な体部から口唇部がわずかに外反する。京都大学構内遺跡での土師器分類ではF<sub>2</sub>類に相当するかとみられ〔宇野1981〕、京都市域での編年では9A期〔平尾2019〕、15世紀前葉ころの年代に比定されている。

5～9は灰色土からの出土。5～7は白色を呈する口径6cm台の土師器小皿。口縁部しか残っていないが、底部は凸状に盛り上がるいわゆるへそ皿と呼ばれる形態とみられ、14世紀後半～15世紀代にかけての製品だろう。8は瓦器椀底部の小片。外面に高台は付されず、内面にはまばらな暗文が観察される。9は「て」字状口縁と呼ばれる形状をもつ土師器皿。口縁部のみの小片だが、特徴的な形状から10世紀前葉頃に比定できる。

#### 4 小 結

今回の試掘調査は、以上に報告したように、上面の近世層がほとんど残っておらず、また顕著な遺構も確認されなかったことから、残念ながら当初主目的とした幕末期土佐藩邸にかかわる情報は、遺物も含めて得ることはできなかった。探査にみられた地表下1m付近での強い反応は、旧地表面上のコンクリート梁によるものであったと考えられる。しかし、仮に調査地点内に堀が位置していたとすれば、208地点での所見では深さ1mの規模をはかっていることから〔浜崎<sup>ほか</sup>1995〕、今回も下部が検出されるはずである。したがって、少なくとも藩邸堀のような深い遺構は、この場所には通っていなかった、ということは示されたものと評価したい。またあわせて、古代～中世については一帯に浅谷状の地形環境がひろがることもあらためて確認された。歴史時代以降の土地条件と開発過程を復元していくうえで有意義な情報を追加できたといえよう。

#### 〔参考文献〕

- 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005年 「京都大学北部構内BC28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査』
- 富井眞・吉江崇・伊東隆夫・外山秀一・上中央子 2007年 「京都大学北部構内BD28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内BA28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』
- 平尾政幸 2019年 「土師器再考」『洛史』第12号（(公財)京都市埋蔵文化財研究所紀要）



1 調査区トレンチ設定後発掘前全景（南から）



2 調査区西壁北半の様子（北西から）



3 調査区掘り下げ後全景（北から）

図版二  
京都大学北部構内BC28区の試掘調査



1 調査風景（表土除去・南東から）



2 調査風景（表土除去・北西から）



3 調査風景（包含層精査・北東から）



4 調査風景（西壁層位記録・南東から）



5 調査風景（写真撮影・北東から）



6 西壁際深掘り部分断面（東から）

## 第4章 土佐藩白川邸範囲復元に向けての試行と課題

伊藤淳史

はじめに 京都大学吉田キャンパス構内に存在が知られる幕末期藩邸のうち、本部構内の尾張藩吉田邸については、北辺が遺構として未確認であるものの、東・西・南は範囲を確定できている。しかし、北部構内の土佐藩白川邸は、南辺の堀の一部が検出されている以外に範囲の手がかりに乏しく、関連史料も少ない。ここでは、そうした条件下ではあるが、既存の情報をあらためて整理して、その範囲や内容を復元する試案と課題を記して、今後に備えておくことにしたい。

**位置の確認** 慶応4年(1868)の『改正京町御絵図細見大成』においては、「尾張屋敷」の北東側に道を挟んで、南北に長い一角を占める「土州屋敷」が接するように描かれている(図1)。しかしながら、現在の発掘調査の知見からは、幕末の尾張藩吉田邸の東堀ラインは京都大学本部構内の中央やや東寄りをはしることが判明しており、その延長は、北部構内の西端よりも西側にあたっている(図2)。このことから、『細見大成』の示すような尾張藩邸北辺と土佐藩邸南辺の全体が接する位置関係にはならず、実際には北東-南西のななめ向かいの位置関係にあったことを、まず確認しておきたい。

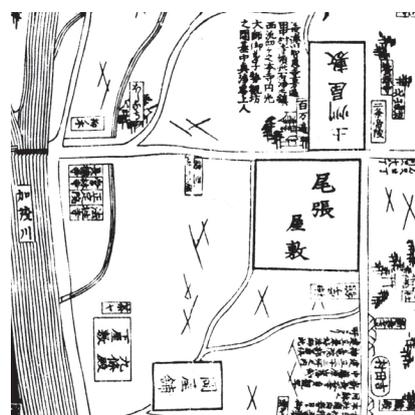


図1 『改正京町御絵図細見大成』(部分)

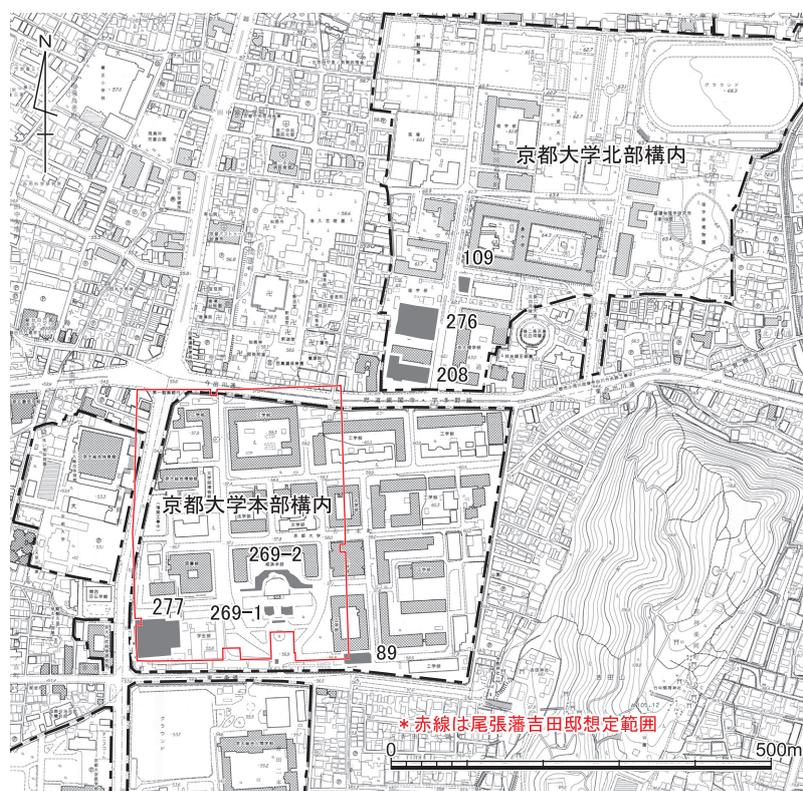


図2 本部構内・北部構内の幕末期藩邸関連遺構検出地点  
縮尺1/1万

**東西範囲の想定** 次に、土佐藩邸の範囲復元の手がかりとなる考古情報について、あらためて確認しておこう。北部構内では、土佐から運ばれた刻印棧瓦が出土している遺構が3地点で確認されており、これらを藩邸に関連するものとして注目する(図3)。

このうち208地点の東西溝は、藩邸南辺の堀と見なしうる幅3m深さ1m前後の規模で、方位を真北から東へ約6度振ってはしる48mが検出された〔浜崎ほか1995〕。埋土からは大量の棧瓦や礫が出土しており、藩邸位置比定の定点となる重要遺構である。西端は調査区外となるが、東端は掘り込みが途切れていることが確認されているため、土橋状の出入り口の可能性も報告では想定されている。ただし、後世の攪乱もあって門など施設の確認は得られていない。

この情報を重視してこの付近に南側出入り口の存在を想定し、さらにそこに藩邸の中軸線を設定できると仮定すると(図3-BEライン)、折り返すことで東西幅100m以上の規模が導かれる。もっとも、東方には後二条天皇陵および邦良親王墓といった御陵が、幕末の段階で既に比定されて存在しており<sup>(1)</sup>、これより東へはひろがり得ない。それをふまえると、藩邸の南辺は中軸線から東へ70m程度までが限界であり、これを西へ折り返した合計140m程度が東西幅の規模として想定されることになる(図3-ABC)。これは、現在の北部構内南辺の東西幅ともおおむね一致している<sup>(2)</sup>。なお、構内の西端は、現在、敷地外との間に地表面では2m近く西へと下る段差が生じている。さきに本書第3章で報告した試掘調査の結果をふまえると、この段差は旧地形を一定程度反映している可能性が高いと考えられ、藩邸の西端推定ライン(図3-AF)をこの付近に比定することの傍証となろう。

**南北範囲の想定2案** 上記した堀のほかには、同じ208地点と276地点で井戸から刻印棧瓦の出土があり〔伊藤ほか2005〕、堀の北側に位置するそれらが藩邸敷地内となることを示している。そして、本書2章で詳細を報告したように、さらに北側の109地点で棧瓦の瓦溜が見つかっており〔浜崎

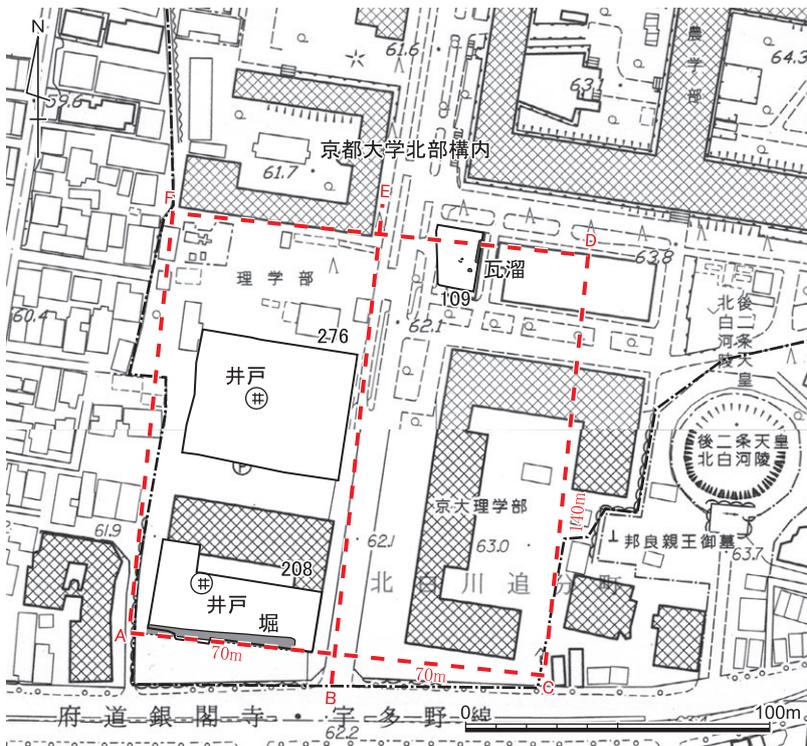


図3 土佐藩邸関連遺構の位置  
(破線は138m四方の参考線)  
縮尺1/2500

1983], 現況での刻印椀瓦出土の最も北となる。そして、この地点では調査区中央付近で南から北へと下る段差が検出されて地形変換点であることと、東西を約140mと想定した場合の方形敷地とすれば南北140mの位置にあたることから、藩邸の北縁位置の候補のひとつとして挙げることができよう(図3-FD)。

しかしながら、140m四方程度では狭小であり、また、絵図(図1)では南北に長く描かれていることをふまえると、敷地はさらに北へひろがり、本部構内の尾張藩吉田邸がそうであるように、練練の空間を設けていた可能性も高いだろう。笹川尚紀氏は、一万八十坪弱の広さであった大阪の住吉陣屋が、慶応2年(1866)～3年にかけて移設されて土佐藩白川邸、そして陸援隊屯所となる経緯を文献史料からつぶさに検証しており、住吉陣屋の坪数を前提にすると白川邸も少なくとも1万坪はあったのではと推察している[笹川2018]。この想定を採用すれば、東西方向140mで1万坪 $\approx$ 33000 $m^2$ 確保とした場合、南北方向は $33000 \div 140 = 235.7 (\approx 236m)$ ・・・という数値が得られる。したがって $236m - 140m = 96m$ さらに北側に敷地北縁が設定されることになる。この範囲を、大正12年(1923)とされる北部構内敷地追加買収時の地籍図に表示した(図4赤枠範囲)。遺構・遺物のみつかる南側の140m四方が屋敷敷地、北側の96mが練練の空間であったとすれば、整合的だろう。また、立地環境としては、これより東方では斜度がきつい扇状地の斜面となっていくため、そちらへの敷地展開は非効率で考えにくい。



図4 北部構内敷地追加買収にかかる地籍図(大正12年)とおもな発掘調査地点位置 縮尺約1/5000

興味深いのは、上記の東西140m×南北236mの範囲が、ちょうど北部構内の第1次買収範囲に近似していることである。北部構内は、大正6年(1917)に理学部拡充用地として西南部の一角が買収された後、大正10年以降の農学部用地取得によって現在の姿へと至ったとされる〔京都大学広報委員会編1977 p.74〕。図4は大正12年とされるもので、大正6年段階の第1次買収範囲は「北方敷地」として空白となっている。かつての藩邸敷地が意識されてこの買収範囲に影響を与えていたならば、上記の想定を裏付ける情報となろう。経緯を今後の探索課題としたい。

**おわりに** 以上のように、遺構としての定点が南辺の一角しかない状況で、ここでは仮定に仮定を重ねながら、範囲想定をおこなってみた。この土佐藩白川邸は、明治3年(1870)には破却され農地に戻っていったものとみられているが〔笹川前掲書〕、現地在が「土州」と呼ばれていたとする土地の古老からの聞き取りが残されている〔京都市北白川小学校編1958 p.285〕。一方で、明治19年(1886)作成とされる白川村の地籍図を見る限りにおいては、土地区画等に全く痕跡を確認出来ない<sup>(3)</sup>。今回想定した範囲内の発掘調査では、近世以降に棚田状の段差は検出されるものの、大学設置以前に大がかりな造成や整地をおこなった様子はいくつか見ることができない。藩邸の設営時や破却後に、現地の土地条件を大きく改変することがなかったのであろう。また、堀についても、図4-450地点の工事立合などでは確認できておらず〔伊藤・富井2018〕、南側以外には設けられなかった可能性も考えておく必要がある。このように、具体的痕跡から敷地範囲を復元する見通しが乏しいなかでは、立地条件や地割などの状況から間接的な検証を積み重ねていく作業もまだ必要と考え、ここにつたない想定を提出するものである。

#### 〔注〕

- (1) 後二条陵は古墳である可能性も指摘されている〔山田2005〕。また近接した地点の立合調査で円筒埴輪がまとまって出土している〔伊藤・富井2018〕。
- (2) かつて東西幅150mとする想定を提出しているが〔伊藤2024〕、今回は当該地の北部構内敷地との関係も考慮して、140mに修正した。設定根拠は同じである。
- (3) 『現今地形一村限山林耕地全図』(京都府立京都学・歴史館蔵、館古365)

#### 〔引用・参考文献〕

- 伊藤淳史 2024年 「遺構・遺物からみた幕末期鴨東の大名屋敷」(藤川昌樹・山本雅和編『近世京都の大名屋敷』平安京・京都研究叢書6)
- 伊藤淳史・富井眞 2018年 「京都大学北部構内BC30区ほかの立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2016年度』
- 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005年 「京都大学北部構内BC28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 京都市北白川小学校編 1958年 『北白川こども風土記』
- 京都大学広報委員会編 1977年 『京都大学建築80年のあゆみ』(京都大学広報別刷)
- 笹川尚紀 2018年 「土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書」『京都大学構内遺跡調査研究年報2016年度』
- 浜崎一志 1983年 「京都大学北部構内BD30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和56年度』
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内BA28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1992年度』
- 山田邦和 2005年 「図80御二条帝北白川陵」(外地昇編『文久山陵図』新人物往来社)

## 第5章 吉田山西麓で採集した中世遺物

伊藤淳史

ここでは、京都大学本部構内の東側に隣接する吉田山西麓にひろがる住宅地の一角で、筆者（伊藤）が採集した遺物について紹介する。

**採集の経緯と状況** 1997年6月、当時近隣に居住していた筆者は、京都大学本部構内東側をはしる道路を歩行中に、塀囲いされていた木造の大形家屋が塀ともども破却撤去され、道路から東側の山裾までの敷地がひろく露呈している状況に遭遇した。場所は、本部構内の東南隅の東方、吉田神社参道から北折して30mほどの地点であり、地番は吉田本町22番地となる（図1）。

京都大学の本部構内と東方の吉田山との間には、東西50m前後の空間に住宅が密に建ち並んでいるが、これらは、明治期に旧制第三高等学校の敷地が設定されて以降、おもに20世紀に入って開発が進んだものであり、それ以前は農地や水路、藪が山裾一带にひろがっていた（図2）。もっとも、遺物を採集した現地は南端近くに位置し、そのなかでも比較的早くに吉田今宮社（後述）や祖霊社（明治16年）といった神社施設が建てられていた一角にあたり、吉田山が西方へと張り出していることから、大学敷地との幅が狭まる環境にある。道路から東へは20m程度の平地しかなく、その東に比高差1.5m程度の段差があって高まった幅10mほどのテラス状の空間がひろがっていて、当時も今も駐車場として利用されている。そして東側に、急激な傾斜をもつ吉田山西側の崖面へとつづく。南方で実施された花折断面にかかわる学術調査（図1の★印地点）では、ここに断層がはしっていることが確認され、最新活動時期は約2000年前以前と報告されている〔岡田2007〕。

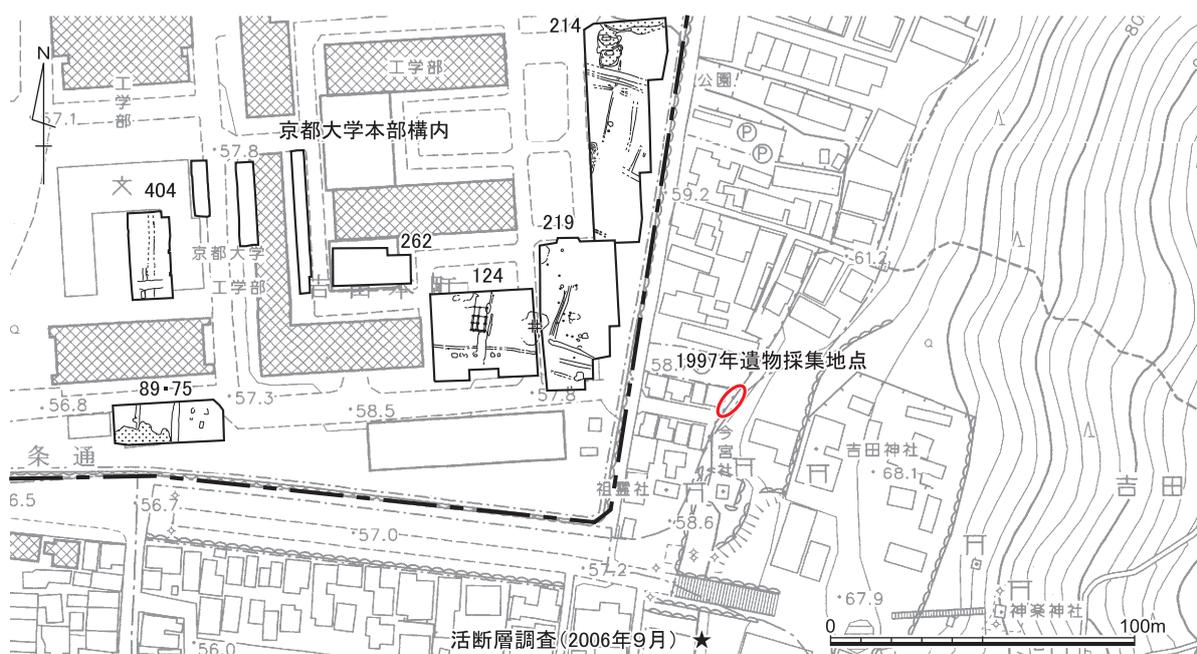


図1 1997年遺物採集地点（赤印）と周辺の調査地点 縮尺1/2500



図2 遺物採集地点の位置 (赤○印) (1:明治25年(1892)仮製2万分1地形図, 2:1975年空撮, 3:2020年空撮, 2と3は国土地理院サイト地図・空中写真閲覧サービスにより取得し切り出し



図3 遺物採集地点の状況 (1997年6月) 南西から



図4 遺物採集地点の現状 (2024年5月) 南から

筆者が遭遇したのは、この段差の新鮮な壁面が露出し、そのふもとに土器片などが散乱している状況であった（図3）。壁面には、1 m程度の表土の下に黒褐色や暗灰色の色調の層が堆積している様子が観察されたが、地表に散乱していた遺物がいずれの層に由来するものかはわからない。さしあたり急ぎ目についた遺物を回収して現地を離れたが、その後すぐに宅地化の工事が始まり壁面はブロック塀で塞がれたため、子細な観察を果たすことなく今に至っている。

現在の現地は、東西に並ぶ4棟ずつが向き合う計8棟の家屋が、段差際まで密に建ち並んでいる。ただし、段差とその東方のテラス状の範囲はそのまま残されており、地下には遺物を包含する堆積層も遺存している可能性が高いと推測する（図2・4）。

**採集した遺物（図5）** A4サイズ程度のビニール袋ひとつ分の破片を回収している。ほとんどが中世の土師器皿類で、ほか輸入磁器とみられる底部が2点ある。

土師器皿類は、すべて褐色を呈するもので、白色を呈するものはみられない。口縁の残存率がおおむね1/12以上のものをすべて図化した（1～11）、最も良くても1/6程度で、また底部まで全形の把握されるものもない。口径は、大（14～15cm代）中（12cm前後）小（9cm前後）となり、口縁部周辺の仕上げは一段撫で手法で面取りするものが主体であるが、二段撫でに近い雰囲気のものも認められる（5）。採集品でありかつ小片が多いことから、あくまで可能性の指摘にとどまるが、京都市域での土師器皿編年〔平尾2019〕での6 A期、暦年では12世紀後葉ころの特徴でまとまっていると言えよう。

輸入磁器は、白磁（12）と青磁（13）の底部。いずれも径の小さな平底であり、皿形となるものであろう。12の白磁は、淡い黄白色の釉色で、底部まわりは露胎している。見込みに圏線がめぐる。〔山本2022〕によるD期の白磁皿Ⅷ類（福建省系）とされるものに相当するであろうか。13の青磁は、濃い暗緑色の釉色で、底部内面は櫛描の長短の波文で埋められている。同じくD期の竜泉窯系青磁皿かとみられる。このD期は12世紀中頃～後半と比定されているので、上述の土師器皿類と年代的に齟齬はない。

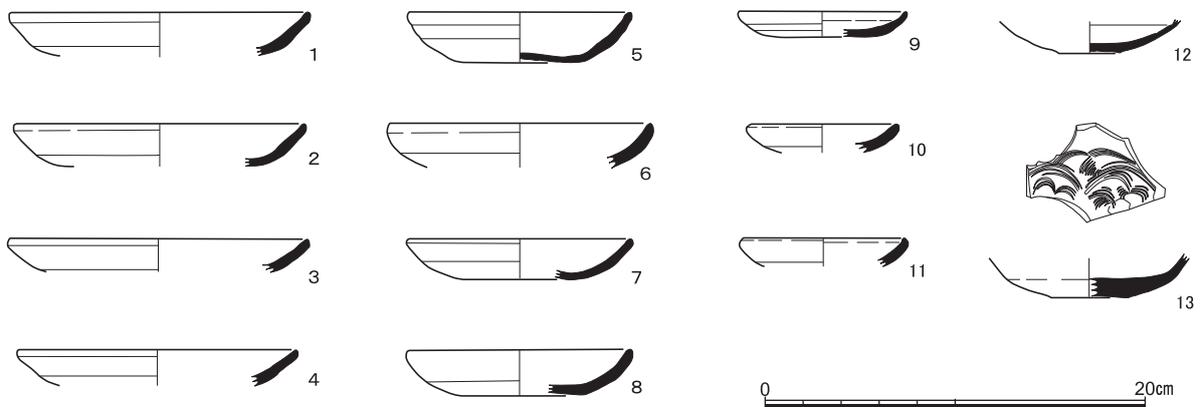


図5 吉田山西麓採集遺物（1～11土師器，12・13青磁）

**採集資料の意義** 以上に紹介してきたように、資料は12世紀後葉ごろにまとまるものであり、採集地点一帯にその時期の遺跡がひろがっている可能性が極めて高いことが明らかとなった。この地点から西へ50mほど隔てた本部構内の東南隅では、124地点や219地点の調査が実施されており、12～13世紀代の遺構や遺物が濃密に確認されている（図1）〔泉・飛野1986〕〔千葉ほか1997〕。こうした時期の吉田地域一帯においては、白川道の路面存在が明瞭化し、それ沿いの開発が活発化することは既に示してきたところであるが〔伊藤・長尾2022〕、現在の京都大学本部構内の範囲を超えて、吉田山の山際いっぱいまで開発の手が及んでいたことを、今回の採集資料の存在は示すもの、と評価したい。

なお、遺物が採集された壁面の上部となるテラス状の平坦面南方には、吉田社末社で吉田地区の産土神である今宮社が鎮座している。現在の社殿は文化13年（1816）の造営ともされるが〔鈴鹿2000 pp.160-166〕、鎮座の由緒や場所の変遷などは詳らかになっていない。今回の資料が直接関連するものとは示し得ないものの、断層の影響から山裾にテラス状の地形が卓越していた土地条件であることや、中世当初より開発が及んでいた空間であったことが、近世以降の在地神が置かれた淵源となっている可能性はあろう。こうした歴史的な景観変遷を、他時期の史資料を探索して実証的に跡づけていくことが、今後必要である。

#### 〔引用・参考文献〕

- 泉拓良・飛野博文 1986年 「京都大学本部構内A T29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和58年度』
- 伊藤淳史・長尾玲 2022年 「白川道沿いの大規模廃棄土坑—本部構内A X28区S K51の出土資料—」『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』
- 岡田篤正 2007年 「花折断層南部における諸性質と吉田山周辺の地形発達」『歴史都市防災論文集』vol.1
- 鈴鹿隆男 2000年 『吉田探訪誌』ナカニシヤ出版
- 千葉豊・伊藤淳史・古賀秀策 1997年 「京都大学本部構内A U30区・A V30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和1993年度』
- 山本信夫 2022年 「中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説中世の土器・陶磁器』

## 第二部 研究・論考編

### 第6章 「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討

伊藤淳史

#### 1 はじめに—問題の所在と本稿の目的—

京都市内の平安時代後期～鎌倉時代を中心とする時期の遺跡からは、製作に用いた粘土帯の積み上げ痕跡を顕著にとどめる独特な鉢形土師器が出土する。発掘に関係する人達の間では、いつの頃からか俗に「塩壺（しおつぼ）」と呼ばれてきた製品である。大量に出土するものではなく、土師器碗皿類に混じってせいぜい1～数点見かけることがある、といった程度の頻度の、目立たない存在であった。

鴨東に位置する京都大学吉田キャンパス構内からも、この俗称「塩壺」は出土している。筆者（伊藤）は、長らく構内遺跡の調査にかかわるなかで、本部構内を横切る古道の白川道（志賀越え道）に沿う地点で、これら俗称「塩壺」が多数出土する状況に遭遇し、他の遺跡と異なる量の多さが気がかりであり続けてきた。のちに詳しくとりあげるが、例えば、コンテナ約400箱が出土したA X28区の大規模廃棄土坑S K51の資料を再整理する中では、「厚手鉢形土器」と仮称して19点を報告した〔伊藤・長尾2022 p.113〕。これでもすべてを報告できていない。また、その200m西南に位置するA U25区の井戸S E 2からは、最低でも11点の出土をみている〔伊藤・梶原2007 pp.138-140〕。

しかしながら、こうした状況を評価しようにも、まずもってこの特異な製品群について、遺物として参照すべき検討がなされた履歴がほとんど見当たらないのである。平安京・中世都市京都においては、土師器皿類の編年研究を中心に著しい進捗をみせてきたが、その過程で、普遍に存在はするが主体を占めることのないこの一群が俎上に載ることはなかった。このたび改訂刊行された『新版 概説 中世の土器・陶磁器』〔日本中世土器研究会編2022〕でも、全く取り上げられてはいない。

したがって、まずはこの俗称「塩壺」と呼ばれてきた一群について、あらためて出土遺跡と報告資料の所在を把握して特徴を整理・明確化し、先行事例のない研究の礎を据える基礎作業を果たしておくことを、最大の目的としたい。平安京・中世都市京都を象徴する土師器皿類とともに有ったとみられる特異品の動静把握は、それら土師器が濃厚に及んだ空間たる鴨東地域の都市化の実態や特質の一端を明らかにする一助ともなろう。

#### 2 対象資料の特徴

それではまず、対象となる資料の特徴を明示し、ここで取り扱う範囲をはっきりさせておきたい。京大構内出土の仮称厚手鉢形土器の一群を例示して、包括的な定義付けをしておく（図1）。以下に箇条書きする。なお、形態のばらつきなど細部の異同や例外などについては後の検討で言及する。

- a : 土師器の鉢形器形で、口径>底径である
- b : 器壁は厚手で5mm～1cm強をはかる（同時期の皿類はおおむね5mm程度以下）
- c : 各粘土帯の継ぎ目（積み上げ）痕が、外面を中心に顕著に残される

さしあたり以上の特徴を備えたもので、かつ平安京・中世京都とその周辺域という時空間でもっぱら出土が知られてきたもの、ということになる。とりわけ特徴cは独特であり、若狭湾岸の船岡式をはじめ、古代の製塩土器にも顕著に認められるものであって、外見的に非常に類似している。「塩壺」というような俗称が、誰によっていつ示されたのかを、現状で具体的には明らかにできていないが、こうした製塩資料との外見的類似性が由来となっていることは想像に難くない。次節でその過程を追跡していくことにしよう。

### 3 資料認識の過程と問題の所在

京都市域の中世土師器資料は、1970年代に本格化した埋蔵文化財調査により急激に報告例が増加した。さきに、「塩壺」なる俗称の由来は不明としたが、その頃にこの特異な鉢形土器の存在は認識され、関係者間で俗称が広まったと推測できよう。参照すべき検討履歴も見当たらない、とも述べたが、ここでは当該資料の報告文献を遡及してそれらが認識される過程を検証し、そこから研究上の問題把握へと至ることにしたい。

**報告の初見** 管見によるところでは、さきに示した特徴をもつ資料が報告された最初は、名称はともかく、1975年に刊行された左京四条一坊の報告書と把握している〔平安京調査会1975 図版66-E526〕。ただしこの例は、外面に粘土紐積み上げ痕をとどめた鉢ではありながら、脚付というイレギュラーな製品である<sup>(1)</sup>。観察表に特徴の記述はあるが、ほかに格段の言及はない。また、出土した遺構(SK12)は16世紀半ばに位置づけられているが、この資料の年代観としては疑問に思われるものと言える。いずれにしてもこれらの問題はあらためてとりあげたい。

典型的な資料の初出としては、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会発行の『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14 (1976年10月26日) という青焼きの速報がある(図2)。同書図-15の18, No.47地点(烏丸綾



図1 京大構内出土の厚手鉢形土器集合 (A X28区SK51およびAU25区SE2出土品)



図2 資料が報告された『烏丸線内遺跡調査抄報』の表紙と挿図

小路遺跡) 土坑32出土の土師質土器である。図示のみで本文中に記述はない。なお、当該の資料は後年に報告されず、No.55地点土坑12出土の別個体が「製塩土器に近い様相をもつ土師器の鉢」「烏丸線内の出土遺物のうちでは類例の少ないもの」として報告されている〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981 p.106図-52〕。

**機能の推測と言及** 1976年には、右京区の常盤東ノ町古墳において中世土壙墓群が発掘調査され、翌年刊行の報告書で、中世土師器の中の1点として提示された〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1977 Fig.13-11〕。同書の観察表中には「いわゆる製塩土器といわれるもの」と記述が認められる〔前掲書 p.45〕。よってその頃には、前述したような、外見の類似に由来する機能の推測と呼称が共有されつつあった状況がうかがえよう。

そのような、機能を直接的に示すような「塩壺」の名称が、報告書の器種名として確認されるのは、1978年3月に刊行された吉田近衛町遺跡の報告に際してである〔京都府教育委員会1978 pp.163-211〕<sup>(2)</sup>。同書中の「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」では、土師質土器の器種として「塩壺」が設定され、土坑SK01出土3点、SK04出土1点が示された〔前掲書 第64図23～25, 第71図193〕。そして、本文中では、出土土器群の所属年代を推測する文脈において、「一条大路大土壙で顕著な終末期の瓦器碗が今回の調査では極く少量しか認められていないことや新たに塩壺が加わること等は、後出的な様相であるが、塩壺は近世以降に一般的な型作りのものを含まない。」と言及している〔前掲書 p.181〕。この部分を読む限りでは、近世の焼塩壺と同種の機能をもつ製品としてこれらを見做していたことがわかっていよう。

しかし、器種名として「塩壺」を明示する報告は、上記が最初にしてほぼ唯一となる。同じ頃にまとまった中世土師器資料が報告された同志社キャンパスの常盤井殿町遺跡報告においては、該当する類型は土師質の「鉢」として報告され〔同志社大学校地学術調査委員会1978 図版7-87, 図版8-29〕、以後、他の遺跡でも同様な取り扱いが主流となっていく。ちなみに、京大構内においては、1976年～77年にかけて、病院構内南端の白河北殿北辺想定地が発掘調査され、報告に際して体系的な中世土師器皿の分類と編年が提示されることとなるが〔京都大学埋蔵文化財研究センター 1981〕、この類の鉢の報告はみられない。構内における初出は、さきに例示した一群が出土したAX28区の大規模廃棄土坑SK51の報告であり、鉢としながら、「一般に塩壺といわれているものである」と追記

された〔五十川1983 p.12〕。

**製塩土器か焼塩壺か、それ以外か** いずれにしる、1980年代を迎えるころには、古代末～中世前半を中心とする時期に組成するこの類型の一群を指すものとして、「塩壺」という俗称があまねく普及していたことは確かと思われる。ただし、残念ながらその本来的な役割について、資料から検証する方向性は生まれず、あくまで外見の類似から塩関連資料と推断される状況が継続していった。

例えば、古代～中世土器の遺構出土点数が詳細に計量された左京八条三坊の報告書においては、「鉢には、この他に製塩土器に似た組成の一群（494～497）がある。京都で製塩を行っていたと考えるよりは、現時点では大消費地である京都の中から出土していることから塩の容器と類推する方が妥当であると考えている。」との記載が見られる〔(財)京都市埋蔵文化財研究所1982 p.44〕。また、古代学協会や京都文化財団では、これらの一群を「製塩土器」として扱い、9世紀ごろの本来の製塩土器ととり混ぜて報告されていることもある〔(財)古代学協会1983 p.74, (財)京都文化財団1989 p.23・57・67〕。

こうした状況のなか、山城地域における古代の製塩土器を集成検討した秋山浩三は、「なお、平安京出土品でしばしば製塩土器として報告されることが多い、古代末～中世（主体は一三世紀）の製塩土器に類似した製品は、その性格等は未解決であるが、古代の製塩土器との直接的な系譜はみられず、また胎土も土師器に共通したものであるため本稿では除外する」として、製塩土器と評価しなかった〔秋山1994 p.527〕。また、梅川光隆は、平安時代の史料から二重構造の置き炉の存在を論証しながら、炉に仕掛ける火容製品のうち小型の形態に相当するのがこの鉢形製品であり、曲物内に仕掛けて火桶に用いたとする想定を提出している〔梅川2001 p.122〕。この梅川の想定は、塩関連とする類推以外で唯一の興味深い指摘であるが、残念ながら資料からの検証は深められず今に至っている。

以上、研究史と呼べるものを欠くなか、報告の際の取り扱われ方を中心に瞥見した。頻繁に出土するひとつの類型でありながら、全体像が把握されないまま、類推による機能への言及が散見される状況が続いていると言って良い。以下には、まずは実物資料を集成して出土の実態を時空間的に確認する作業から、はじめていくこととしたい。

#### 4 資料の集成と検討(1)―鴨東地域北半―

**検討対象の資料** 「塩壺」などと俗称され、さきの特徴 a～c を示したような土師器鉢形土器について、2001年度末までに報告された事例を、可能な限り抽出集成した。まずはこれらのうち、吉田から岡崎にかけての鴨東地域北半の資料、すなわち、京大吉田キャンパス構内（岡崎地区を含む）出土のすべて実見して確認し得た67点を中心に、他調査機関（京都府教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化市民局・京都文化財団・民間調査団体等）の調査報告から把握できた34点を補った101点で検討をおこない、結果をもとにその後他地域の検討へと進むこととしたい。対象資料は末尾の表に一覧としてまとめ（表1）、報告される地点の位置と点数は（図3）に示した。

なお、以後の本稿は、土師器の編年と暦年代観については〔平尾2019〕を用いる。

**形態の分類** まずは、京大本部構内のまとまった遺構出土の資料群で、同時期に存在した全形のバラエティを確認する。

さきに「厚手鉢形土器」と仮称して未報告資料を19点紹介した本部構内 A X 28 区の土器溜 S K 51 は



図3 鴨東地域北半の対象資料報告地点と点数 縮尺1/1.5万

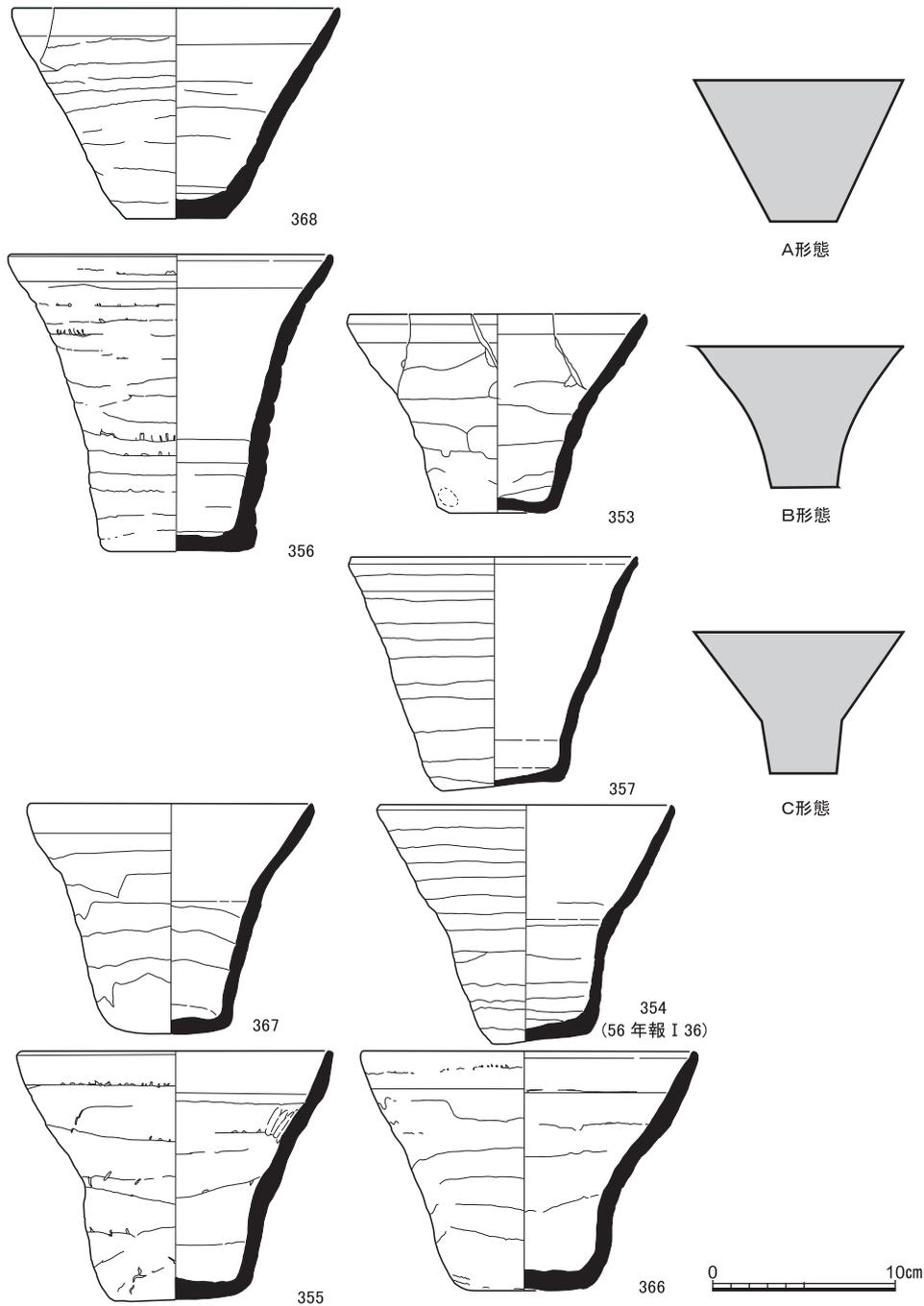


図4 形態の典型模式図とA X28区SK51出土品（実測図は縮尺1/4・番号は報告時のもの）

〔伊藤・長尾2022〕，土師器皿類は平尾による編年で6 B期，おおむね13世紀前葉に比定できるまとまりである。このなかに鉢で全形のわかる資料が9点ある〔前掲書図11〕。これらのプロポーシヨンの変異は漸移的であり，また個体差の幅も大きなものであるが，以下のA～Cの3つで形態の典型を示すことができる（図4）。

- A形態：底部から直線的に口縁へと至る逆台形の器形（368）
- B形態：底部から全体がゆるやかに外反して口縁に至る器形（353・356）
- C形態：底部から途中で屈曲点を有して外反し口縁へと至る器形（上記以外）

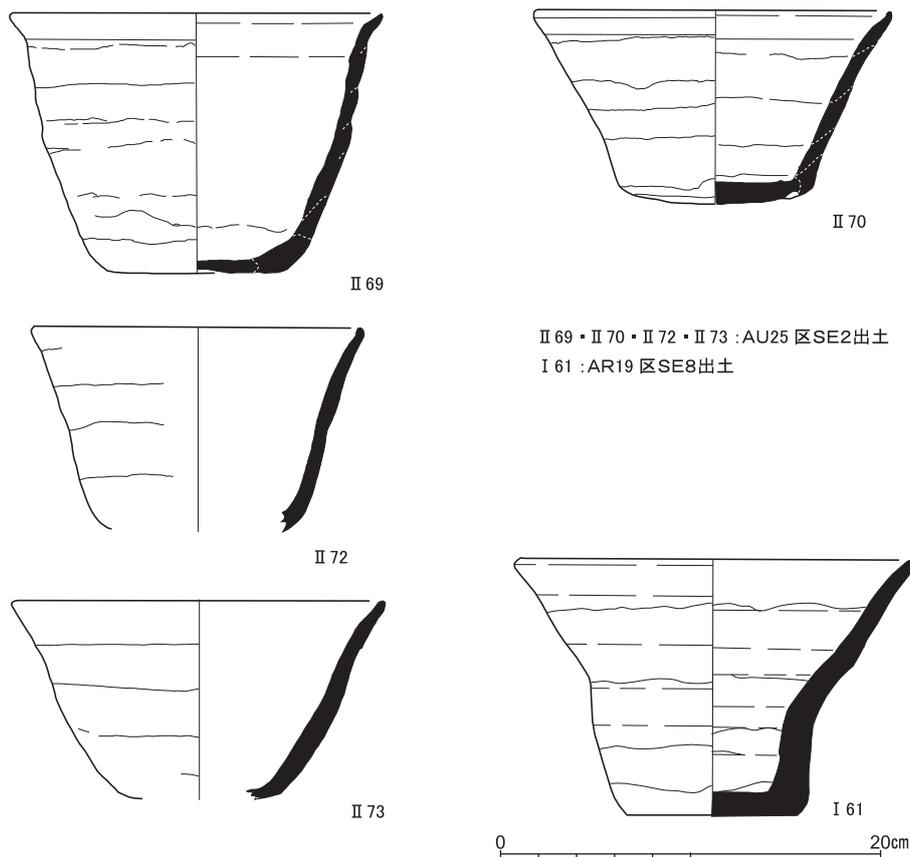


図5 AU25区SE2およびAR19区SE8出土品 縮尺1/4 (番号は報告時のもの)

傾向としては、A形態と明言できる個体は少なく、B形態とC形態が主体となっている、と評価されよう。

一方、その西南に200m離れたAU25区井戸SE2出土資料は、平尾の6A期、12世紀後葉に比定できる〔伊藤・梶原2007〕<sup>(3)</sup>。報告した11点のうち、口縁～底部付近まで遺存してほぼ全形復元可能な個体は4点ある(図5)。これらは、SK51の一群と較べると相違の幅は小さく、底部からのたちあがり直線的となる傾向が強いように感じられるが、わずかながら外反傾向がうかがえるB形態(II72・II73)と、直線的なA形態(II69・II70)とに区分は可能である。ただし、A形態は底径が大きめで、とくにII69のような口径との差が少なめであるバケツ状器形は、SK51の一群には認められないといえる。

なお、上記した4点以外の破片資料には、体部に屈曲点をもつC形態とするべきものが含まれており、同じ12世紀後葉に比定できる医学部構内AR19区井戸SE8出土資料中にも〔千葉2008 図7〕、全形の把握できるC形態が確認できる(図5-I61)。したがって、6A期においてもA～Cの3形態のバリエーションは同様に認められるとみて良い。暦年代で30～50年程度の時間差がある以上2つの資料群を比較した限りにおいては、A形態の顕在さや底径の大きさに若干の差はうかがわれたものの、形態のバリエーションに顕著な違いを認めることはできないといえよう。

上記より時期の下る14世紀代の遺構出土資料について、京大構内では形態の把握できるような複数例のまとまった出土に乏しい。キャンパス外の白河街区(吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡)での出土

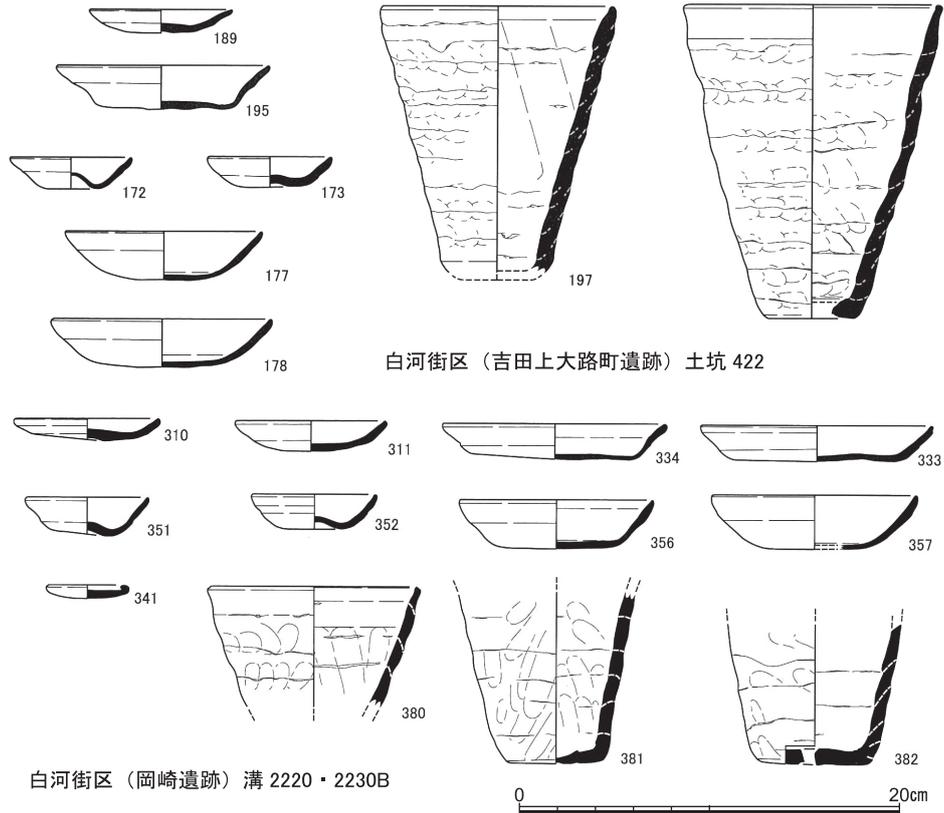


図6 14世紀代の遺構出土資料 (吉田上大路町遺跡・岡崎遺跡) 縮尺1/4 (番号は報告時のもの)

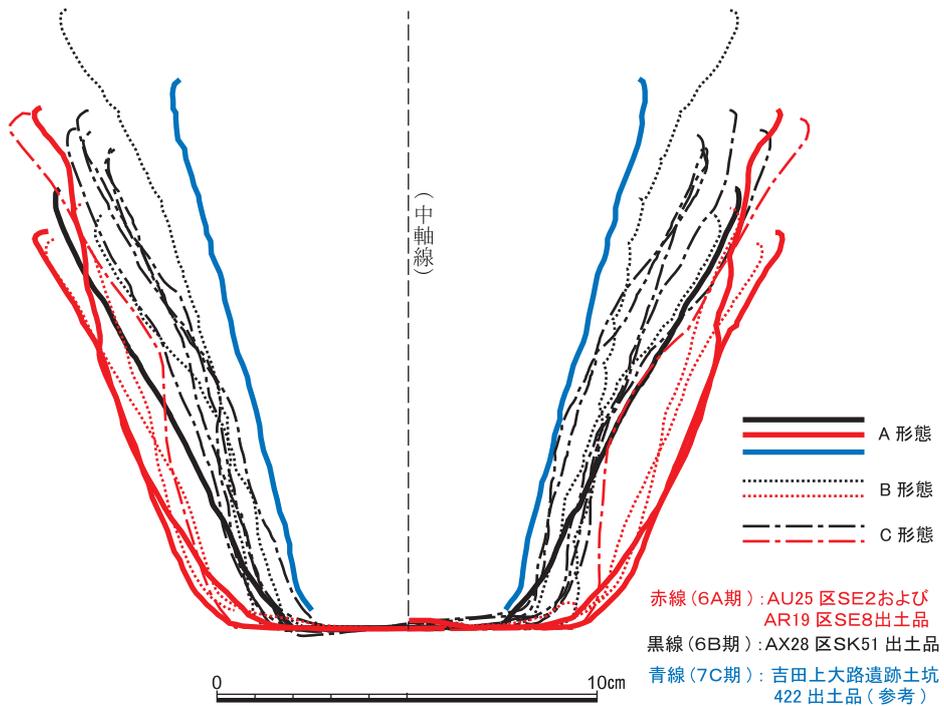


図7 2つの資料群の外形輪郭の比較 縮尺1/2



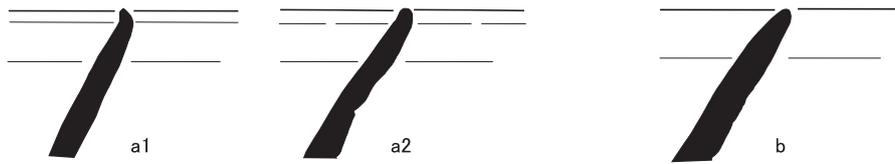


図9 口縁部形態模式図

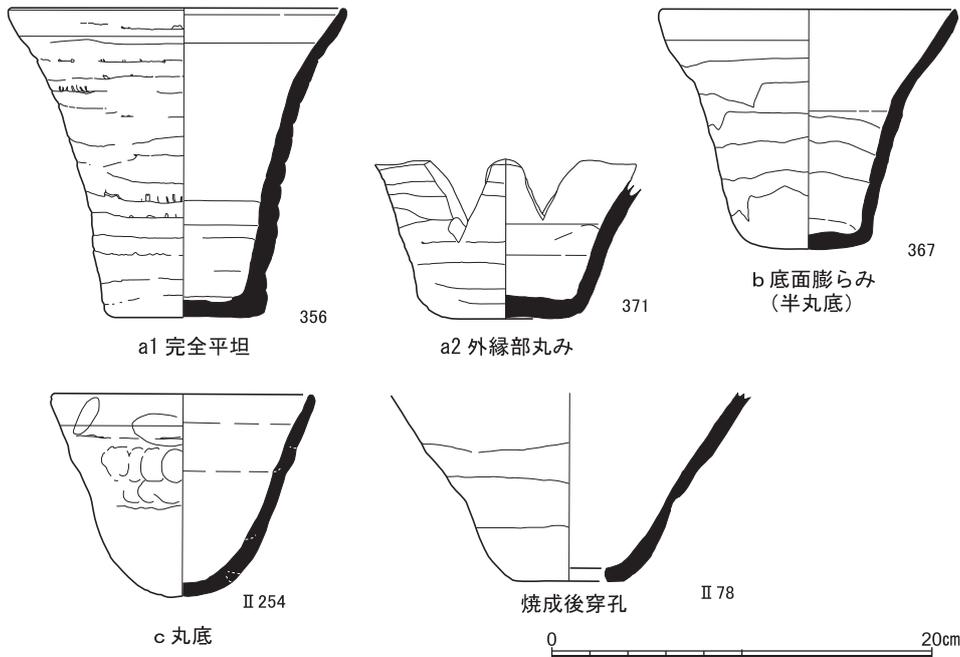


図10 底部の諸形態 縮尺1/4 (番号は報告時のもの)

(356・367・371AX28区SK51, II78AU25区SE2, II254AU25区SD14出土)

端部がつまみ上げられて外端面が形成される一段撫で面取り手法が主体となっている。強いつまみ上げで内傾する外端面が明瞭に形成されるものから (a 1), 外端面がやや曖昧なもの (a 2) まで、面の形成には強弱がある。つまみ上げもなく、そのまま端部が丸く収められるもの (b) も、存在する。

先行する6A期のSE2の資料も同様な様相を呈しているが、同時期の土師器皿にみられる二段撫で手法と呼び得るような、強い横撫でが重ねられる口縁部はみられない。12世紀中葉の5B期から後葉の6A期にかけて、土師器皿類の口縁形態の変化傾向として、二段撫でが消滅して口唇部に内傾する外端面が形成されていく様相が示されている〔平尾2019 図7〕。これを踏まえると、この厚手鉢形土器が一定程度定型化していく過程が、一段撫で面取り手法が完成していく時期に並行するものと理解されるとともに、この一群の製作者達が、皿類と密接に関連する系譜に連なるものであったことを示していよう。

**底部の形態と輪状圧痕** 底部は、逆台形の鉢形を接地させて支える部位であるにもかかわらず、堅牢や安定を配慮しないづくりが目立つ。体部の全体が厚手の器壁であるせいか、底部も体部とほぼ同じ厚みで造られている。形態を分類すると(図10)、底面をきっちりと平坦に仕上げているもの(a 1)は少数であり、多くは粗雑に撫でつけられるのみで外縁部は丸みを帯び、平坦面の割合は乏しい(a 2)。底面が弱くふくらみを帯びて「半丸底」と呼べるようなもの(b)、完全に丸底化しているもの

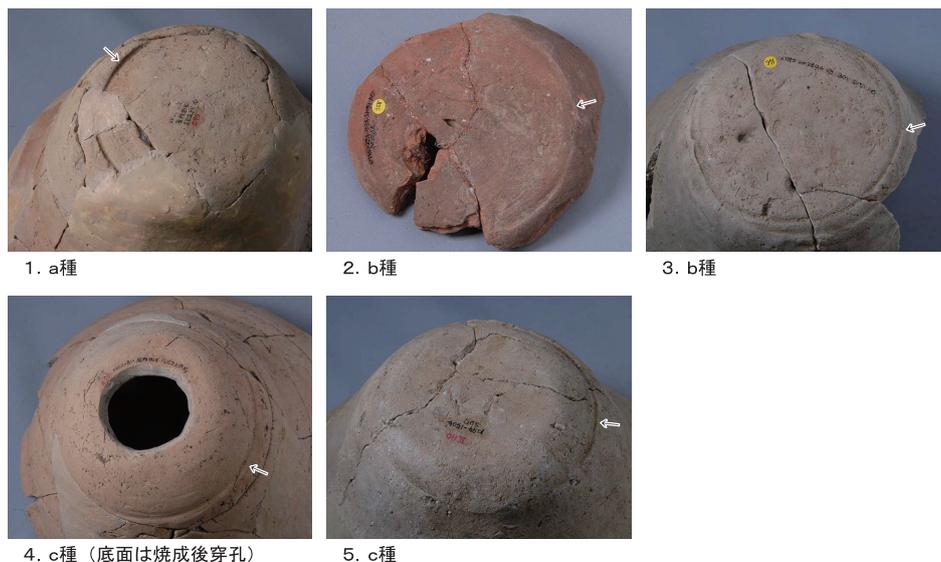


図11 底部の輪状圧痕諸例 (→で示したもの)

(2・3 AX28区SK51, 1・4 : AU25区SE2, 5 : AX25区SD7出土)

も存在する(c)。なお、SE2の資料中には底面に大きな焼成後穿孔を施すものが複数認められる(図10-II78, 図11-4)。機能の問題ともかかわるため、この特徴は後にあらためて取り上げる。

以上のうち、多くの個体の底部に、輪状の圧痕が存在することも注意される(図11)。上述した底部形態のうち、きっちりと平坦に仕上げているものにはいずれも認められないが、それ以外の底部形態では、体部へと立ち上がる屈曲部付近をめぐるように観察される。いずれも直径8cm程度になる圧痕で、深浅や広狭の状態は多様であるが、大別すると、底面周縁に深めにしっかり押されているもの(a種)、浅めの線が底部の周縁をめぐるもの(b種)のほかに、丸底傾向の底部では体部との間が段状を呈しているもの(c種)も認められる。c種の場合、凹んだ型に粘土を押しつけて底部を成形した痕跡と見れなくもない。これらと類似の痕跡としては、時期は異なるが、8~9世紀代に都城周辺で特徴的に存在する人面墨書壺形土器底部の「外型作り成形技法」によるものが想起される〔上村1992〕。特に、深い圧痕は同種の型作りの採用を推測させるものだが、類似と思われる痕跡について異なる報告もある<sup>(5)</sup>。こうした明瞭な深い圧痕は少なく、深浅がまちまちの痕跡がとどめられていることも考慮すると、型作りに限定できず、大きさの目安となる枠のようなものも想定すべきかもしれない。いずれにせよ、この輪状痕跡も、製作技術の系譜を探究する上でも重要な情報といえ、後にあらためて検討を加える。

**体部の粘土帯積み上げ痕跡** この一群を最も特徴づけている、器面をめぐる粘土帯の積み上げ痕跡である(図12)。6B期のSK51出土資料にみられるバラエティを示した。幅2cm程度の広い粘土帯によるものから(1・3)幅1cmに満たない紐状の粘土帯を用いて十数段積み上げているものまで(同5・7)、多様で漸移的なあり方を認める。6A期のSE2出土資料群には、紐状の細い粘土帯を多段に積み上げるものはみられず、幅のある粘土帯が主体となっている。幅の広いものから狭いものへ、ひらたく延ばした帯状のものから紐状のままのもの積み上げへ、という時間的な変化の傾向を想定したくなるが、6B期以降の資料においても幅の広い粘土帯積み上げは継続して広く認められる。この種の鉢が定着していく過程において、技術的に多様化していったと考える方が自然かもしれない。

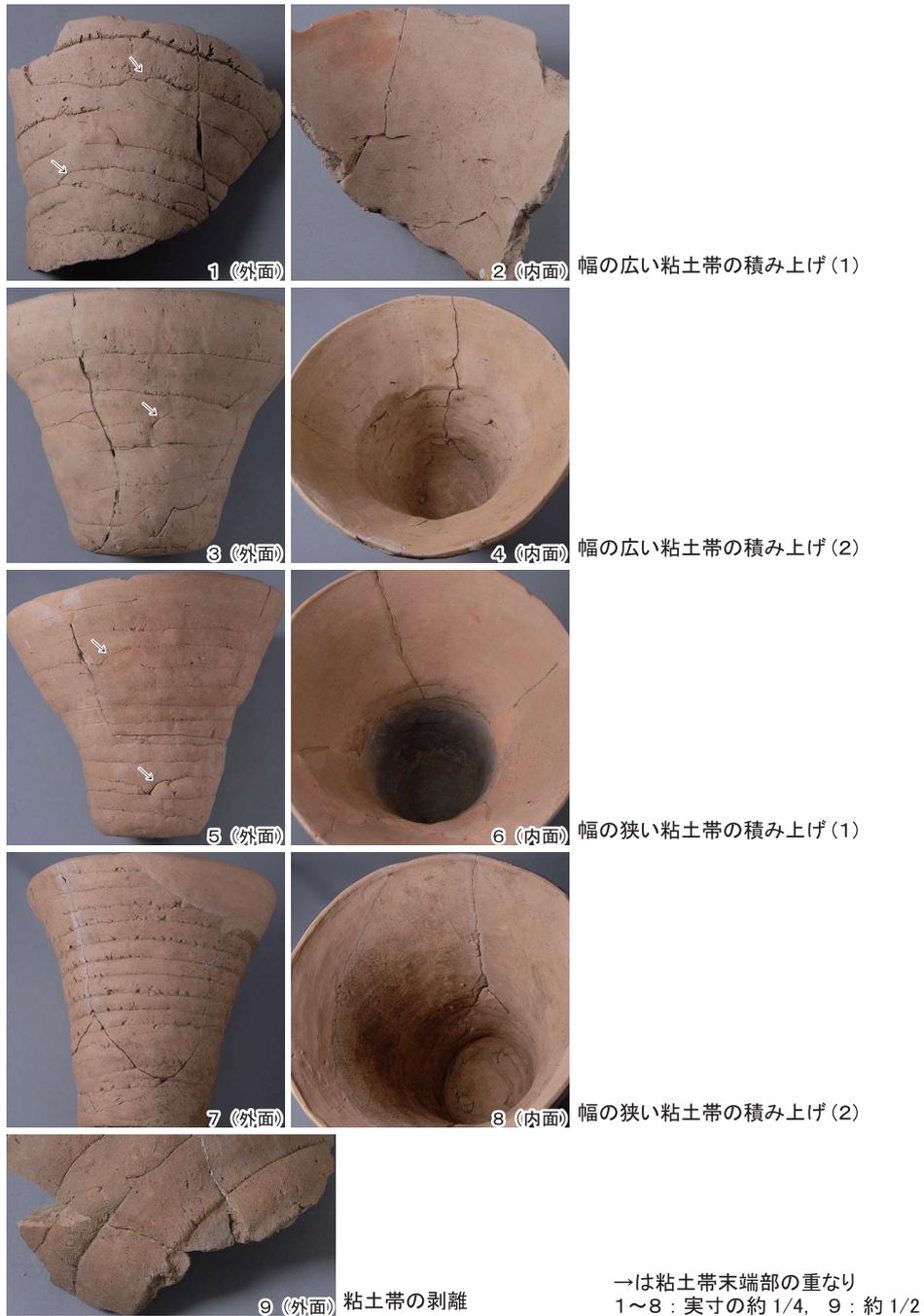
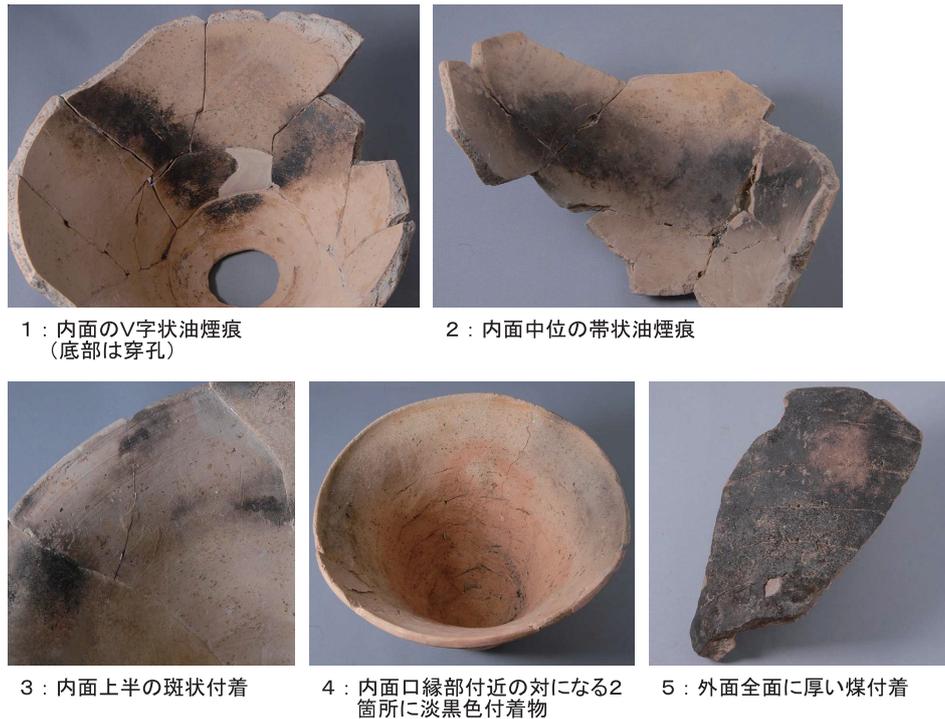


図12 粘土帯積み上げ痕 (いずれも A X 28 区 S K 51 出土)

具体的な積み上げ方は、粘土帯を時計回りに輪状に巻いたものを、重ね部分の面が内側へと傾斜する内傾接合で積み重ねている。とぐろを巻くように長い粘土帯を多段に巻き上げる例は稀であり、巻き上げても2~3段分程度で、輪積みを併用している。そのため、器面には、水平方向にはしる積み上げ痕以外に、写真に矢印で示した位置にみられるような、粘土帯末端部を示す縦位方向の痕跡も頻繁に残されている。

また内面については、指が届く範囲の上半部のみを撫でにより丁寧に継ぎ目を消して平滑にし、下半部は積み上げが残されていることが通常である(2・4・6・8)。ただし、それらの仕上げ方に

1 : 内面のV字状油煙痕  
(底部は穿孔)

2 : 内面中位の帯状油煙痕

3 : 内面上半の斑状付着

4 : 内面口縁部付近の対になる2箇所に淡黒色付着物

5 : 外面全面に厚い煤付着

図13 器面にみられる付着物事例 (1・2 : AU25区SE 2, 3 : AG20区SE 14, 4 : AW26区SE 3, 5 : AR19区SE 8出土)

も精粗があって、積み上げ痕の残り方は一定していない。

なお、このように外面を中心に粘土帯積み上げ痕は非常に明瞭であるが、その積み上げ部位で剥離破損して、いわゆる「擬口縁」のような状況が確認出来るような事例は多くない(9)。このことは、粘土帯積み上げによる成形が、途中でさしたる休止を挟まずに一気に達成されていることを反映するのではないと思われる。

**使用の痕跡** 実際にどのような用途に供されていたのかについての重要な手がかりとなる使用の痕跡だが、それが確認できる資料は少ない。今回、実資料をつぶさに観察し得た京大構内出土の67点のうちで認められたものを紹介するが、最も多数がまとまって出土しているSK51出土資料中には、顕著な使用痕跡をとどめるものは見つからなかった。

事例として最も多いのは、内面に油煙や煤とみられる黒色物が付着するもので、6点を確認した(図13)。6A期のまとまった資料SE 2出土品中には、先述したように、底部に大きな穿孔がほどこされるものが複数点存在するが、うち1点には底部に向かって「V」字状を呈するように黒色帯状の油煙痕が付着している(1)。また、底部穿孔の有無は定かでは無いが、帯状に同様な太い油煙痕跡がめぐるものも存在する(2)。これらは、下部に油入れの容器を据えて組み合わせ、灯火具としたものかもしれない。ただし、焼成後の穿孔であることに鑑みると、転用された状態であった可能性もあろう<sup>(6)</sup>。このほかは、上述の痕跡よりもやや淡い黒色物の付着がみられるもので、内面上半全面をまだらに覆うものや(3)、口縁部付近の両端に小さく付着するもの(4)、等がみられる。内部で火を扱った痕跡ではあるだろう。

なお、外面に厚く煤が付着しているものは4点確認した。うち3点は同一地点(医学部構内AR19

区)の出土である(5)。被熱していることは明らかであるが、いずれの資料も内面にこれに対応するような焦げや黒変は確認されず、器表面の剥落が一部にみられるのみにとどまっている。

以上のように、表面的に観察できる痕跡から具体的な使用状況を推測できたものはごく一部であり、それも、本来意図された用途に即していたのかは、定かではない。ただ、被熱にともない激しく劣化したものはみられず、少なくとも製塩作業を行った容器ではない、と断言できるだろう。

**形態の変遷** ここまでの結果をふまえつつ、鴨東地域北部について、変遷を作成し提示する(図14)。以上の検討では言及してこなかった、特異例と言える大型品や高台・脚台付の資料についても含ませた(6・7・25・26)。大型品は、口縁が内折する形状のものが一定存在するようである。

総じて小型化している傾向や中世後半期のミニチュア品の出現、体部が直線的な形態へ収斂していくかのような傾向などはうかがえはしたものの、残念ながら、型式学的な組列を組むには至らなかった。あくまで共伴土師器皿の編年に依拠して配列したのみにとどまる。なかでも、12世紀後葉～13世紀前葉頃と14世紀代については、器形の判明する資料が一定量確保されるが、13世紀中～後葉に位置づけられる資料に乏しく、変化をスムーズに追えていない。

鴨東地域北部以外の資料についても、管見の範囲での所在確認は終えている。おおまかな変化の方向性は同じくしていると考えるが、時期がより遡るとみられるものやさらに下る資料、起源や系譜を考える上で重要な資料の存在を把握している。また、その空間的ひろがりも、古代末～中世前半期における土師器生産と流通を考える上でも興味深いありようを示している。次節以下、対象地域を広げてそれらの検討を続ける

また、肝心の機能についても、結論に達していないが、底部穿孔のものや、油煙痕などの記載がみられる報告は、京大構内以外の出土品にも散見されている。焼塩壺と同種の容器であった可能性は皆無とは言えないけれども、口縁の開く逆台形の形態は、この種の容器としてふさわしいとは思われない。こうした問題の検証も、以下に委ねることとするが、さしあたり「塩壺」の俗称ではなく、学術的な報告においては「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案する。

## 5 資料の集成と検討(2)―その他の地域―

前節までは、京都大学吉田キャンパス構内や岡崎地域といった鴨東地域北半で出土が報告されている資料101点を対象にして、資料の実査からの所見も交えつつ、基本的特徴や変遷などについて検討してきた。そしてそれらを、俗称の「塩壺」ではなく「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案した。ひきつづいて本節では、平安京域などその他の地域の資料について、報告文献をもとにしながら検討していく。

**対象資料** 検討済みの鴨東地域北半以外について、2021年度末までに刊行された関連報告書を悉皆的に精査したところ、106点の資料を抽出できた。これらを、「洛東(=鴨東地域南半)・洛南」「洛北・京北辺」「京城」「嵯峨野」「宇治・八幡」「湖西」として大まかに地域区分しながら、一覧表として末尾にまとめた(表1)。平安京・中世京都における発掘調査において決して稀少な資料ではないことから、このほかにも見落としや未報告の資料があることは十分に承知しているが、それでも何らかの傾向をうかがうことはできよう。

**出土点数の推移** まず、これら106点と、さきに前節で検討した鴨東地域北半の101点とあわせた

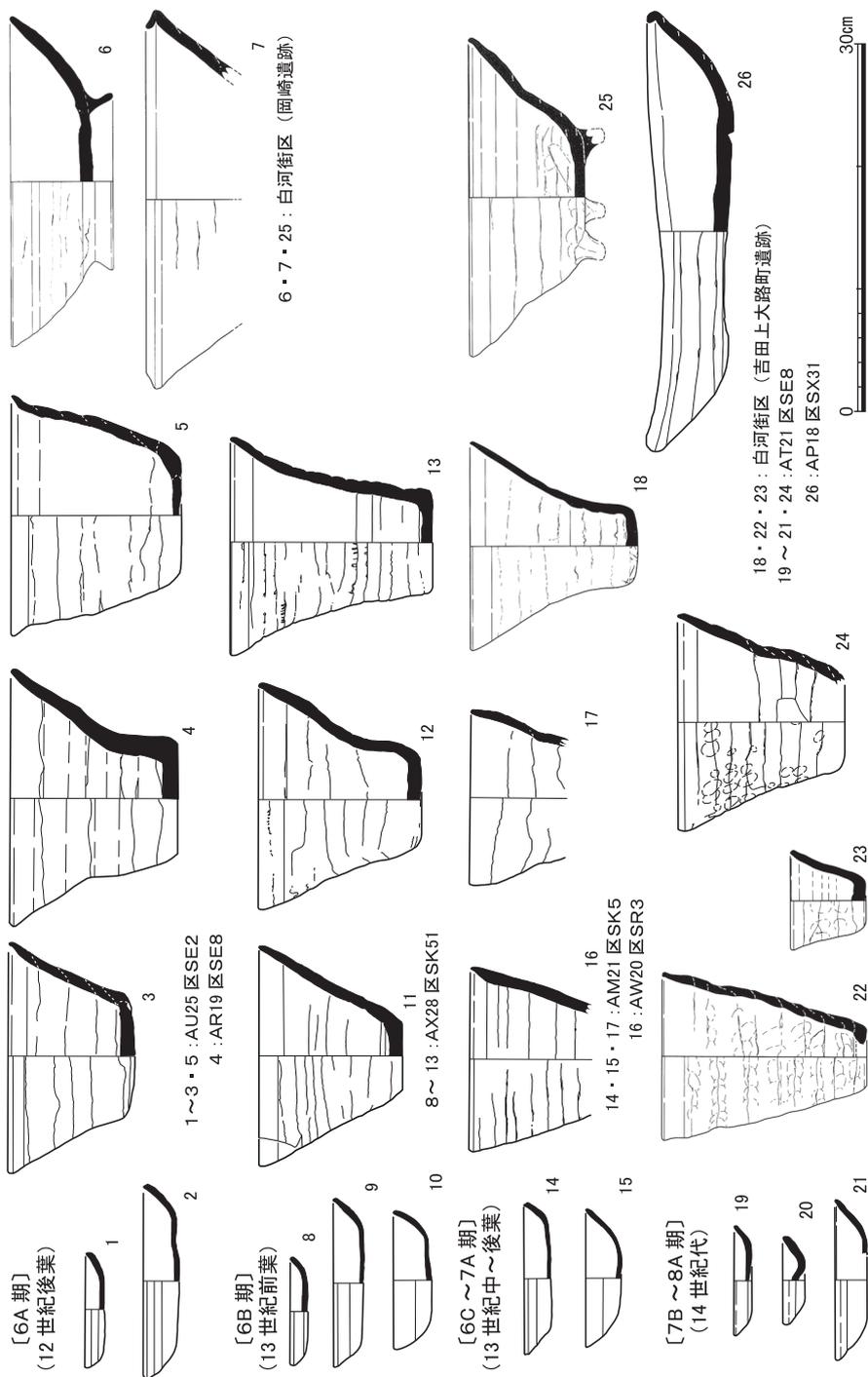


図14 鴨東地域北部における厚手鉢形土器の変遷 縮尺1/6

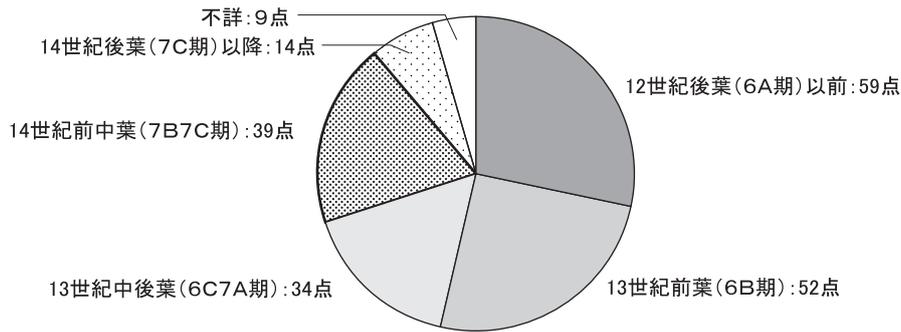


図15 対象資料207点が出土した遺構の時期

207点の全体について、資料が使われた期間を把握するべく、出土している遺構の時期を集計した（図15）。その結果によると、13世紀前葉以前となる遺構からの出土でなかば以上が占められている。その後減少しながらも、14世紀後葉までは出土がみられ、15世紀代になると確実な形での出土はみられなくなる<sup>(7)</sup>。すなわち、平安後期に顕在化して以降、鎌倉前期をピークとしながら、室町前期ころまでの200年間程度使われ続けた器種、ということになる。

**資料の空間分布** 次に、上記資料の出土地点の分布について、全体の様相を概観しておく（図16）。京城（以下、旧平安京の範囲についてはこのように表記する）外の出土地は、図中に1～15で遺跡名を付した。

京城では、出土が報告されるのは左京城のみであり、平安後期以降中世にも利用され続けた空間であることを明らかに反映している。密に出土があるこの左京城と鴨東地域、それと、それより疎ではあるが複数例の出土が確認される隣接地の上京から洛北にかけて、および洛東（鴨東地域の南半）・洛南・嵯峨野といった地域が、基本的な分布圏と評価できよう。これら諸地域も、古代末から中世にかけて、京城と密接にかかわる諸層の離宮や邸宅、寺社などに活発に利用された空間である。この基本的な分布圏内では、さきに述べた平安後期～室町前期ころまでの期間、継続的に出土が確認されている。

**遠隔での出土** 一方で、やや離れた八幡、宇治、湖西といった地域では、のちに別途検討する宇治平等院境内遺跡を例外として、1遺跡1点程度の孤立散発的な出土が確認される。八幡市女郎花遺跡出土例（表1-198）、宇治市木幡所在の浄妙寺跡出土例（同199）は、ともに、12世紀後葉～13世紀前半ころに比定される土師器皿類などとともに遺構から出土している。大津市上仰木遺跡例は（同207）、包含層出土であるが、遺跡の主体は12世紀後半～13世紀にかけてであり、やはり同時期ころの製品と思われる。以上はいずれも鎌倉期までで、継続的で濃密な出土ではない。

八幡市女郎花遺跡は、古山陽道と東高野街道が交錯する交通上の要点に位置しており、また浄妙寺の位置する宇治市北部の木幡地域は、摂関家藤原氏一門と縁故の深い空間である。そして、大津市上仰木遺跡については、比叡山延暦寺と関連する富裕層の邸宅としての性格が示唆されている。つまり、厚手鉢形土器が京城で盛行する時期において、いずれの遺跡も人の移動に伴う京からの製品の搬入が生じうる性格を帯びていると評価できる。これら遠隔地にわずかに点在する製品は、在地での生産品ではなく、何らかの事情で上述した基本的な分布圏から運ばれ使用されていたものと考えるのが自然であろう。属性の少ない土師器皿類よりも、製品の移動を直接的に示すマーカーとして見出しやすい

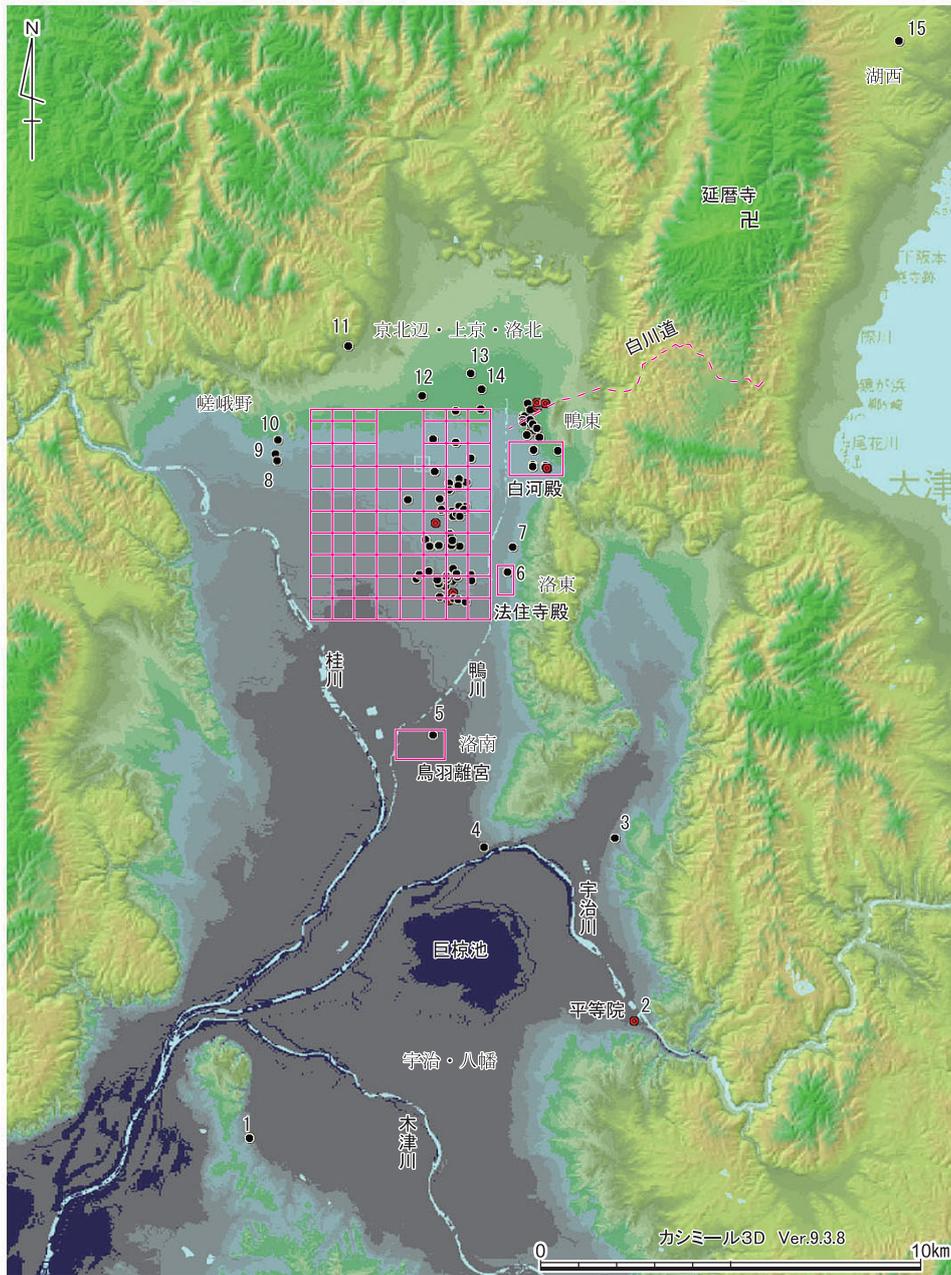


図16 対象資料の出土地点 (赤丸は5点以上の出土・縮尺1/20万)

- |                |             |             |             |             |
|----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 八幡市女郎花       | 2 宇治市平等院    | 3 宇治市浄妙寺    | 4 伏見区桃陵     | 5 南区鳥羽離宮    |
| 6 東山区法住寺殿      | 7 東山区六波羅政庁跡 | 8 右京区一ノ井    | 9 右京区常盤仲ノ町  | 10 右京区常盤東ノ町 |
| 11 北区鹿苑寺 (金閣寺) | 12 上京区上京    | 13 上京区相国寺境内 | 14 上京区常盤井殿町 | 15 大津市上仰木   |

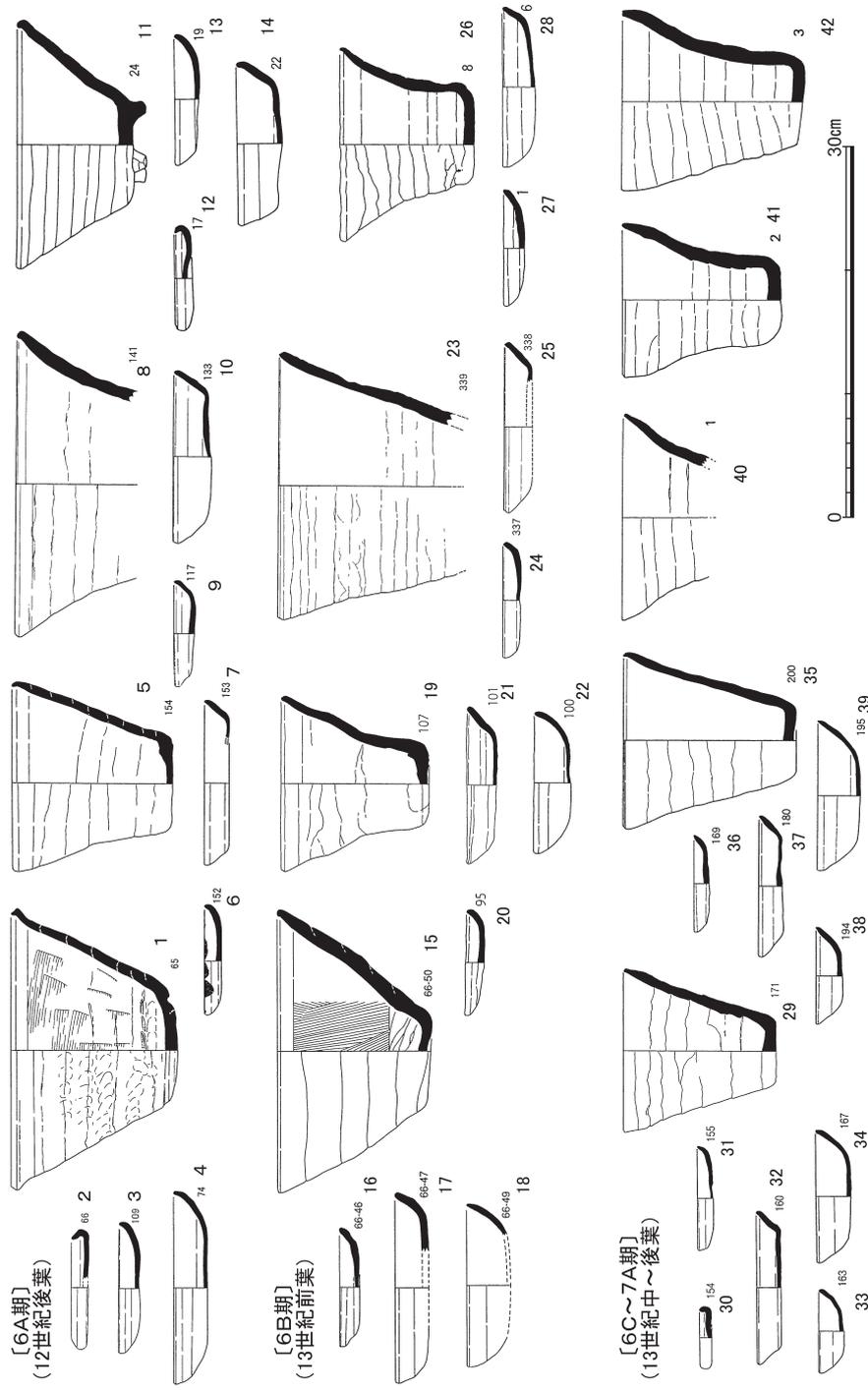
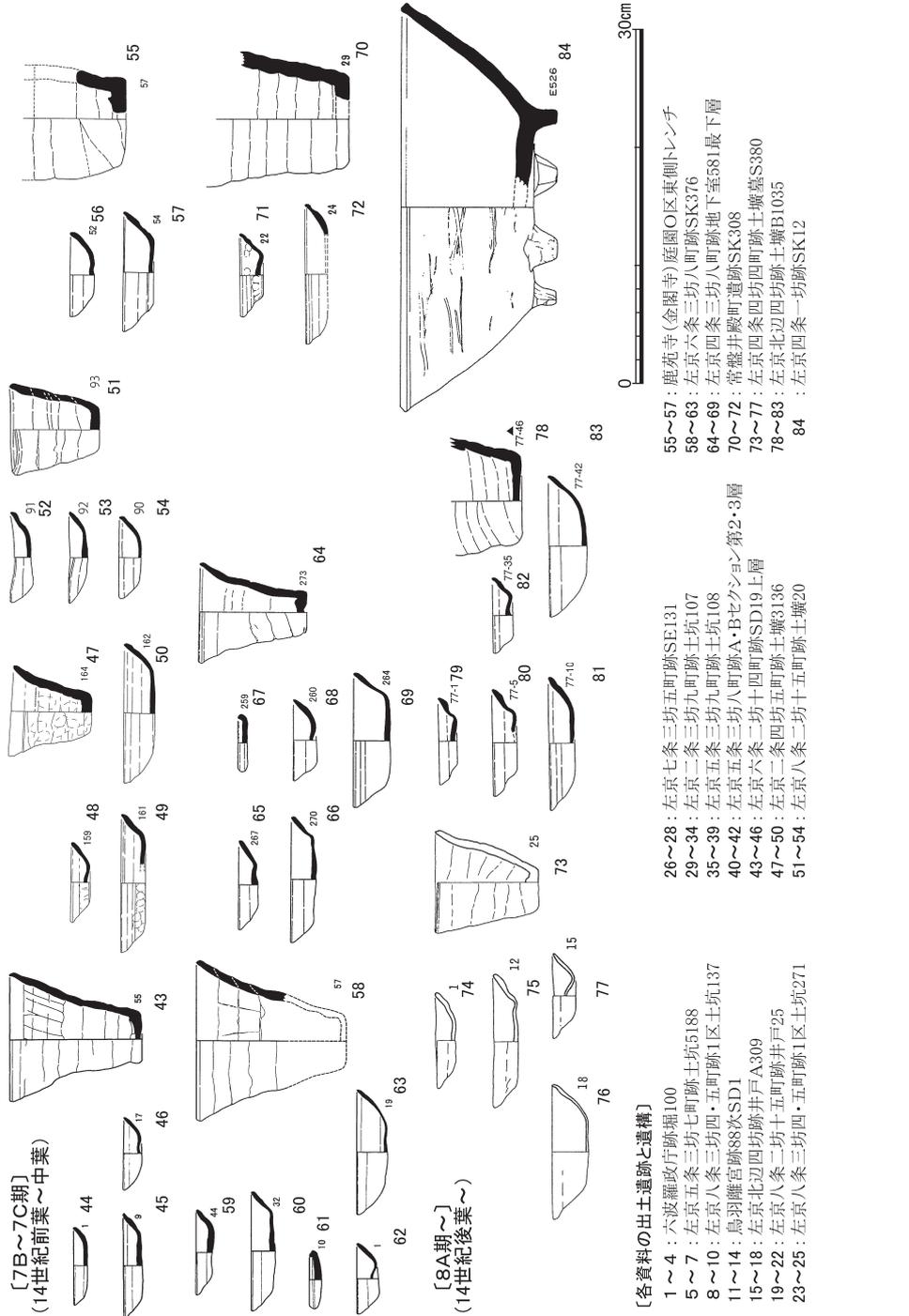


図17 厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北部以外・その1） 縮尺1/6



- [各資料の出土遺跡と遺構]
- 1~4 : 六波羅政庁跡堀100
  - 5~7 : 左京五条三坊七町跡土坑5188
  - 8~10 : 左京八条三坊四・五町跡1区土坑137
  - 11~14 : 鳥羽離宮跡88次SD1
  - 15~18 : 左京北辺四坊跡井戸A309
  - 19~22 : 左京八条二坊十五町跡井戸25
  - 23~25 : 左京八条三坊四・五町跡1区土坑271
  - 26~28 : 左京七条三坊五町跡SE131
  - 29~34 : 左京二条三坊九町跡土坑107
  - 35~39 : 左京五条三坊九町跡土坑108
  - 40~42 : 左京五条三坊八町跡A・Bセクション第2・3層
  - 43~46 : 左京五条二坊十四町跡SD19上層
  - 47~50 : 左京二条四坊五町跡土坑3136
  - 51~54 : 左京八条二坊十五町跡土坑20
  - 55~57 : 鹿苑寺(金閣寺)庭園の区東側トレンチ
  - 58~63 : 左京六条三坊八町跡SK376
  - 64~69 : 左京四条三坊八町跡地下室581最下層
  - 70~72 : 常盤井殿町遺跡SK308
  - 73~77 : 左京四条四坊四町跡土坑S380
  - 78~83 : 左京北辺四坊跡土坑B1035
  - 84 : 左京四条一坊跡SK12

図18 厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北部以外・その2） 縮尺1/6

とも言え、今後さらに範囲を広げて意識的に探索する必要性を指摘しておきたい。

そして、以上の、遠隔地をも含めた分布状況で興味深いのは、京城から西南方の洛西や乙訓地域へとひろがる傾向は確認されないことである。これらの地域が、京城で主流の土師器皿とは特徴の異なる「乙訓在地形」などと称される土師器皿の分布圏であることを考慮すると〔伊藤<sup>ほか</sup>2016 pp.84-87〕、特異な厚手鉢形土器の製作と使用は、京城で主流の土師器皿類と密接に関連していることが予測されよう。ただし、これらよりさらに遠隔地でありながら、京との密接な関係にあり関連遺物の出土も知られる平泉・鎌倉・福原といった地域での出土は、現状では把握できていない。

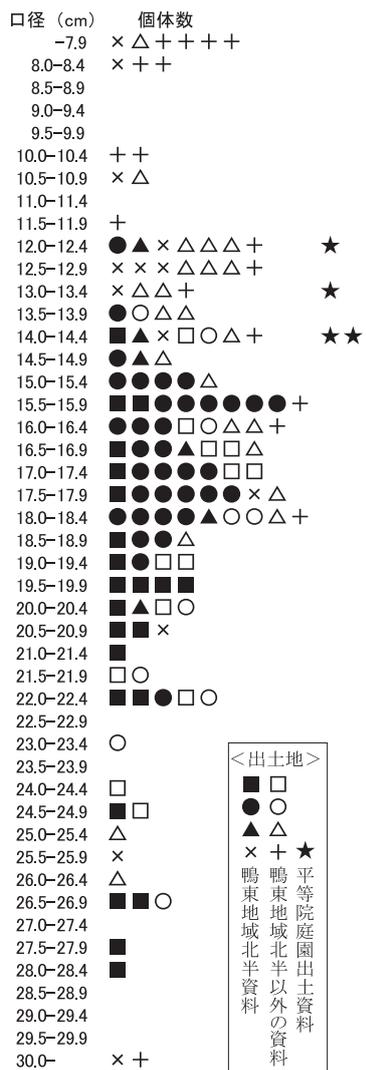
**形態や特徴の変遷** それでは、以上の諸地域の資料を対象として、前節において鴨東地域北半で行った作業と同様に、遺構内で共伴する土師器皿類を手がかりにして変遷を検討してみよう（図17・18）。以下、形態の分類も前節を踏襲し、皿類の編年と暦年代観は〔平尾2019〕にしたがっている。

明確に定型化した出現が把握されるのは、鴨東地域北半と同様に6A期（12世紀後葉）である。A形態としたような、体部が直線的なバケツ形の器形が目立つ（図17-1・5等）。ほか、全形をとどめた資料にとぼしいが、体部が半ばで屈曲するB形態や、ゆるやかに外反するC形態とみるべきものも存在はしている（同8）。また、鳥羽離宮では三足付の製品が出土しており（同11）、前節で紹介した白河街区での13世紀に下る出土例や、後述する左京四条一坊の資料（図18-84）の存在を考慮すると、こうした脚台が付される類型も存在したとみなして良かろう。そして、この12世紀後葉の段階は、形態にかかわらず口縁部周辺の仕上げがヨコナデとともにしっかりと施され、端部が上方に肥厚するような特徴が顕著といえる。すでに鴨東地域北半の資料で指摘しているが、これは、皿類の口縁仕上げ手法と共通する特徴で、二段撫で手法の消滅過程で口唇部に内傾する外端面が形成される段階の特徴とされるものである。

以上は、つづく6B期（13世紀前葉）にかけては様相は継続しているが、6C期（13世紀中葉）以降になると、明確な変化が看取されるようになる。以後は総じて小型化の傾向が進行しており、バケツ形であったA形態では、口径・底径ともに縮小してコップ形と呼ぶのがふさわしいほっそりとした形態へと移行している（図17-29・35）。B・C形態は、小ぶりになりつつも引き続き出現しているが（同40～42）、その後7B期（14世紀前葉）以降になると、目立たなくなる。14世紀代になると、各形態とも、口径が10cmに満たないようなミニチュア品が顕著に認められるようになっており（同47・51・64・73等）、あわせて、底部に穿孔があるものが確実に存在している（同55・70）。

**小型化傾向の実相** こうした変化の方向性は、鴨東地域北半の資料からもすでに知られているところであるが、今回それ以外の地域の対象資料についてを付加して、あらためて時期別に口縁の法量分布を集計した（図19）。13世紀中葉以降の小型化傾向について、より明瞭に示されるとともに、口径が10cm以下のミニチュア品と呼び得るような製品については、14世紀代以降に、鴨東以外の地域で顕在化している傾向がうかがえた。もっとも、いずれの地域でも、小型品に収斂しているわけではなく、少量だが大型品も存在はし続けている。器形をとどめた状態での出土に恵まれないことを考慮すると、大型品は破片化して報告に漏れ、本来はもう少し存在していたと見ておくべきかもしれない。

これらが消滅するのは、さきにも述べたように遺構からの出土がほとんど認められなくなる15世紀とみられるが、8B期すなわち14世紀後葉頃に比定される遺構出土資料でみると、底径が小さく口縁部側へ大きく開くコップ型器形と（図18-73）、体部が直線的な筒状に近い器形（同78）の、大別



< 共伴土師器皿にもとづく時期 >  
 ■ □ 6A期 (12世紀後葉) 以前  
 ● ○ 6B期 (13世紀前葉)  
 ▲ △ 6C~7A期 (13世紀中葉~後葉)  
 × + 7B期 (14世紀前葉) 以降

図19 時期別にみた口径の分布

すると2種類の形態へ収斂しながら衰退していった様相がうかがえる。また、稀少な製品ではあるが、脚付の大型品も鴨東地域北半と同様に存在していたことがわかる (同84)。この左京四条一坊跡の土坑SK12出土と報告される例は、外面に粘土紐積み上げ痕を明瞭にとどめる脚付 (残存しているのは三脚) の鉢で、口径30cm超の大型品である [平安京調査会1975 図版66-E526]。出土遺構は戦国時代の長方形土坑で、その上層の焼土層から出土し、火災後の廃棄による埋め立てによるものとされている [前掲書 p.15]。しかし、特徴からみて鳥羽離宮出土品 (図17-11) などの三脚付資料に類する厚手鉢形土器であり、同じ調査で大量に出土している平安後期~室町期の資料が混入した可能性が高いのではないかと考えている。

平等院庭園出土資料の位置づけ さて、以上のなかで、基本的な分布圏から外れながら7点が出土して特異さが際立っている宇治市平等院出土資料について、位置づけを再検証しておきたい。これらは、庭園整備事業12次調査阿字池西岸P-7区砂層下層出土資料の中に含まれる一群 (図20-1254~1260) で、創建期 (11世紀中葉) 近い時期の遺物と報告されている [宗教学人平等院2003 p.85]。この位置づけが確かならば、100年以上製品の出現時期が遡ることになり、系譜や経緯を考える上でも無視できない存在であろう。

この砂層下層からともに出土したと報告される土師器皿は、口径10cm前後の厚手の「て」の字状口縁皿と (同1243~1245)、口径13~14cm台の二段撫で手法で口唇部が外反する特徴の皿 (同1246~1252) の2群である。京域の編年でみるとおおむね4A期に比定できるといえることから、11世紀中葉ころの資料として差し支えないだろう。しかし、この報告で粗製の底部有孔土器と報告される厚手鉢形土器の特徴を持つ一群 (同1254~1260) は、口径は12~14cmに収まり、焼成前穿孔される底部径は4~5cmと小ぶりの筒状やコップ形の器形になるものである。図19では★印で表示される。12世紀代の出現期にみられる特徴とは明らかに乖離しており、これらを祖型とする流れは想定しがたい。先述した時期別の変遷に照らすと、むしろ14世紀代の特徴を示しているといえよう。京域で同種の底部穿孔資料がみられるのもその時期であることも、傍証となる。

これらには、「尾廊南のP-7区からまとまって出土した」とする以上の記載は無く、出土状態を検討する手がかりを得られない。しかし、阿字池の池底上に堆積する砂層50~70cmについては、主に11世紀の土器類を含む層と15世紀代の土器群を含む大きく2層からなると報告されている [前掲書 p.51]。後者は、「砂層上層」として報告される土器群 (図20-1231~1239) に相当するのであろう。これらの土師器皿は、京域での8A期ころに比定しても問題ないと思われ、また当該の平等院報告書中での分類においても、14世紀後葉のFIV類に分類されるものを含んでいる (例えば同図1234など)。

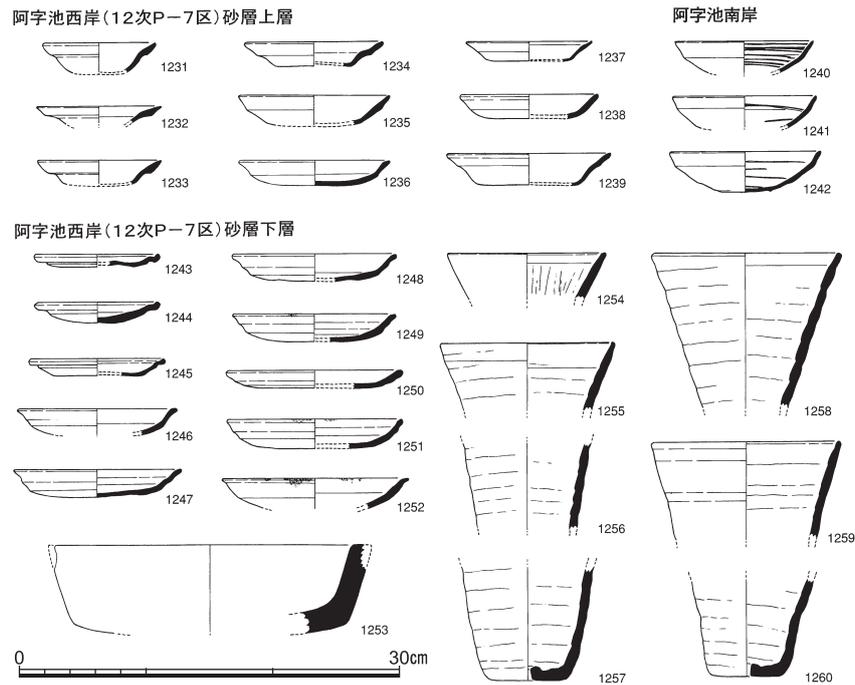


図20 平等院庭園阿字池西岸出土資料（『平等院庭園保存整備報告書』2003より縮小転載） 縮尺1/6

すなわち上層の資料は14世紀代のものを含む内容と言っても差し支えない。したがって、下層出土とされる厚手鉢形土器1254～1260が、特徴からみて11世紀代とは位置づけがたいことの原因として、上層出土と認定すべき資料の混入によるものと判断しておきたい。結果、以下に述べていく系譜をめぐる議論の対象としてはとりあげないことになる。

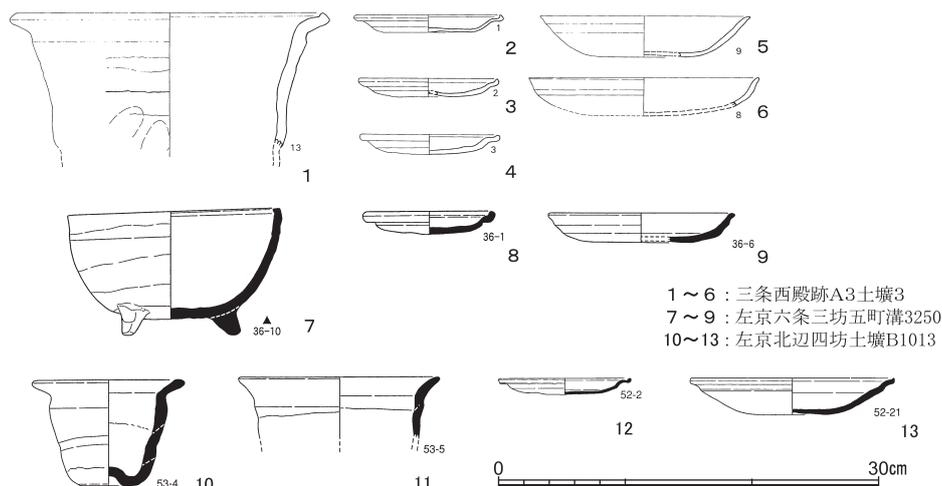
## 6 製品の系譜と機能について

确实なところでは12世紀後葉に定型化したものが突然出現しているかのように思われる厚手鉢形土器だが、どのような技術系譜から出現しているのだろうか。この製品が担った機能についての問題とあわせて、最後に推察をめぐらしておくことにしたい。

**先行時期の類似資料** 粘土紐の積み上げ痕が顕著に残される厚手の鉢形土器、という特徴の類似に注目すると、11世紀代にすでに存在は認めることができる。

なかでも注目されるのは、三条西殿跡(平安京左京三条三坊十二町) A 3 土壙 3 出土資料である〔(財)古代学協会1983 第84図〕。この遺構からは、「て」字状口縁の皿と2段撫で手法の皿とが共存して出土しており(図21-1～6)、11世紀中葉の4 B 段階ころに比定できる。当該の資料(同1)は、全形は不明であるが、「復元口径24.2cmの大形の鉢形土器で、粘土紐巻き上げ痕が明瞭に認められ、胴部外面は指オサエ」と報告されている。さらにこの資料は、図面上で見ると、口縁は短く外反して端部を上方につまみあげられるように仕上げられており、平安中期頃までの「て」字状土器器皿や甕の口縁端部に顕著にみられる特徴を継承しているもの、とみることができる。出現期の厚手鉢形土器の口縁端部についても、こうした短い外反とつまみ上げがされる傾向が明瞭であり(例えば図17-1など)、このような特徴の類似からも系譜的な関連がうかがわれよう。

このほかには、器形としては異なるが、平安京左京六条三坊五町で平安後期の楊梅小路南側溝とさ



1～6：三条西殿跡A3土壙3  
7～9：左京六条三坊五町溝3250  
10～13：左京北辺四坊土壙B1013

図21 先行する時期の遺構出土類似資料 縮尺1/6

れる溝3250から出土している三足付の鉢が、注意される（図21-7）。内面は丁寧なナデ調整で火を受けた形跡があり、外面に粘土紐を巻き上げた痕跡がみられるという〔(財)京都市埋蔵文化財研究所2005 p.55〕。厚手鉢形土器にも足付の類型が存在することから、この資料も系譜的に関連する祖型となりうるものとみたい。なお、報告書ではより古い段階の資料と位置づけているが、同遺構出土土師器皿の主体（同8・9）が示すような、11世紀代に帰属する資料であっても良いと思われる。

また、これらより遡る10世紀代においても、粘土紐積み上げ痕が顕著とみられる土師器鉢そのものは、左京北辺四坊土壙B1013で報告されている（図21-10・11）。〔(財)京都市埋蔵文化財研究所2004 図版53〕ただし、やや小ぶりでも口縁端部を丸く収めて仕上げられており、時期的にも開きがあることもあって、直接的な関連を指摘するにはいささか躊躇される製品ともいえる<sup>(8)</sup>。

**製作技術の系譜と出現の背景** いずれにしても、上記したような事例は10～11世紀代にほとんど類例を認めないイレギュラーな存在であり、器種として定型化したものとなっていない。厚手鉢形土器につながり得るような属性をもった先行時期の資料ではあるが、連続的なつながりを示すことはできず、出現する契機となった資料の候補として挙げ得るにとどまる。

そもそも、これらがイレギュラーな存在と見做されるのは、11世紀代までの鉢や甕の器形が古墳時代以来の丸底を基本としていることによる。そしてそれらは基本的に煮炊具であって、叩き成型と刷毛・削り等の調整による薄い器壁であることが一般的である。したがって、こうした製作技術の系譜からは厚手鉢形土器は生じ得ず、強度のある平らな底部に、杯や皿とは異なる厚手の器壁を高く積み上げていくためには、異なる系譜からの技術の流用や試行錯誤があったことも十分に推測されよう。

それを示唆する痕跡が、古い段階の底部を中心に多く認められている、丸みを帯びた形状や輪状の圧痕といえよう（図22-1）。鴨東地域での観察所見は、さきに前節において底部の輪状圧痕諸例として提示し検討を加えたところであるが、凹形の型枠状のものを用いた底部の成型が想定できるような、丸底傾向の底部が確実に存在している。

ここで想起されるのが、時期は遡るものの、8～9世紀にかけて都城とその周辺で盛行する墨書人面土器に特有な製作技術である〔上村1992〕。これらは祭祀専用の甕形の容器であるが、凹形の外型を用いたとみられる底部と胴部との境界に明瞭な段が形成されており（図22-2）、厚手鉢形土器底



図22 厚手鉢形土器底部の輪状圧痕（左）と人面墨書土器底部の凹形成型痕（右） 約1/2

1：京都大学本部構内出土〔古賀1999 II110〕伊藤撮影

2：長岡京左京六・七条三坊出土〔(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998〕

(公財)京都市埋蔵文化財研究所画像データベース(長岡京東南境界祭祀遺跡出土遺物43)の画像を京都市文化財保護課の許可を得て使用

部にみられる輪状の圧痕(同1)ときわめて類似している。また胴部の外面についても粘土紐や粘土板を巻き上げた接合痕がそのまま残されているなど、一般の土師器甕とは異なる特徴をもつ〔前掲上村1992 第3図〕。いささか時間の隔たりはあるものの、これら諸特徴の厚手鉢形土器との共通性は注意されるのであり、平安京周辺の土師器製作集団に残されてきた製作の記憶が、技術的系譜の源流となり援用された可能性を、指摘しておきたい。

もっとも、厚手鉢形土器は、口縁端部は一段撫で面取り手法で仕上げるなど、同時期の土師器皿類と共通する技法が採用されていることも、既に鴨東地域で確認したところである。つまり、その製作は、基本的に京域や鴨東で使用される土師器皿類と同じ製作集団が担ったものと考えられる。はたして上記のような製作の記憶がそこに受け継がれてきたものなのか、状況に応じて独自に創意工夫した産物なのか、あるいは、煮炊具や祭具の製作集団が別に並存していたとして、そちらから援用するといった状況であったのか、現状では情報不足で全く決めがたいのが現実である。古代から中世にかけての土師器生産体制の変化を探るひとつのよすがとして、今後の継続的な検討課題である。

**機能・用途の問題** すでに第4節において、観察可能な京都大学構内出土の資料にみられる使用の痕跡を検証し、著しい被熱は確認されないことと、少数だが内面に油煙や煤の付着する事例があることを指摘し、少なくとも製塩土器では無いものと述べてきた。鴨東地域以外において把握した資料については実見による検証を果たせていないけれども、特定の使用痕跡が報告で言及される事例はほとんどみられず、状況は変わらないと判断して良いと考える。そして、底部に焼成前や焼成後に穿孔する例が、14世紀以降を中心に一定数存在することも、把握出来た。京都大学構内出土の資料の場合は12世紀後葉の焼成後穿孔で、油煙痕の付着をともなっていたことから、灯火具としての転用の可能性に言及した。それら以外であらたに把握した底部穿孔例も、容器内面の様子は詳らかで無いが、同種の用途で用いられた可能性は十分に考えられよう。いずれにしろ製塩や焼塩の容器としては用を為さなかったことは明白である。

このようにみえてくると、厚手鉢形土器の本来の用途としては、一部は灯火具として利用・転用されたとしても、曲物内にそれを仕掛けて火桶として用いる火容製品であった、とする梅川光隆の想定が〔梅川2001 p.122〕、きわめて蓋然性の高いものと思われる。曲物が火桶としても使用されていることは、絵巻物の表現からかねてより認識されてきた〔南1982 第7図1〕。しかし、何らかの容器

を内部に仕込んだ二重構造である表現がされていながら、内容器に該当する製品については、梅川の指摘まで誰も言及してこなかった。口縁の内面に煤状の付着物が少なからず確認されることや、口縁部の周辺については内外とも器表面を平滑に仕上げていること（一方で、直接視認されることのないそれ以外の部分はほぼ未調整で、粘土紐積み上げ痕等がそのまま残されること）は、そのような使用法を想定すると、すぐれて腑に落ちる特徴といえる。

こうした土製火容製品の成立事情として梅川は、「中世都市民（一般都市民）が自立した家を営むものとして新興した」ことを背景に、狭い空間の最大限の活用にとって、手軽に設備や撤去できる利点を持った置き炉の普及、部品としての土製火容の需要が促されたものと推察している〔梅川前掲書 p.148〕。背景事情についてはさらに論証を深める必要があるが、機能的な要求として手軽さがあつたとするならば、時間的な変化の方向性として小型化の傾向が明瞭であることとは、きわめて整合的である。また、同時期にもっとも普遍的であった土師器皿類の製作集団がその生産と流通を担い、出土する空間からは特定階層との相関は見出しがたいことも、製品の役割を考慮すると納得されると言えよう。そして、最終的に、同種の機能を担う大和産火鉢の普及とともに姿を消すのである。

## 7 まとめと課題

本稿では、平安後期～鎌倉時代を中心とする時期の京都市域周辺で出土し、俗に「塩壺」と呼ばれてきた鉢形の土師器を検討対象としてきた。先行研究のみられない資料であることから、まずは基礎作業として実態把握を最大の目的として設定したが、結果として207例の報告（2022年3月末まで）を把握し、それらに基づいた資料の特徴抽出と時間的変遷の想定とともに、機能や系譜についても不十分ながら推論を及ぼすことができた。その際には、製塩土器との外見上の類似に由来する「塩壺」の俗称について、その用途を示す証拠は確認出来ないことから、今後は「厚手鉢形土器」と呼称することを提起した。以下、論じた要点3つを簡潔にまとめる。

1. 資料の空間分布は、濃密な出土がある平安京の左京城と鴨東地域北半と、複数例の出土がみられる隣接周辺地域を基本的な分布圏として認定できる。ほか、宇治・八幡・湖西の遠隔で散発的出土を確認するが、洛西や乙訓といった西方では出土せず、京城主流土師器の分布域との相関が注意される。

2. 時間的変遷については、12世紀後葉には明確に定型化して出現しており、14世紀代以降は出土量が減少し、15世紀代には消滅している。時期を追って口径・底径とも小型化する傾向があり、直線的なバケツ形からコップ形へと推移している。また後半期にはミニチュア製品も顕在化する。

3. 機能や系譜については、内面に油煙痕や煤付着がみられたり、底部に穿孔する例が少数ながらあることから、製塩や焼塩の容器ではなく、灯火器として転用を一部には含みつつ、梅川光隆が想定するような屋内置き炉用の火容の蓋然性が高いと推断した。またその製作技術は、京城や鴨東で主流の土師器皿製作集団が担いながら、平底の鉢形器形の創出にあたっては、痕跡の類似から、墨書人面土器底部における凹型成型などに関連する可能性について言及した。

京都大学構内出土資料が多くを占める鴨東地域北半の資料を対象とした第4節までは、実査により器表面の状況や痕跡を観察した所見を反映させている。しかし、その他の地域を対象とした第5節以降では、資料の実見を果たせていないため、とくに第6節の機能や製作技術の系譜にかかわる議論は、

検証不十分なままで想定の域を出ていない。今後それらを果たして、資料からの実証にもとづく議論へと高めていくことが、課題となる。

また、機能や系譜に関連する問題として、同時期に同じ機能を担う大型の火容製品として挙げられている瓦質の盤との関連については、今回全く対象外としている。今後は、それらも含めて総合的な検討をおこなうことで、住空間の変容をはじめとする古代から中世にかけての都市化の実相を解明することへつなげたい。

**謝 辞** 新田和央氏（京都市文化財保護課）には、湖西地域における資料所在をはじめ、種々の教示を得た。末尾ながら御礼申し上げたい。

#### 〔注〕

- (1) 現況では、鳥羽離宮跡第88次調査〔吉崎伸・鈴木久男1985 p.61〕、岡崎遺跡〔(公財)京都市埋蔵文化財研究所2016 図版31-425〕(図14-25)に類例が知られる。
- (2) これに先だって、近世の焼塩壺が「塩壺」として報告されたことはある〔京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1975 第31図I-14・I-15・I-16〕。
- (3) 報告時には13世紀前葉の一括資料としているが〔伊藤・梶原2007 p.137〕、白色を呈する皿Sとされる類型が出現しておらず、二段撫で手法が一定量含まれる口縁部の法量が9-10cmと14-16cmを主とする内容から、6A期すなわち12世紀後葉と見做すべきと修正する。
- (4) 口径30cm超の極大品は、京大医学部構内A P 18区S X 31出土品〔伊藤2008 図103-III622〕。特徴については後にあらためて触れるが、包含層内で単独出土に近い状態で検出された資料であり、時期は遡る可能性がある。
- (5) 東山区の六波羅政庁跡遺跡の報告において、12世紀中葉の遺構堀100から出土しているこの種の鉢底部に同様な輪状圧痕があり、「土師器皿Nの小型皿の形をそのまま残す」とされている〔(株)文化財サービス2019 図32-65, p.36〕。報告者は、型ではなく別造りの可能性を考えているのであろうか。
- (6) 図6-382に示した岡崎遺跡出土品には、底部に焼成前の穿孔が認められる。ただし使用痕跡については定かでは無い。なお、注(1)で言及した同じ岡崎遺跡の三脚付の製品(図14-25)については、内面に帯状の油煙痕が付着していると報告されている。
- (7) 戦国時代の遺構からの出土と報告される左京四条一坊跡の例については〔平安京調査会1975 図版66-E526〕(表1-131)、後述しているように、平安後期～室町期のものが混入したと見なす。また、左京八条一坊十六町跡において17世紀と報告される落込み165出土の例も〔京都市埋蔵文化財研究所2014 図30-137〕(表1-155)、示された特徴で見ると限り近世の焼塩壺ではなく中世の厚手鉢形土器の小形品であり、同じ遺構から出土している鎌倉後期の資料群と同時期に比定すべきものと考えている。
- (8) 左京九条三坊九町跡SD1750の最下層の灰粘層では、10世紀第1四半期ごろとされる黒色土器とともに「外面に粘土紐接合痕を多く残す粗製の鉢」「内面に被熱痕が残る」資料の出土が報告されている〔(公財)元興寺文化財研究所2019 p.68, 図51-207〕(表1-195)。特徴から12～13世紀の厚手鉢形土器そのものとみられ、出土状況の検証が必要とおもわれることから、祖型的な事例の対象としては取り上げていない。

#### 〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1994年 「8京都府(丹波・山城)」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店
- 五山川伸矢 1983年 「京都大学本部構内A X 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 伊藤淳史 2008年 「京都大学医学部構内A P 18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 伊藤淳史・梶原義実 2007年 「京都大学本部構内A U 25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 伊藤淳史・富井眞・内記理 2016年 「京都大学吉田南構内A M 21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報

2014年度』

- 伊藤淳史・長尾玲 2022年 「白川道沿いの大規模廃棄土坑―本部構内A X28区S K51の出土資料―」『都市近郊地域歴史像の再構築―京都・白川道の研究を基盤として―』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 上村和直 1992年 「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』
- 梅川光隆 2001年 『平安京の器 その様式と色彩の文化史』
- （公財）元興寺文化財研究所 2019年 『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975年 『平安京関係遺跡発掘調査概報―京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査―』
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1976年 『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
- 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981年 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 本文編』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年 『常磐東ノ町古墳群』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1982年 『平安京左京八条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 2004年 『平安京左京北辺四坊―第1分冊（公家町形成前）―』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊）
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年 『平安京左京六条三坊五町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8）
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2014年 『平安京左京八条一坊十六町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16）
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016年 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2017年 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-17）』
- （公財）京都市埋蔵文化財研究所 2020年 『白河街区跡・吉田上大路町遺跡（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12）』
- 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白河北殿北辺の調査―』
- 京都府教育委員会 1978年 『埋蔵文化財発掘調査概報』
- （財）京都文化財団 1989年 『吉田近衛町遺跡』（京都文化博物館調査研究報告第4集）
- （財）古代学協会 1983年 『平安京左京八条三坊二町』（平安京跡研究調査報告第6輯）
- （財）古代学協会 1983年 『三条西殿跡』（平安京跡研究調査報告第7輯）
- 宗教法人平等院 2003年 『平等院庭園保存整備報告書』
- 千葉 豊 2008年 「京都大学医学部構内AR19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 同志社大学校地学術調査委員会 1978年 『常盤井殿町遺跡発掘調査概報』
- 日本中世土器研究会編 2022年 『新版 概説中世の土器・陶磁器』
- 平尾政幸 2019年 「土師器再考」『洛史』第12号（（公財）京都市埋蔵文化財研究所研究紀要）
- （株）文化財サービス 2019年 『六波羅政庁跡、音羽・五条坂窯跡発掘調査報告書』
- 平安京調査会 1975年 『平安京跡発掘調査報告―左京四条一坊―』
- 南 博史 1982年 「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要』第7輯
- 吉崎伸・鈴木久男 1985年 「23第88次調査」（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』

表1 厚手鉢形土器報告資料一覧

京都大学構内(岡崎含む) (本:本部構内, 吉:吉田南構内, 西:西部構内, 医:医学部構内, 病:病院構内)										
調査区	地点	遺構・層位	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	備考	
1	本 AX28	90・110	SK51	353	17.2	5.4	11	6B	1,2	
2	本 AX28	90・110	SK51	354	15.9	5.4	13.2	6B	1,2 56年報 I 36/ 図12-5	
3	本 AX28	90・110	SK51	355	16.7	6.9	13.8	6B	1,2	
4	本 AX28	90・110	SK51	356	17.5	7.8	16.4	6B	1,2 図12-7・14-13	
5	本 AX28	90・110	SK51	357	15.4	6.7	12.9	6B	1,2	
6	本 AX28	90・110	SK51	358	16.2	6.5	15+	6B	1,2 図11-2	
7	本 AX28	90・110	SK51	359	16.2			6B	1,2	
8	本 AX28	90・110	SK51	360	18.8			6B	1,2	
9	本 AX28	90・110	SK51	361	18			6B	1,2	
10	本 AX28	90・110	SK51	362	18.4			6B	1,2 図12-1	
11	本 AX28	90・110	SK51	363	18.8			6B	1,2	
12	本 AX28	90・110	SK51	364	15.6			6B	1,2	
13	本 AX28	90・110	SK51	365	15			6B	1,2	
14	本 AX28	90・110	SK51	366	17.9	6.8	13.2	6B	1,2 図14-12	
15	本 AX28	90・110	SK51	367	15.3	6	13.7	6B	1,2 図12-3	
16	本 AX28	90・110	SK51	368	17.8	5.6	11.8	6B	1,2 図14-11	
17	本 AX28	90・110	SK51	369	19.4			6B	1,2	
18	本 AX28	90・110	SK51	370		6		6B	1,2	
19	本 AX28	90・110	SK51	371		7.6		6B	1,2 図11-3	
20	本 AW27	181	SK7	I 37	18	6.8	14	6B	3	
21	本 AX25	230・241	SD7	II 105	18.4	6	12.4	6B	4	
22	本 AX25	230・242	SD7	II 106	17.2	5.2	10.4	6B	4	
23	本 AX25	230・243	SD7	II 107	17.2	6	12.4	6B	4	
24	本 AX25	230・244	SD7	II 108	14.8	6	11.2	6B	4	
25	本 AX25	230・245	SD7	II 109	15.2	6.4	12	6B	4	
26	本 AX25	230・246	SD7	II 110	16.4	6.4	8.4	6B	4 図11-5	
27	本 AW26	271	SE3	III 131	12.4			6B	5	
28	本 AW26	271	SE3	III 132		5.2		6B	5	
29	本 AW26	271	SE3	III 133	17.6	6.4	10.4	6B	5 内面黒色付着 / 図13-4	
30	本 AW26	271	SK10	III 168	17.6		8+	6B	5	
31	本 AT21	277	SK44	I 455	15.6			6B	6	
32	本 AT21	277	SE8	I 536	17.6	6.8	13.2	7B	6 図14-24	
33	本 AT21	277	SX12	I 562		4.5		7B	6	
34	本 AU25	296	SE2	II 69	19.6	9.2	14	6A	7 図14-5	
35	本 AU25	296	SE2	II 70	18.8	9.2	10	6A	7 図11-1・14-3	
36	本 AU25	296	SE2	II 71	23.2			6A	7	
37	本 AU25	296	SE2	II 72	15.6		13+	6A	7	
38	本 AU25	296	SE2	II 73	19.6	8	10.4	6A	7 内面黒色付着	
39	本 AU25	296	SE2	II 74	20.4			6A	7	
40	本 AU25	296	SE2	II 75	14.4			6A	7	
41	本 AU25	296	SE2	II 76	16.8			6A	7	
42	本 AU25	296	SE2	II 77		10		6A	7 内面帯状油煙痕 / 図13-2	
43	本 AU25	296	SE2	II 78		6	10+	6A	7 図11-4・13-1/ 内面V字油煙痕 / 底部焼成後穿孔丸底	
44	本 AU25	296	SE2	II 79		9.6		6A	7	
45	本 AU25	296	SD14	II 254	13.6	2	10.4	6B	7	
46	本 AU25	296	SD14	II 255	16.8	5.6	10+	6B	7	
47	本 AU25	296	SD14	II 256	15.6			6B	7	
48	吉 AN22	261	SD12	I 324	22			6B	8	
49	吉 AP21	322	SK2	III 94	12.4			6C	9	
50	吉 AM21	399・401	SK5	I 394	14			7A	10 図14-17	
51	吉 AM21	399・402	SX64	I 604	8			7B	10	
52	西 AW20	348	SR3東肩茶褐色暗灰色土	I 651	14.8			7A	11 図14-16	
53	西 AW20	348		I 746		6.4		6A	11	
54	医 AN18	143	SD11	I 40	20			6C	12	
55	医 AO17	270	SX8	II 412	12.8		8+	7C	13	
56	医 AR19	298	SK21	I 46	21.2			6A	14	
57	医 AR19	298	SE8	I 60	20.8			6A	14 図13-5/ 外面全体煤	
58	医 AR19	298	SE8	I 61	20.8	8.8	13.6	6A	14 図14-4/ 外面剥落	
59	医 AR19	298	SE5	I 175	17		6.8+	6B	14 外面下半煤	
60	医 AP18	308	SK25	III 335	15.6			6B	15	
61	医 AP18	308	SK25	III 336	15.6			6B	15	
62	医 AP18	308	SX31	III 622	36	20	5.6	7B?	15 図14-26/ 口縁内折大形	
63	医 AQ18	358	SE22	II 413	12.8			8A	15	
64	病 AG20・AF20	239・240	SE14	II 89	19.2	6	16.2	6A	16 図13-4/ 内面上半黒色付着	
65	岡崎 ZS23	463	SX10	I 385	19.6			6A	17	
66	岡崎 ZS23	463	SX22	I 546		5.6		6A	17	
67	岡崎 ZS23	463	SP2	I 655	22.4			6A	17 口縁内折	

白河街区跡（吉田上大路町・吉田近衛町）

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
68	吉田近衛町	SK01	64	23		3.2	10+	7C	18	
69	吉田近衛町	SK01	64	24		4	10+	7C	18	
70	吉田近衛町	SK01	64	25		4.8	6+	7C	18	内面黒灰色
71	吉田近衛町	SK04	71	193		4.8	10+	7C	18	
72	吉田近衛町	S359	50	20	12.6	5.4	12.6	7B	19	
73	吉田近衛町	S359	50	21		6		7B	19	
74	吉田近衛町	S112	23	44				7A	19	
75	吉田近衛町	S538	64	45	14.1			7C	19	
76	吉田上大路町	1区集石90	21	129	16.7	6	13.5	6C	20	図14-18
77	吉田上大路町	土壙墓201	19	38	17.4			6A	21	
78	吉田上大路町	土壙墓201	19	39	17.8			6A	21	
79	吉田上大路町	土坑422	24	197	12		14+	7C	21	図6
80	吉田上大路町	土坑422	24	198	13	4.6	16	7C	21	図6/ 図14-22
81	吉田上大路町	井戸203	25	238	7.7	4	6.1	7C	21	図14-23

白河街区跡（聖護院・岡崎）

	地点名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
82	天王町	井戸75	53	224				8A	22	
83	聖護院中町	SX91下層	16	216				5B	23	
84	聖護院中町	SE80	18	254	18			6C	23	
85	聖護院円頓美町	落ち込み2290	39	64	22	9	12	6A	24	
86	聖護院円頓美町	溝1050	40	90	26.9	16	8.2	5B	24	図14-6/ 高台付鉢
87	延勝寺跡	整地層2	18	46	24.8		6.1+	5B	25	外面煤
88	美術館2期	溝840	図版31	424	20.7		9.1+	8A	26	
89	美術館2期	溝840	図版31	425	25.6	10	10.4+	8A	26	図14-25/ 三脚付内面帯状油煙痕
90	美術館2期	溝900	図版27	246	27.5		7.5+	6A	26	
91	美術館3期	土坑2316	図版30	108		8	9.5+	6A	27	
92	美術館3期	溝2220・2230B	図版34	380	10.8		6.3+	7C	27	図6
93	美術館3期	溝2220・2230B	図版34	381		5.2	9.1+	7C	27	図6
94	美術館3期	溝2220・2230B	図版34	382		6	7.4+	7C	27	図6/ 底部焼成前穿孔
95	美術館4期	溝2092	図版52	39				6B	28	胴部墨書
96	美術館4期	溝2094	図版53	113		7.3	7.8+	5B	28	
97	美術館4期	溝2094	図版53	114	19.7			5B	28	
98	美術館4期	溝5140東護岸	図版55	198	15.5			6A	28	
99	美術館4期	溝5140	図版55	231	26.6			6A	28	
100	美術館4期	溝5140	図版55	232	28			6A	28	図14-7/ 口縁内折大型
101	美術館4期	溝5140	図版55	233			9	6A	28	

洛東・洛南地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
102	六波羅政庁跡	堀100	32	65	22	8.8	13.3	5B	29	図17-1
103	法住寺殿跡・六波羅政庁跡	井戸4-250	図版30	280	17.6			7A	30	
104	鳥羽離宮跡	SD1	図版45	24	19.2	8	9.2	6A	31	三足付/ 図17-11
105	桃陵	溝119	28	42	12.9			7A	32	

京北辺・上京地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
106	相国寺境内	ESX601	16	24	10.5			7A	33	
107	常磐井殿町	SK306下層	図版7	87		4.5		7B	34	
108	常磐井殿町	SK308	図版8	29		6.9		8B	34	底部穿孔/ 図18-70
109	上京	土坑268	27	38	20.4			6A	35	
110	北辺三坊五町内膳町	SD353	50		16			7B	36	
111	北辺四坊	井戸A309	図版66	66-50	22	6.8	12	6A	37	図17-15
112	北辺四坊	土壙B1035	図版77	77-46		6.8		8B	37	図18-78
113	北辺四坊	土壙B1037	図版69	69-39				7A	37	

洛北・嵯峨野地区

	遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
114	鹿苑寺(金閣寺)	O区東側トレンチ	33	57		7.5		7B	38	底部穿孔/ 図18-55
115	常磐東ノ町古墳群		13	11	18	6	12.8	6B	39	
116	常磐仲ノ町	土坑286	49	106	10			7B	40	
117	一ノ井	井戸195	18	52	15.2			7A	41	

平安京左京域1 (四条まで) ※左京一条二坊十二町→一・二・十二のように略記

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
118	一・二・十二	中世包含層	15	86	13.2		8B	42	
119	二・三・九	土壇107	34	171	12.8	4.8	7A	43	図17-29
120	二・四・五	土壇3136	37	164	7.5	3	9.6	7B	44 図18-47
121	三・二・十	土壇1200	図版49	560	12.5		7C	45	
122	三・三・十一	土壇14	83	33	11.6		7C	46	
123	三・三・十二	A3土壇3	84	13	24.2		4A	47	三条西殿跡 / 図21-1
124	三・三・四	SX30	17	179	7.2		7A	48	
125	三・四・四	SK51下層	22	540		5.2	7A	49	
126	四・三・八	地下室581上層	34	240		4	7C	50	
127	四・三・八	地下室581最下	34	273	8	3.2	8.4	7C	50 図18-64
128	四・二・十四	SK2253	66	528		4.3	7A	51	
129	四・四・四	土坑墓 S380	24	25	8.4	3.2	8.4	7C	52 図18-73
130	四・三・十二	SE435	41	285	12.2		7B	53	
131	四・一	SK12	図版66	E526	32.8	12	12.8	54	四脚付? / 図18-84 時期・出土状況要検討

平安京左京域2 (五条～八条)

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
132	五・二・十六	土坑30	28	5	21.6		6A	55	
133	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	1	16.4		6C	56	図17-40
134	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	2	12	4	12.4	6C	56 図17-41
135	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	3	14	6	14	6C	56 図17-42
136	五・三・十六	土坑212	34	241		3.8	7C	57	
137	五・三・九	土坑108	47	200	13.6	5	13.8	7A	58 図17-35
138	五・三・七	土坑5188	45	154	14.4	5.6	12.8	6B	59 図17-5
139	五・二・十一	地下室2123	29	100	16.2		7A	60	
140	五・二・十一	地下室2123	29	101		7	7A	60	
141	五・二・十一	地下室2123	29	102	18.6		7A	60	
142	五・二・十一	地下室2123	29	103	16.6		7A	60	
143	五・二・十一	地下室2123	29	104	18.4		7A	60	
144	五・二・十一	土坑墓2216	32	237	14.5		7A	60	
145	五・三・十五	No.47土坑32	15	18	12	4	10.8	7A?	61 地下鉄烏丸線
146	六・三・八	SK376	附図30-1	57	14		7C	62	図18-58
147	六・三・七	土坑 S239	73	1	12	5.4	10.8	7A	63
148	六・三・十三	No.55土坑12	52	Na55-16	17.4	5.1	9.9	6A	64 地下鉄烏丸線
149	六・三・五	溝3250	図版36	36-10	17		10	4A?	65 三脚内面被熱 / 図21-7
150	六・二・十四	SE140	38	138		6.2		6C	66 全面被熱
151	六・二・十四	SD19上層	116	55	10.4	4	10.8	7C	67 図18-43
152	六・二・二	不明	7	11	13.2	4	13.2	68	詳細不明
153	七・三・五	SE131	25	8	16	6	10.7	6B	69 東本願寺 / 図17-26
154	七・二・五	土坑612	13	204	13.8			6B	70 龍谷大学大宮
155	八・一・十六	落込み165	30	137	8.8	5.2	8.8	7C?	71 遺構は近世
156	八・一・十六	SD175	図版30	89	13.2			7A	72
157	八・二・九	土坑 S2146	30	10	16.4			6A	73
158	八・二・九	墓 S81	35	1	15.6			7C	73
159	八・二・九	墓 S81	35	2		4.8		7C	73
160	八・二・十五	井戸25	図版8	107	13.6	4.8	12	6C	74 図17-19
161	八・二・十五	土壇20	図版8	93	6.8	2.8	7.2	7C	74 図18-51
162	八・二・十五	包含層	17	150	6.8	2.4	6.8	7C	74
163	八・三・三	埋甕土壇273	58	17	14.1			6A	75
164	八・三・三	埋甕土壇273	表3						75 体部のみ
165	八・三・二	G27P18	49	17	12			7A?	76
166	八・三・二	G27P18	49	18	16	6	12.8	7A?	76
167	八・三・二	G27P18	49	19	14.8	4.2	14.4	7A?	76
168	八・四・七	SK216	13	69	12.8			6C	77
169	八・三・一	井戸399	11	146	18.2	7.2	16.9	7C	78 東本願寺前古墓群
170	八・三・九	土坑115	23	141		6		6C	79
171	八・三・九	SK330	61	700	13	4.8	12.7	7B	80 東本願寺前古墓群
172	八・三・九	SK740・741	63	791		5		7B	80 東本願寺前古墓群
173	八・三・九	SE971	69	973		5.2		7C	80 東本願寺前古墓群

平安京左京域3（八条～九条）

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考	
176	八・三・七	SK107	21	496		2	7C?	81		
177	八・三・七	SK458	21	497		5.6	7C?	81		
178	八・四・一	土坑3724	図版132	503	7.2		7B	82		
179	八・四・一	土坑3724	図版132	504		3.2	7B	82		
180	八・三・四五	1区土坑137	図版57	141	24.6	9.65	6A	83	図17-8	
181	八・三・四五	1区土坑86	図版58	203	23	9.8	6B	83		
182	八・三・四五	1区土坑86	図版58	204	26.6	9	6B	83		
183	八・三・四五	1区土坑271	図版59	339	21.6		6B	83	図17-23	
184	八・三・四五	1区土坑108	図版61	477	25	10.3	6C	83		
185	八・三・四五	1区土坑108	図版61	478	26	7.4	6C	83		
186	九・二・十六	整地層	24	17	12		6A?	84		
187	九・二・十六	整地層	24	18	20		6A?	84		
188	九・三・九	不明	9	51	15.2	7.2	8.8	6A?	85	出土状況不明
189	九・三・九	不明	9	52	15.2	6.4	8.8	6A?	85	出土状況不明
190	九・三・九	不明	9	53	16	6	10.4	6A?	85	出土状況不明
191	九・三・九	不明	9	54	16.8	6	9.6	6A?	85	出土状況不明
192	九・三・九	不明	9	55	16.8	6	10.4	6A?	85	出土状況不明
193	九・三・九	不明	10	62	10		6A?	85	出土状況不明	
194	九・三・八	整地層	14	49		4.3	6B?	86		
195	九・三・九	SD1750灰粘	51	207	20		6A?	87	時期・出土状況要検討	
196	九・三・九	SD0430上層	80	233	16.8		6A	87		
197	九・四・二	土坑3060	16	66	17.2	6.8	13.6	6A	88	

京都市外（八幡・宇治・湖西地区）

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
198	女郎花 (第8次)	C区北池状遺構 SG27上層	24	16	16.6		6A	89	
199	浄妙寺跡	SK40101	PL.18	80	20.4		6B	90	
200	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1254	12		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
201	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1255	13.2		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
202	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1256			8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
203	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1257	5.6		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
204	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1258	14		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
205	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1259	14		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
206	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1260	4.2		8A?	91	時期・出土状況要検討(図20)
207	上仰木	包含層	図版52	449	19.2		6A	92	

\*口径・底径・器高は基本的に報告書の挿図より計測したが、観察表に記載のあるものはその数値を採用した。

+はそれ以上の数値が見込まれることを示す。

\*時期は、出土遺構の共伴土師器皿類等を〔平尾2019〕により比定した。

報告文献（番号は表1と対応）

- 五十川伸矢1983「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和53年度』
- 伊藤淳史・長尾玲2022「白川道沿いの大規模廃棄土坑—本部構内A X28区SK51の出土資料—」『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』（平成31年度～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）
- 五十川伸矢・千葉 豊・伊東隆夫1992「京都大学本部構内A W27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1988年度』
- 古賀秀策1999「京都大学本部構内A X25・A X26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1995年度』
- 千葉 豊2003「京都大学本部構内A W26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 千葉 豊・阪口英毅2006「京都大学本部構内A T21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2001年度』
- 伊藤淳史・梶原義美2007「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2002年度』
- 千葉 豊・阪口英毅2005「京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』
- 伊藤淳史2009「京都大学吉田南構内A P21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2004～2006年度』
- 伊藤淳史・富井眞・内記理2016「京都大学吉田南構内A M21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2014年度』
- 伊藤淳史・笹川尚紀2012「京都大学西部構内A W20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2009年度』
- 五十川伸矢・宮本一夫1988「京都大学本部構内A N18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和60年度』
- 伊藤淳史2003「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1999年度』
- 千葉 豊2008「京都大学医学部構内A R19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 伊藤淳史2008「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報2003年度』
- 千葉 豊2000「京都大病院構内A G20・A F20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』
- 伊藤淳史・富井眞ほか2021「京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査II」『京都大学構内遺跡調査研究年報2019年度』
- 平良泰久ほか1978「4 吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』（京都府教育委員会）
- （財）京都文化財団1989「吉田近衛町遺跡」（京都文化博物館調査研究報告第4集）

- 20 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2012『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3)
- 21 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2020『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-12)
- 22 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2005『白河街区跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4)
- 23 新田和央2019「V 白河街区跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成30年度』(京都市文化市民局)
- 24 (株) イビソク関西支店2013『白河街区跡・岡崎遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(イビソク京都市内遺跡調査報告 第5輯)
- 25 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-2)
- 26 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2016『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-17)
- 27 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2017『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-17)
- 28 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2018『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-16)
- 29 (株) 文化財サービス2019『六波羅政庁跡、音羽・五条坂跡発掘調査報告書』
- 30 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2009『京都国立博物館構内発掘調査報告書—法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡—』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊)
- 31 吉崎伸・鈴木久男1985「23第88次調査」(財) 京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 32 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2015『伏見城跡・桃陵遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2)
- 33 大本山相国寺承天閣美術館1984『大本山相国寺境内の発掘調査—承天閣地点の埋蔵文化財—』
- 34 同志社大学校地学術調査委員会1978『常磐井殿町遺跡発掘調査概報』
- 35 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2011『上京遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2)
- 36 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター1988『京都府遺跡調査概報第27冊』
- 37 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊—第I分冊(公家町形成前)』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊)
- 38 (財) 京都市埋蔵文化財研究所1997『特別史跡特別名勝鹿苑寺(金閣寺)庭園』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊)
- 39 (財) 京都市埋蔵文化財研究所1977『常磐東ノ町古墳群』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊)
- 40 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2011『常磐仲ノ町遺跡・常磐東ノ町古墳群』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-15)
- 41 (株) 文化財サービス2021『一ノ井遺跡発掘調査報告書』(文化財サービス発掘調査報告書第18集)
- 42 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京一条二坊十二町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-18)
- 43 古代文化調査会2016『平安京左京二条三坊九町・旧二条城跡・烏丸丸太町遺跡—大門町の調査—』
- 44 (株) イビソク関西支店2014『平安京左京二条四坊五町跡・烏丸丸太町遺跡』(イビソク京都市内遺跡調査報告第7輯)
- 45 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-17)
- 46 (財) 古代学協会1984『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町跡』(平安京跡研究調査報告第12輯)
- 47 (財) 古代学協会1983『三条西殿跡』(平安京跡研究調査報告第7輯)
- 48 京都市文化市民局2020「II-1 平安京左京三条三坊四町跡・烏丸御池遺跡」『京都市遺跡試掘調査報告令和元年度』
- 49 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京三条四坊四町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-10)
- 50 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京四坊三坊八町跡・烏丸御池遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2)
- 51 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京四坊二坊十四町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5)
- 52 京都府京都文化博物館1993『平安京左京四坊四町跡』(京都文化博物館調査研究報告第9集)
- 53 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2007『平安京左京四坊三坊十二町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26)
- 54 平安京調査会1975『平安京跡発掘調査報告—左京四坊一坊—』
- 55 京都府京都文化博物館1991『平安京左京五条二坊十六町』(京都文化博物館調査研究報告第6集)
- 56 (財) 古代学協会1997『平安京左京五条三坊八町発掘調査報告』(平安京跡研究調査報告第19輯)
- 57 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-21)
- 58 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10)
- 59 (株) イビソク関西支店2017『平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡—白楽天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財研究所発掘調査報告書—』(イビソク京都市内遺跡調査報告第15輯)
- 60 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-8)
- 61 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1976『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
- 62 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』((公財) 京都市埋蔵文化財研究所研究紀要) 第12号
- 63 京都府京都文化博物館1995『平安京左京六条三坊七町』(京都文化博物館調査研究報告第11集)
- 64 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報II』本文編
- 65 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京左京六条三坊五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8)
- 66 (財) 元興寺文化財研究所2017『平安京左京六条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡』
- 67 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2012「25平安京左京六条二坊十四町跡・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 68 (財) 古代学協会2008「平安京左京六条二坊二町馬淵診療所新築工事に伴う調査」『平安京左京内5遺跡』(平安京跡研究調査報告第23輯)
- 69 (財) 古代学協会1985『平安京左京七条三坊五町』(平安京跡研究調査報告第15輯)
- 70 龍谷大学2018『平安京左京七条二坊五町(東市跡) 発掘調査報告書』
- 71 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2014『平安京左京八条一坊十六町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2013-16)
- 72 関西文化財調査会2004『平安京左京八条一坊十六町』
- 73 京都平安文化財2020『平安京左京八条二坊九町』(京都平安文化財発掘調査報告第7集)
- 74 (株) 日開調査設計コンサルタント2007『平安京左京八条二坊十五町』(株) 日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書第1集)
- 75 上村憲章1999「8 平安京左京八条三坊1」(財) 京都市埋蔵文化財研究所『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 76 (財) 古代学協会1983『平安京左京八条三坊二町』(平安京跡研究調査報告第6輯)
- 77 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京八条四坊七町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-11)
- 78 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2020『平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-10)
- 79 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2010『平安京左京八条三坊九町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-6)
- 80 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター2017『平安京跡・東本願寺前古墓群』(京都府遺跡調査報告書第169冊)
- 81 (財) 京都市埋蔵文化財研究所1982『平安京左京八条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊)
- 82 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2019『平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-13)

- 83 (財)京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-7)
- 84 (公財)京都市埋蔵文化財研究所2015『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9)
- 85 堀内明博・江谷寛2008「平安京左京九条三坊九町跡三越ユニティ一用地」(財)古代学協会『平安京左京内5遺跡』(平安京跡研究調査報告第23輯)
- 86 (公財)京都市埋蔵文化財研究所2021『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-7)
- 87 (公財)元興寺文化財研究所2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
- 88 (株)イビソク2019『平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡』(イビソク京都市内遺跡調査報告第21輯)
- 89 八幡市教育委員会2007『女郎花遺跡(第8次)発掘調査報告書ー八幡大芝53-1他宅地造成に伴う調査ー』
- 90 宇治市教育委員会2004『浄妙寺跡発掘調査報告書』(宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集)
- 91 宗教法人平等院2003『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』
- 92 大津市教育委員会2013『上仰木遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書65)

\*本稿は、『京都大学構内遺跡調査研究年報』の2021・2022年度(2023年3月刊)および2023年度(2024年3月刊)の紀要論文として、第1～4節を(上)、第5～7節を(下)に分割して掲載していたものを、表現や番号に混乱が無いように修正を加えたうえで、一つの論考として合併したものである。

## 第7章 タキシラ探索記 —2023年度の پاکستان現地調査—<sup>(1)</sup>

内記 理

### はじめに

西北インドのタキシラ（図1）は、古代において商業・交通上の要衝として重要視された土地であった〔水谷1971 p.114〕。紀元前数世紀頃のことと考えられる伝説上の時代を題材とした叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』に、すでに「タクシャシラー」としてその名が現れている〔山際1992 p.24, 中村2013 p.389〕。初期の仏典には、タキシラが学問都市としての性格も持っていたことが記されるという〔Marshall 1951 p.43〕。紀元前4世紀後半には、アレクサンドロス大王が東征時に「インドス川」と「ヒュダスペス川」の間にある最大の町であるタキシラの首長を臣従させ、訪問している〔大牟田1996 p.545, 593, 609等〕。続くマウリヤ朝の時代においては「タクシャシラー」は西の重要拠点として重視され、紀元前3世紀半ばの王アショーカが残したアラム語による石柱法勅が見つかった〔山崎1979 p.13, 40〕。紀元後1世紀頃にはアナトリアの町「ティアーナ」出身のアポロニウスなる哲学者が知恵を深めるためにインドへ旅しタキシラを訪れた、とする伝説も残る〔定方1998 p.208〕。紀元後402年には中国東晋の仏教僧法顕が「竺刹尸羅」国を訪問し〔長澤1996 p.31〕、630年には中国唐の仏教僧玄奘が「呾叉始羅」国で仏跡を訪ねた〔桑山1987 p.73〕。

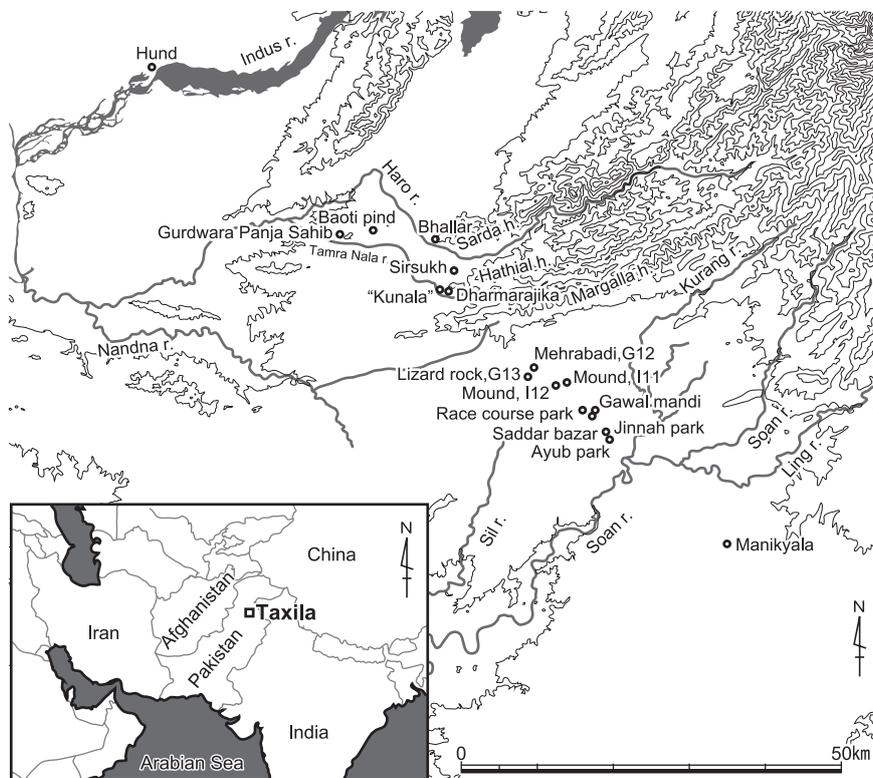


図1 タキシラ周辺の地図 縮尺1/100万（筆者作成）

このように古代史上の記述に連綿と現れるタキシラであったが、その後は長らくの間どこにその土地があったかが分からなくなっていた。19世紀に入り、ヨーロッパの人々が現地を訪れるようになると、タキシラ探索の試みがなされるようになった。そして、19世紀後半にインド考古局のA. カニングガム (Alexander Cunningham) 氏が遺跡の集中する一帯を確認し、そこを古代タキシラの地に比定した [Cunningham 1871 p.111]。20世紀に入ると考古局のJ. マーシャル (John Marshall) 氏等によって、その地域に所在する遺跡が集中的に調査された [Marshall 1951, Ghosh 1948等]。マーシャル氏はまた、唐の仏教僧玄奘が記録に残した都城や仏塔の位置の比定をもおこなった。

イギリス人考古学者達によって19世紀後半に確認され、20世紀以降集中的に調査された「タキシラ遺跡群」は、果たして本当に7世紀に玄奘が見た「呬叉始羅」国の中心地であったのか。これが前稿において筆者が提示した課題である [内記2022]。「タキシラ遺跡群」を玄奘の記述した「呬叉始羅」国の中心地であったと考えると、地理的な位置関係において大きな齟齬が生じるためである。本稿は、前稿で掲げた課題を解決するためにおこなった2023年度のパキスタンにおける遺跡踏査の結果を報告するものである。以下では、報告に先立ち第1章でタキシラの語源について確認する。また、第2章でタキシラの発見と比定にかかわる研究史を改めて整理し、通説に従う場合にどのような問題が生じるかを確かめた上で、仮説を提示する。第2章で提案する仮説を踏まえ、第3章ではその仮説の有効性の確認を目的として実施した2023年のパキスタンでの遺跡踏査の成果を報告する。

## 1 タキシラの語源について

「タキシラ」の語源についてはいくつかの説が示されている [水谷 1971 p.114, Salomon 2005 p.274]。1つは『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった古代インド叙事詩に現れる登場人物の名前に由来すると考える説であり、もう1つは、サンスクリット語の言葉の意味から考える説である。

『ラーマーヤナ』には父王バーラタによって、タクシャ王子がガンダルヴァの土地に建造されたタクシャシラー都城の王位に、そしてプシュカラ王子がガンダーラの土地に建造されたプシュカラヴァティー都城の王位に、それぞれつけられたことが記される [中村 2013 p.389]。一方、『マハーバーラタ』にはタクシャカ (Takṣaka) の名前を持つ竜王が登場するが [山際 1992 p.28等]、この王名を地名の由来と見なす考えがある [Cunningham 1872 p.9]。

一方で、サンスクリット語表記の「タクシャシラー (Takṣaśilā)」の意味から説明する考えがある。サンスクリット語の「タクシャ (takṣa)」には「切る」「形作る」の意味があり、「シラー (silā)」には「石」の意味がある。これらを合わせれば、「石切り」といった意味になる。後半部分をサンスクリット語の「シラス (śiras)」(=「頭」)と捉えて、「頭切り」といった意味も生まれたようで、5世紀初頭にタキシラを訪れた中国東晋の仏教僧法顕は、タキシラが「截頭」の意味を持つことを紹介する [長澤 1996 p.30-31]。この説明は、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に記される、チャンドラプラバ王がバラモンに求められるままに自身の頭を切って布施する伝説と関わる [平岡 2007 pp.573-607]。王が頭を布施した王都「バドラシラー」は「タクシャシラー」であることが、物語内で説明される [平岡 2007 p.587]。ほかに、サンスクリット語「タクシャシラー」には「トカゲ石」の意味があるとする説も唱えられている [Lüders 1942 p.31]。

タキシラの語源にかかわりここで触れておきたいのは、漢訳仏典内でのタキシラの表記である<sup>(2)</sup>。漢訳仏典においてタキシラは、「徳叉尸羅」<sup>(3)</sup>、「得叉尸羅」<sup>(4)</sup>、「得刹尸羅」<sup>(5)</sup>、「特叉尸羅」<sup>(6)</sup>、「持叉尸羅」<sup>(7)</sup>、「特叉尸利」<sup>(8)</sup>、「持叉尸利」<sup>(9)</sup>、「著叉尸羅」<sup>(10)</sup>、「怛刹尸羅」<sup>(11)</sup>、「怛叉尸羅」<sup>(12)</sup>、「怛叉始羅」<sup>(13)</sup>、「咀叉始羅」<sup>(14)</sup>、「怛叉尸羅」<sup>(15)</sup>、「咀叉始羅」<sup>(16)</sup>、「卓叉尸羅」<sup>(17)</sup>、「竺叉尸羅」<sup>(18)</sup>、「竺刹尸羅」<sup>(19)</sup>、「多刹尸羅」<sup>(20)</sup>、「刹尸羅」<sup>(21)</sup>、「徳差伊羅」<sup>(22)</sup>、「石室」<sup>(23)</sup>等と記される。ここで注意しておきたいのは「タキシラ」や「タクシャシラー」の音に漢字を当てたとと思われるものが多数を占める中で、最後の「石室」の表記のみ異質である点である<sup>(24)</sup>。音を当てたものではなく、言葉の意味を漢字で表記しようと試みたものと考えられる。「石室」と表記する仏典には1～2世紀のクシャーン朝の時代にインドで活動した仏教僧の馬鳴（アシュヴァゴーシャ）や、2世紀の後漢時代の中国において仏典の漢訳で活躍した安世高がかかわるものが含まれており、この頃に「タキシラ」に「石室」の意味が認識されていた可能性が高い。

以上より、「タキシラ」ないし「タクシャシラー」の語には、もともとは「石切」、「トカゲ石」、「石室」といった、主に石にかかわる意味があったようであり、「頭切り」の意味にも解釈されたことが分かる。アフガニスタンやインドに比べて、パキスタンにおいては石窟寺院が少ないことが指摘されてきた〔水野編 1962 p.21〕。そのような中で、国・城の名前に「石室」の表記がある点は、不可解な点として注意を促しておきたい。

## 2 タキシラ探索の試みと通説の問題点<sup>(25)</sup>

歴史上重要なタキシラがどこにあったかは長い間忘れられていたが、19世紀にイギリスによる植民地支配がインド亜大陸の西北部にまで及ぶようになる過程で、ヨーロッパ人が偉大な先人として追憶するアレクサンドロス大王が版図に加えたタキシラの探索が試みられた。1808年にアフガニスタン王国へ使節として派遣されたM. エルフィンストン（Mountstuart Elphinstone）氏はその帰路において、アレクサンドロスゆかりのタキシラの地を探索し、ラワルピンディ市の南方にあるマーニキヤーラ（Mānikyāla）で仏塔を発見した。そこをタキシラと考えたエルフィンストン氏の見解は、その後の「タキシラ遺跡群」の発見により誤りと判断された。なお、このマーニキヤーラの仏塔が近代ヨーロッパ人によって確認された最初の古代インドの仏塔とされる〔Errington & Curtis 2007 p.211〕。

1861年にイギリスがインド考古局を設置すると、その技官のA. カニングム氏が広くインド亜大陸中の遺跡の確認をおこなった。氏は、遺跡が集中するタムラー・ナーラー川流域のシャー・デリー周辺がタキシラであると考えた。その後、その土地は「タキシラ」と呼び表されるようになった。氏はまた、タキシラの所在地の検討において、タキシラについて比較的詳細な記録を残した玄奘の記述（図2）を参考にしており、玄奘が記録した仏塔等の地点の比定もおこなった。

玄奘が記録したタキシラの都城や仏教寺院の比定にかかわる決定打を与えたのは、J. マーシャル氏であった。氏は1913年から1934年にかけて「タキシラ遺跡群」で数多くの遺跡の発掘調査を主導し、カニングム氏によるタキシラの比定作業を引き継いだ。氏の検討により、玄奘の記録したタキシラの都城はシルスフ（Sirsukh）都市址に、「宝蔵塔」はバオーティ・ピンド（Baoti Pind）の仏塔址に、「捨頭塔」はバッラル（Bhallar）仏塔址に、「拘浪拏塔」はハティアール丘陵上の無名の仏塔址に、それぞれ比定された（図1・2）。最後の無名だった仏塔址は、玄奘の記述に基づいて「クナーラ塔」と

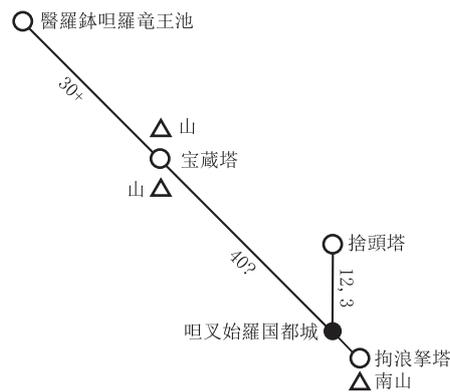


図2 『大唐西域記』に基づいた吐又始羅の聖跡分布図 数字は里程（筆者作成）

命名された。

玄奘が訪問し、記録したタキシラの都城や仏寺について、このマーシャル氏の比定が現在に至るまで多くの研究者によって受け入れられてきた。ところが、筆者はマーシャル氏の比定にいくつかの疑問を抱いたため、前稿でその問題点を整理した〔内記2022〕。マーシャル氏の比定に従った場合の問題点の1つは、「タキシラ遺跡群」に所在し、遺跡群の中でも西北インドの中でも、さらにはインド亜大陸全体の中でも屈指の規模をもつダルマラージカーの仏塔址（直径34.5m）が、玄奘が記録した3つの仏寺の中に含まれていないことになる点である<sup>(26)</sup>。玄奘が記録した仏寺の中には廃絶していた仏寺も含まれているから（宝蔵塔）、彼のタキシラ訪問時にすでにダルマラージカーが廃絶していたことを理由に記録から漏れたと即断することはできない<sup>(27)</sup>。2つめは、方位の問題である。マーシャル氏は「タキシラ遺跡群」の中のシルスフ都市址を玄奘訪問時のタキシラの都城と考え、玄奘が記録した都城からの方位に基づいて、仏寺の比定をおこなった（図1・2）。都城から北西へ推計40里（約17km）余りにあったとされる宝蔵塔をシルスフより西北西約11kmのバオーティ・ピンド塔（直径19.5m）に、都城から北へ12,3里（約5km）にあった捨頭塔をシルスフより北北西約5kmにあるバツラル塔（直径13m）に、それぞれ比定した点については方位の妥当性を認めうるが、最後の、城外南東にあったとされる拘浪拏塔をシルスフより南西約3kmの地点にあったハティアール丘陵上の仏塔（「クナーラ塔」。直径19m未満）に比定した点は、方位の違いから承服しがたい。拘浪拏塔に比定されたハティアール丘陵上の仏塔の東南東約1kmには、先に述べたダルマラージカー大塔がある。仏塔の規模から考えても、巨大なダルマラージカー大塔を差し置いて、近隣に所在した半分ないしそれ以下の規模の仏塔を記録するという事は考えがたい。

マーシャル氏によって唱えられ、これまでの多くの研究者によって疑問を抱かれることなく受け入れられてきた通説には、上記に見た複数の問題点がある。この通説に立ち向かうために、前稿では「タキシラ遺跡群」およびその周辺の考古学的な情報を整理し、それに基づいて新しい仮説を提示した。それは、玄奘訪問時のタキシラを中心地を、現在「タキシラ」の名を冠して呼ばれている場所から外すことである。

発掘調査の結果に基づいた考古学的な情報に従えば、ダルマラージカー大塔は玄奘訪問以前にすでに廃絶していた。つまり、大塔は廃絶した寺院として、玄奘に記録された可能性がある。そこで、ダルマラージカー大塔を、玄奘が唯一廃絶していたものとして報告する宝蔵塔にあたと仮定した。ダ

ルマラージカー寺院址はマールガラ丘陵とハティアール丘陵の間に所在しているから、「両山の間」にあったとする玄奘の記録とも一致する。すると、都城はそこから南東へ17km 以上行った地点にあったことになる。この場合、都城は南方のマールガラ丘陵を越えて、首都イスラーマーバードやラワルピンディ市のあるポトハール高原にあったことになる。

残念ながら、このエリアでは玄奘の時代の遺跡は一つも知られていない。そもそも、遺跡自体がほとんど確認されていない。早くもこの時点で仮説は頓挫したかに見えたが、19世紀半ばにカニングム氏が残した古い記録を調べると、可能性が残されていることが分かってきた。氏がラワルピンディ市内とその周辺に、いくつかの遺跡が過去に存在したことを報告しているためである。注目すべきは、彼が市の「両側」に所在したと説明する「Thupi」、すなわち丘である。一方は南東にあったものとされるから、もう一方は北西にあったことになる。北西にあったものは、市から5マイル（約8km）にあった高さ20フィート（約6m）の長い丘で、南東にあったものは市の中心地に所在した軍宿営地から約3.5kmの場所にあったと推定される丘である。カニングム氏の時代にはすでに、北西の丘から遺構の痕跡は失われており、南東の丘も消滅していた。また、ラワルピンディ市内においてもいくつかの地点で古代の人々の活動の痕跡が確認された〔Cunningham 1872 pp.151-152〕。前稿では、ラワルピンディ市の中心部が玄奘の時代のタキシラの都城で、そこから北西5マイルの丘が捨頭塔、南東にあった丘が拘浪拏塔だったのではないかと推定した。

上記の仮説を検証するためには、現地での遺跡確認の作業が必要であった。現地で確認したい内容は、①ラワルピンディ中心部から北西約5マイル（約8km）の地点、つまり、現在のイスラーマーバードのG11～13区、H11～13区、I11～13区辺りに仏塔址が残存するかどうか<sup>(28)</sup>、②ラワルピンディ市中心部に都市址が残存するかどうか、③ラワルピンディ市中心部から南東に仏塔址が残存するかどうか、である。

### 3 2023年度の遺跡調査

2023年8月18日金曜日から26日土曜日までのおよそ1週間の日程で、単身でパキスタンへ渡航した<sup>(29)</sup>。上述の課題に取り組むため、イスラーマーバード市とラワルピンディ市で、遺跡を探索した。以下に、イスラーマーバード市内での踏査と、ラワルピンディ市内での踏査の結果を報告する。

#### (1) イスラーマーバード市内の踏査

イスラーマーバード市内においては、G12区、G13区、I11区、I12区で遺跡の探索をおこなった。以下に、この順に踏査の結果を記す（図1）。

**G12区** G12区において未確認のストゥーパが存在するというインターネット上にあげられた不確かな情報に可能性を求め、G12区のメフラーバーディ（Mehrabādi）と呼ばれる地区で遺跡の探索をおこなった<sup>(30)</sup>。これらの情報がネット上にあげられたのは2010年前後である。現地で得た情報によると、その頃の現地には畑作地帯が広がっていたようである。ところが、その後10年余りの間に同地区では違法な土地開発が進み、現在では新築の住宅が軒を連ねている。一般的に、丘があれば重機で削られ、土地は平らに均されてしまうという。地域の一面で、丘らしき土地の起伏を認めため、周辺を踏査した（図3）<sup>(31)</sup>。土地の隆起部分の断面において遺構や文化層は確認できなかったため、ここを遺跡と認定することはできなかったが、その周辺の畑で土器片が散らばっている状況を認めた。



図3 イスラマーバードG12区メフラーバーディーの土地の高まり（北より）（筆者撮影）



図4 イスラマーバードG12区メフラーバーディーの土地の高まり周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

表採した土器片の写真と、滞在中に実測することのできた土器片を提示する<sup>(32)</sup>（図4，図5-1～7）。図4-1・図5-1は、両面に凸帯をもつ黒色の土器であるが、弧をなさず直線的に伸びる形態であるため、全体形は不明である。他の素焼きの赤色土器片の中には近現代に製作されたものが含まれていると思われるが、口縁部が少し外反して開く鉢（図4-2・図5-2）が「タキシラ遺跡群」のビール・マウンド遺跡第IV期・第V期（紀元前3～1世紀頃）に、口縁部上面が外に向かって平らに開く鉢（図4-9・図5-7）が同遺跡第V期（紀元前2～1世紀頃）に認められる等、紀元前に遡る時期のものと考えられる土器が含まれる〔Bahadar Khan et al. 2002 Fig. 31-13, 39-4, 33-7）。同地の周辺における古代の人々の活動の痕跡として、これらの土器片が残されていたと考えられる<sup>(33)</sup>。

**G 13 区** G13区のカシュミール高速道路沿いに所在する「トカゲ岩公園（Lizard Rock Park）」を訪問した<sup>(34)</sup>。そこには、地表に露出した自然の岩盤があり、あたかもトカゲが頭をもたげている

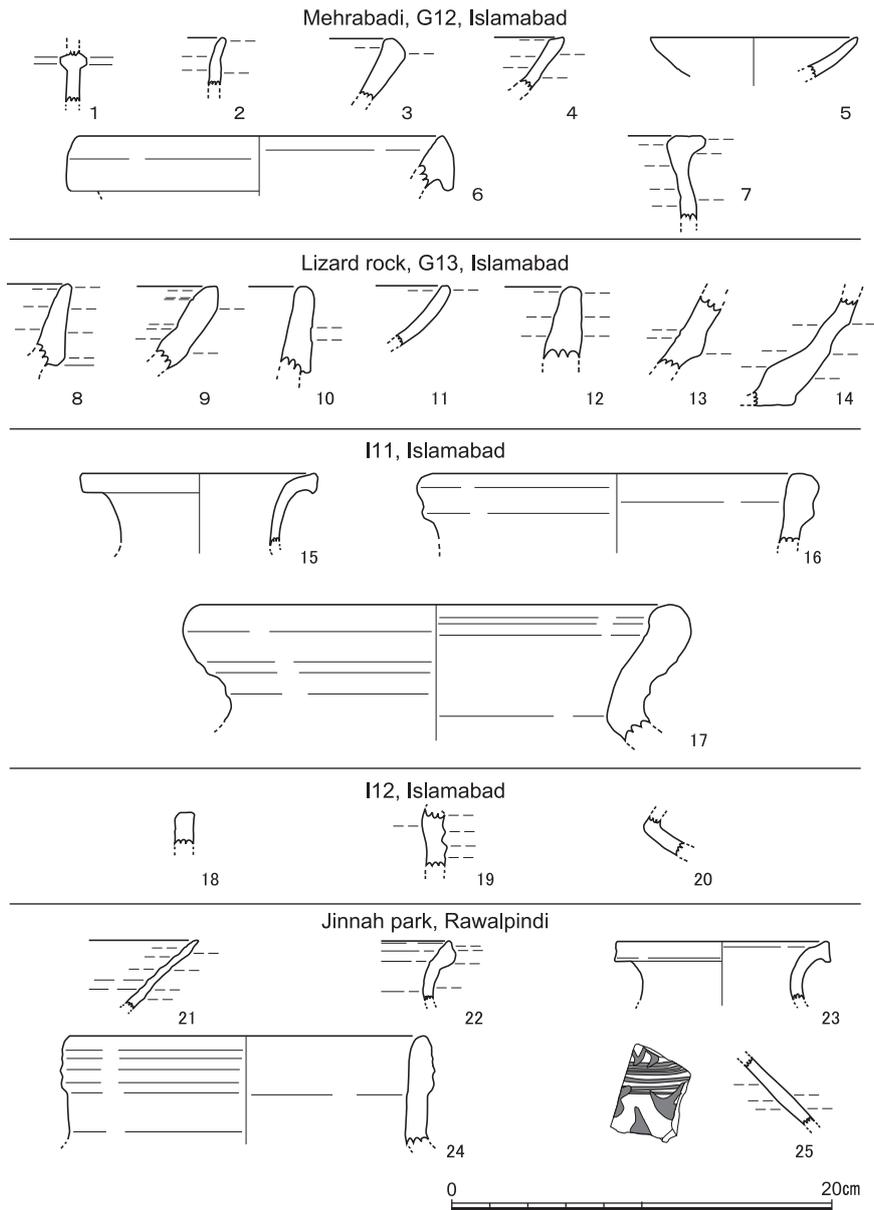


図5 イスラマールバードおよびラワルピンディでの表採土器片 縮尺1/4 (筆者作成)

かのように見える (図6, 図7)。2010年代になって, 首都開発局 (Capital Development Authority) が歴史的・考古学的遺跡の保存の見地から, 整備をおこなったとされる [Ghafoor 2017 p.57]。

巨大な板状の自然の岩を下位にある自然の岩が支える構造を持ち, 支え岩の南には天然の屋根をもつ開放的な空間が作られる。また, 支え岩には北東側より横穴が開き, こちらは三方に壁を持つ石室のような空間をなす (図7, 図8, 図10)。岩の上面には, 直径4cm 前後の円形の穴が14点, 2列に彫りくぼめられていた (図9)。このような自然岩の作り出す形状と構造から思い起こされるのは, タキシラに「トカゲ石」や「石室」の意味があったことである。古代の人々の活動の痕跡を探すため岩の周辺で素焼きの土器片等を表採したが, 残念ながらそれらのほとんどが近現代に属すると思われるものであった (図5-8~14, 図11, 図12)。



図6 イスラマーバードG13区のトカゲ岩（南西より）（筆者撮影）



図7 イスラマーバードG13区のトカゲ岩（東より）（筆者撮影）

岩の南方は下り斜面となる。斜面を下りきった先では土器片を全く確認しなかった。南方にある高速道路の建設に伴い、地面が大きく抉られ、周辺の地形も改変されたようである。トカゲ岩の下および周りの地面はコンクリートで舗装されるため、地表の情報を知ることができない。

**I 11 区** I 11区においては、近年新たに遺跡が確認されている。2つの小河川の合流地点にある巨大な丘で、墓石が散在する（図13）<sup>(35)</sup>。考古局のマフムード・ウル・ハサン（Mahmood-ul-Hassan）博士がイスラマーバード市内を踏査して確認した複数の遺跡のうちの一つのようだが、踏査の報告は公刊されておらず、今後公刊される予定もないようだ。重機によって削られた丘の断面では石積の壁が認められ、また、土器片も多数目視された。考古学遺跡であることは明らかであり、至急の保護が必要とされる。数点の土器を表採した（図5-15～17, 図14）。1点の大型壺（図5-16, 図14-

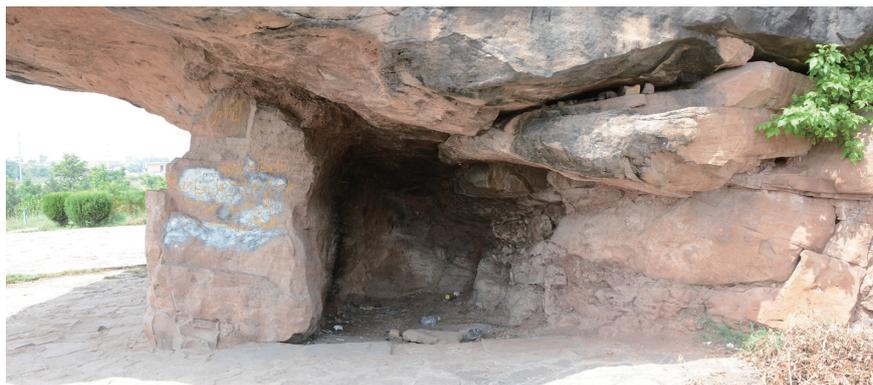


図8 イスラマーバードG13区のトカゲ岩の小室（北東より）（筆者撮影）



図9 イスラマーバードG13区のトカゲ岩の上面（北西より）（筆者撮影）

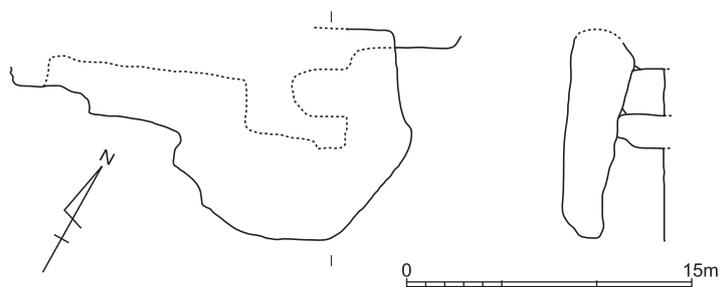


図10 イスラマーバードG13区トカゲ岩の平面・立面のスケッチ 縮尺1/400（筆者作成）

3) の口縁形態はビール・マウンド遺跡第Ⅲ期（紀元前6～4世紀）のものに類似し〔Bahadar Khan et al.2002 Fig. 17-16〕, もう1点の大型壺（図5-17, 図14-5）の形態は, ガンダーラ地方のラニガト寺院址第7期（紀元後7～9世紀頃）のものに類似する〔西川編2011 Fig. 9-35-431〕。大型鉢（図14-6）は, 「タキシラ遺跡群」のシルカップ遺跡の第1～2期（紀元前1世紀後半～紀元後1世紀前半）の小穴から出土したものに類似する〔Ghosh 1948 Fig. 6-27j〕。

**I 12 区** I 12区でもまた, 土地の開発により削られつつある丘を認めたため, 周辺を歩いた（図15）<sup>(36)</sup>。丘の断面では遺跡の痕跡を認めなかったが, 周辺で数点の土器小片を表採した（図5-18～20, 図16）。図5-19・図16-6は壺の口縁部片と思われる。外面に3つの溝をもつ形態は, ラニ



図11 イスラーマーバードG13区のとカゲ岩周辺表採の土器片等(1) 縮尺1/4 (筆者撮影)



図12 イスラーマーバードG13区のとカゲ岩周辺表採の土器片等(2) 縮尺1/4 (筆者撮影)

ガト寺院址第7期（紀元後7～9世紀頃）に認められる〔西川編2011 Fig. 9-34-388等〕。図5-20・図16-7は小型壺の頸部であり、内面の上部と外面に赤色のスリップが施される。「く」字形に屈曲する頸部を持つ壺はビール・マウンド遺跡第Ⅲ期以降に認められるが〔Bahadar Khan et al. 2002 Fig. 16-12, 22-17等〕, スリップが施される例は、シルカップ遺跡の全時期（紀元前1世紀～紀元後2世紀頃）を通じて存在する〔Ghosh 1948 Fig. 9-44〕。これらの土器は小片でしかないが、同地で長期に渡り人々が活動した可能性が高いことを示している。

### (2) ラワルピンディ市内の踏査

ラワルピンディ市では、市の中心域と東南部で遺跡の踏査をおこなった。

**市の中心域** 市の中心域において、いくつかの地点で遺跡の痕跡の有無を探ろうと考えたが、市内には軍事施設が多く、また、地表がコンクリートで覆われていたため、遺跡の存在を確かめること



図13 イスラマーバード I 11区の墓地丘（南東より）（筆者撮影）



図14 イスラマーバード I 11区の墓地丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

自体に困難がつきまとった。

カニングム氏によってヒッポストラトス、アゼス、アポロドトスの貨幣が見つかった場所と記録される「旧練兵場 (the old parade)」〔Cunningham 1872 p.152〕は、現在の「レースコース公園 (race course park)」とされる<sup>(37)</sup>。軍隊の所管であり、また、訪問時に閉園していたため、立ち入って土器片等の遺物の散布の有無の確認をすることはできなかった。敷地内には緑地が広がっており、仮に遺跡が残されているとしたら、保存状況は悪くないと思われる。カニングム氏によって土器片が厚く堆積していた場所の一つとして報告される「サッドル・バーザール (Saddar Bāzār)」も訪問したが、現在は店舗が建ち並び、コンクリートが道路を覆っており、地表の情報を読み取ることはできなかった。バーザールの北方の高まりにある「ガワル・マンディ (Gawal Mandi)」と呼ばれる土地も訪れたが、住宅が密集し、道路はコンクリートで覆われていた<sup>(38)</sup>。



図15 イスラマーバード I 12区の丘（北より）（筆者撮影）



図16 イスラマーバード I 12区の丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

**アユーブ公園** 市の東南部にあるアユーブ公園内に「Topi Rakh」の地名が見られる。カニンガム氏の記録する「Thupi」（丘）にかかわるのではないかと推察し、公園を管理する軍の許可を得て、兵の案内で広大な敷地内を見て回った。地図上で「Topi Rakh」の表記が認められた一画には、現在結婚式場があるが、周辺を歩いても土器片は認められず、遺跡が存在したとは思われない<sup>(39)</sup>。公園内の他の地点も歩いたが、遺跡の痕跡は認められなかった。

**ジンナー公園** アユーブ公園の北北西約1.6kmの地点に、ジンナー公園がある。アユーブ公園のある丘陵から北に下った地点にあり、標高はアユーブ公園の方が高い<sup>(40)</sup>。つまり、ジンナー公園はアユーブ公園の丘陵の北陰に所在することになる。ジンナー公園内にある「統一塔（Unity Tower）」の北東に南北方向に長い長方形に整形された丘があり（図17）<sup>(41)</sup>、その東西斜面において、土器片を表採した（図5-21～25、図18）。図5-21・図18-2の小型鉢の口縁部や、図5-22・図18-



図17 ラワルピンディ・ジンナー公園内の丘（北西より）（筆者撮影）



図18 ラワルピンディ・ジンナー公園内の丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

4の壺の口縁部は、ラニガト寺院址第8期（紀元後9～12世紀頃）に類例を持つ〔西川編2011 Fig. 9-39-487, 496〕。図5-24・図18-7は大形壺の口縁部であり、ビール・マウンド都市址第V期（紀元前2～1世紀）に類例がある〔Bahadar Khan et al. 2002 Fig. 41-7〕。図5-25・図18-12や図18-13には、黒色の彩文と赤色のスリップが施される。

ジンナー公園は過去に存在したラワルピンディ刑務所の敷地の一部である〔Khattak 2012〕。カニングム氏はこの刑務所の近くで「アーリア文字」の銘文を持つ灯明皿と、まだらな褐色で彩色され

た、高さ約6cm、直径約7.5cmの凍石製の蓋付きのコップが出土したことを記録している〔Cunningham 1872 pp.151-152〕<sup>(42)</sup>。氏によれば、刑務所の建設にあたってその用材を得るために「tope（丘）」が取り壊されたという。今回確認した土器片が表採できる長方形の丘が「tope」の痕跡である可能性、あるいは、「tope」が近隣に存在した可能性が考えられる。

### (3) 踏査の結果から分かること

現地での遺跡踏査で確認したかった点は、①ラワルピンディ中心部から北西約5マイル（約8km）の地点、つまり、現在のイスラマーバードのG11～13区、H11～13区、I11～13区辺りに仏塔址の痕跡が残存するかどうか、②ラワルピンディ市中心部に都市址の痕跡が残存するかどうか、③ラワルピンディ市中心部から南東に仏塔址の痕跡が残存するかどうか、の3つであった。

①にかかわっては、G12区において紀元前に遡る時期の土器を表採できる地点を確認し、G13区においてタキシラの語が意味する「石室」や「トカゲ石」にかかわりうる巨岩の構造物を確認し、I11区において紀元前以来、1000年以上の長期に渡って人々が活動した遺跡を確認し、I12区においてやはり長期に渡る期間の土器片を表採した。表採した土器は、玄奘の訪問した7世紀頃にもこれらの地点において人々が活動していた可能性が高いことを示す。ただし、明確に仏塔の址と分かる場所を確認することはできなかった。

②にかかわっては、軍事施設が多いというラワルピンディ市の特殊な事情から、満足に現地で遺跡の確認作業をおこなうことはできず、玄奘の時代ないしそれより古い時代の痕跡を確認することはできなかった。そもそも、市内では開発が進み、ほとんどの地点の地表が家屋やコンクリートで覆われ、地表および地下の情報を得ることは困難な状況にある。ただし、「レースコース公園」では、少なくとも19世紀半ばのカニングム氏の訪問時以降に大きな開発はおこなわれていないように見受けられ、地中に遺跡が残される可能性がある。

③にかかわっては、アユーブ公園の丘陵の北側にあるジンナー公園内で古い時代の土器片が散らばる丘を確認した。土器片はやはり、長い時間幅をもってこの周辺で人々が活動していたことを示す。アユーブ公園の丘陵の北に立地する点は、玄奘の「城外の南東にある南山の北側（城外東南南山之陰）」に仏塔があったとする説明と符合するようで興味深い。こちらにおいても、仏塔自体の痕跡を探り当てることはできなかった。

今回の踏査により、これまで遺跡の存在が認められていなかったイスラマーバード市からラワルピンディ市に跨がる範囲の複数箇所で古代の人々の活動の痕跡を見いだした。探索の対象とした特定の仏塔址自体の痕跡を探し当てることはできなかったが、仏塔址があったのではないかと想定した一帯において、古代の、それも玄奘の時代を跨ぐような年代幅を持つ土器片を伴って、人々の活動痕跡が見いだされた意義は大きい<sup>(43)</sup>。

## おわりに

玄奘の時代、つまり7世紀前半頃のタキシラの中心地はポトハール高原の、現在のラワルピンディ市あたりにあったのではないかとするのが前稿で唱えた仮説であった。「タキシラ遺跡群」ではビール・マウンド、カッチャー・コート（Kacchā Kot）、シルカップ、シルスフの各地点で都市址が知られており、これらがこの順で、ある期間にタキシラの中心都市であったことは疑いない。もし前稿の

仮説が立証される場合、2世紀頃のクシャーン朝の時代に「タキシラ遺跡群」に建設されたシルスフ都市址がある段階で廃絶した後、都市機能がマールガラ丘陵を越えて大きく南へ移転させられたことになる。ポトハール高原を訪問し、遺跡を探して回ればこの課題は解決されるのではないかと期待した。しかしながら、問題の解決はそれ程簡単なものではなかった。

まず、今回の踏査の過程では、土器片の散布を認めるものの、遺跡の痕跡を見いだすことのできなかった地点が複数存在した。土器片が散らばっていても、土地の開発に際して重機等で遺跡が破壊され痕跡が残されていない場合、元あった遺跡の性格を知ることは困難である。その点において、近年I11区で確認された丘は、遺跡としての状態が保たれており、貴重である。ただし、この場合においても、現段階では遺跡の性格を知ることはできない。遺跡がどのような性格をもつものであったかを知るためには、結局のところ、発掘を含めた大規模な現地調査が必要となる。

今回イスラマバーバードG13区で確認したトカゲ岩は、タキシラの語源にかかわって重要な存在である可能性を秘める。つまり、トカゲ岩やそれが作る石室状の構造物が語源となって、同地が「トカゲ石」や「石室」を意味する「タキシラ」と呼ばれるようになった可能性が考えられる。想像をたくましくすれば、その語がいつからか、「石切り」と解釈されるようになり、さらには「頭切り」という物騒な意味を表すとも認識されるようになり、求められるままに自身の頭をバラモンに布施したチャンドラプラバ王の伝説と結びつけられたのかもしれない。その伝説の場所を記念するために、岩の近辺にマウリヤ朝のアショーカが建てた仏塔が、玄奘の時代まで伝わっていた「捨頭塔」なのかもしれない。とはいえ、以上の話は現段階では空想の域にとどまる。今回の踏査時に表採した土器片の中に、古代にまで遡る資料を確認していないためである。物質資料の検討に基礎を置く本研究において、物的証拠のないまま論を進めることは控えたい。今回確認したトカゲ岩がいつから人々によって使用されたかについても、結局は周辺の発掘を待たなければ判断できない。もしトカゲ岩周辺が今後発掘され、紀元前に遡るような資料が見つければ、同地の重要性が明らかになるだろう。

玄奘の時代のタキシラ都城があったと想定したラワルピンディ市の中心部においては、軍事施設が多数存在することにより、満足に遺跡の確認調査を実施できなかった。一方で、ラワルピンディ市東南部にあるジンナー公園においては、長方形に整形された丘と周辺に散らばる土器片を確認した。この長方形の丘が古代に遡るものであるか、そして、そうであればどのような性格を持ったものであったかの解明についても、発掘調査を待たなければならない。

前稿で掲げた課題の解決に向けて、まだまだ道のりは長い。ただし、今回の渡航により、研究の前進は認められた。前稿で遺跡が存在するのではないかと仮定した地点の周辺で、確かに古代の人々が活動した痕跡を見いだしたのである。課題の解決に向けて、発掘調査の実施が待たれる<sup>(44)</sup>。

**謝 辞** パキスタンにおける2023年度の遺跡踏査に際しては、パキスタン連邦政府考古学・博物館局 (Department of Archaeology and Museums, Federal Government of Pakistan) のアブドゥル・ガフル・ロン (Abdul Ghafoor Lone) 氏およびアルシャッド・ウッラー (Arshad Ullah) 氏に多大な便宜を図っていただいた。また、2019年度の現地調査の頃より、京都大学名誉教授の増井正哉先生には調査の実施にかかわる様々な面で相談に乗っていただいている。上記の方々に感謝申し上げる。なお、本稿は日本学術振興会・科学研究費22K00973 (基盤研究 (C)) 「西北インド出土仏教碑銘の考古学的研究」

研究代表者：内記理) および日本学術振興会・科学研究費22K00985 (基盤研究 (C) 「都市化」とは何か」, 研究代表者：伊藤淳史) の成果の一部である。

## 〔注〕

- (1) 本稿は『愛知県立大学日本文学部論集』第15号 樋口浩造先生退職記念号 (2024年3月発行, pp.117-142) に掲載された論文を転載したものである。写真をモノクロからカラーに改めるにあたり, 挿図を作り直した。
- (2) 表記の検索には大正新脩大蔵経テキストデータベースを用いた。http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/ (最終閲覧日: 2023年10月30日)
- (3) 法顕訳『大般涅槃経』(『大正蔵』巻1・200頁c) 等。
- (4) 義浄訳『根本説一切有部毘奈耶』(『大正蔵』巻23・897頁a等) 等。
- (5) 佛陀耶舎・竺佛念訳『四分律』(『大正蔵』巻22・634頁c等) 等。
- (6) 闍那崛多訳『佛本行集経』(『大正蔵』巻3・828頁b等) 等。
- (7) 闍那崛多訳『大威徳陀羅尼経』(『大正蔵』巻21・828頁c)。
- (8) 慧覚訳『賢愚経』(『大正蔵』巻4・356頁b等) 等。
- (9) 慧覚訳『賢愚経』(『大正蔵』巻4・440頁c) 等。
- (10) 求那跋陀羅訳『雜阿含経』(『大正蔵』巻2・165頁a) 等。
- (11) 求那跋陀羅訳『雜阿含経』(『大正蔵』巻2・254頁c等)。
- (12) 五百大阿羅漢造・玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』巻27・593頁a) 等。
- (13) 慧立本『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(『大正蔵』巻50・250頁b等)。
- (14) 玄奘『大唐西域記』(『大正蔵』巻51・882頁b等) 等。
- (15) 龍樹集・日称訳『福蓋正行所集経』(『大正蔵』巻32・741頁c)。
- (16) 湛慧撰『成唯識論述記集成編』(『大正蔵』巻67・179頁a等) 等。
- (17) 僧伽婆羅訳『孔雀王呪経』(『大正蔵』巻19・450頁c)。
- (18) 馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論経』(『大正蔵』巻4・297頁c等)。
- (19) 法顕『高僧法顕伝』(『大正蔵』巻51・858頁b)。
- (20) 闍那崛多訳『大威徳陀羅尼経』(『大正蔵』巻21・828頁c)。
- (21) 元照撰『四分律行事鈔資持記』(『大正蔵』巻40・306頁c) 等。
- (22) 支謙訳『佛説辨沙王五願経』(『大正蔵』巻14・779頁a) 等。
- (23) 安世高訳『阿那邠邸化七子経』(『大正蔵』巻2・862頁b) 等。
- (24) 前注22の安世高訳『阿那邠邸化七子経』のほか, 馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論経』(『大正蔵』巻4・297頁a等), 吉迦夜・曇曜訳『雜寶藏経』(『大正蔵』巻4・483頁b), 竺佛念訳『出曜経』(『大正蔵』巻4・676頁a等), 『分別功德論』(『大正蔵』巻25・40頁b), 曇摩難提訳『阿育王息壤目因縁経』(『大正蔵』巻50・174頁a等), 宝唱等集『経律異相』(『大正蔵』巻53・191頁c・220頁a) において, 「石室国」ないし「石室城」についての記載が認められる。「伊羅波多羅」(エーラパットラ) や「捷陀頼」(ガンダーラ) 等とのかかわりから, 本稿で扱うタキシラを指していることが分かる。
- (25) 本章の内容は前稿〔内記2022〕に基づく。詳細は前稿を参照いただきたい。
- (26) 桑山正進氏もまた, 「不思議なことに, のちにのべる中国の巡歴僧の記録に, タキシラのダルマラージカーとおぼしきものに言及したものはない」と述べている〔桑山1990 p.30〕。
- (27) マールガラ丘陵の北側斜面から北方を眺めると, ダルマラージカーの巨塔が目に入る。この圧巻の仏塔址(それもまだ土砂によって埋まっていなくてであろう頃のものを), 玄奘が見落とすとは思えない。
- (28) ラワルピンディ市の軍宿営地から, 直線距離であればG12・H12区の境あたりが北西5マイル(約8km)にあたり, 西北西方向に走る幹線道路であるグランド・トランク・ロード(Grand Trunk Road) を経由して北方へ向かうのであればI12区やH13区あたりが5マイルにあたる。
- (29) 2023年度の遺跡踏査は, パキスタン連邦政府考古学・博物館局 (Department of Archaeology and Museums,

Federal Government of Pakistan。以下考古局)の全面的な協力のもとに実現した。2019年度におこなったパキスタン渡航時に考古局と相談し、計画していた調査であり、本来はその翌年(2020年)におこなう予定であったが、コロナの影響により延期していた。2023年5月になり日本でコロナによる制限が撤廃されたため、ようやく渡航が実現した。

- (30) <https://blog.travel-culture.com/2011/08/30/buddhist-site-discovered-in-g-12-islamabad/> (最終閲覧日:2023年10月31日)等。インターネット上に情報をあげた人物の1人と直接連絡を取ることができたが、どれだけ問い合わせても遺跡の所在地にかかわる正確な情報が提供されることはなかった。
- (31) 訪問地の座標を示す(以下同)。北緯 $33^{\circ} 39' 8.31''$ , 東経 $72^{\circ} 58' 39.54''$ 。
- (32) 以下では、現地地表採した土器を、西北インドの他遺跡出土の土器と比較し、おおまかな年代を検討する。近隣の「タキシラ遺跡群」内で出土した土器との比較が最も有効であるが、遺跡群の発掘では3世紀以降の土器が十分に報告されていない。そのため、地域は異なるが、3世紀以降の土器についての言及もあるガンダーラ地方のラニガト寺院址の土器研究も援用する。ラニガト寺院址は1980年代に西川幸治氏が率いる日本の調査隊によって発掘調査された仏教寺院址であり、難波洋三氏によって詳細な土器研究がおこなわれている(西川編1994/2011)。西北インドの土器の年代の検討に極めて有用である。
- (33) G12区ではそのほかに、その東部に「Killar」すなわち「城」として住民に呼び表される場所がある。軍事基地があったとされる広大な丘である(北緯 $33^{\circ} 39' 44.28''$ , 東経 $72^{\circ} 59' 22.95''$ )。ここでも開発が進み、現在は住宅が立ち並ぶ。
- (34) 北緯 $33^{\circ} 38' 53.68''$ , 東経 $72^{\circ} 58' 28.35''$ 。
- (35) 北緯 $33^{\circ} 38' 25.00''$ , 東経 $73^{\circ} 0' 55.04''$ 。
- (36) 北緯 $33^{\circ} 38' 11.36''$ , 東経 $73^{\circ} 0' 4.52''$ 。現在はアフガニスタン人移民の住所となっており、生活環境は著しく悪い。
- (37) 北緯 $33^{\circ} 36' 23.12''$ , 東経 $73^{\circ} 2' 4.24''$ 。
- (38) 北緯 $33^{\circ} 36' 11.08''$ , 東経 $73^{\circ} 3' 23.13''$ 。ガワル・マンディには、築150~200年とされる古建築群が残る。中にはヒンドゥ教寺院の尖塔らしきものも含まれる。今回の課題とはかかわらないが、歴史上重要な土地である。
- (39) 北緯 $33^{\circ} 34' 9.64''$ , 東経 $73^{\circ} 4' 42.18''$ 。
- (40) アユーブ公園では、最も標高の高い地点まで行っていないが、最大で標高約537mを記録し、ジンナー公園では標高約519mを記録した。
- (41) 北緯 $33^{\circ} 35' 4.04''$ , 東経 $73^{\circ} 4' 25.62''$ 。
- (42) なお、ハタック氏〔Khattak 2012〕は刑務所が1882年に建設されたと説明するが、それではカニンガム氏の時代に刑務所が存在したとする記録との間に矛盾をきたす。
- (43) 今回の渡航中に、ラワルピンディ市中心部より北西方向約40kmにあるハサン・アブダル (Hasan Abdal) を訪問した。そこには、カニンガム氏が玄奘の言うエラーパツラ竜王池に相当すると考えた地点がある〔Cunningham 1872 pp.135-136〕。シーク教寺院グルドワラ・パンジャ・サヒブ (Gurdwara Panja Sahib) である(図1, 北緯 $33^{\circ} 49' 15.16''$ , 東経 $72^{\circ} 41' 23.03''$ )。今回設定した課題には直接かかわらないが、玄奘の記録したタキシラの地理的な関係を把握する上で不可欠の存在であるため、ここに踏査記を付す。シーク教寺院建築の東半分は池に囲まれる。その東部に水の湧く地点があり、その湧水箇所には手形が刻まれた石が置かれている。シーク教徒の間に伝わる伝説によれば、教祖バーバ・ナーナク (Bāba Nānak) の残した手形であるとされ、カニンガム氏はその伝説の淵源を仏教説話に求めている〔Cunningham 1872 pp.137-138〕。その湧水点を含め、池全体に、体長30~50cm で黄色がかかった灰色を呈する、鯉のような淡水魚が泳ぎ回る。寺院の敷地の東隣には、イスラム教徒の墓があり、ハキマ (Hakima) とララ・ルフ (Lala Rukh) の墓と呼ばれる。カニンガム氏がムガル皇帝のイトスギ庭園 (Cypress Garden) と記録した場所であり、彼が残した絵図の中の、指示書きが抜け落ちた「a」「b」「c」地点がここに対応すると思われる〔Cunningham 1872 p.138, Pl. LX〕。敷地の西端の入り口の北側にも沐浴場があり、こちらでも上述の魚が泳ぎ回る。道を挟んで北隣に丘があり、そこでカニンガム氏が仏塔を見つけたが、現在では跡形も無くなっているという説明を現地でも受けた。氏は僧院と大きな仏塔があったことを記録しており、

絵図の中の「A」がそれに対応すると思われる。氏によれば、その東方240m（800フィート）と、さらにその南方にも、切石と土器片で覆われた丘があったという（「B」「C」地点か）。

- (44) 今回訪れた地点の中で比較的発掘調査に適していると考えられるのは、イスラマーバード I 11区に所在する墓地丘である。西部より着手され始めている開発で崩された丘の断面には石積遺構が現れており、発掘すれば成果が上がる事が明らかな遺跡である。丘の周辺の住宅地にも土器片が散らばっている状況であり、すでに丘の周辺にあった遺構を含め、遺跡が壊されつつあることは明らかである。保護に向けた対策が求められる。

#### 〔参考文献〕

- 大牟田章（訳注）1996年 『フラウィオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌』本文篇 東海大学出版会。
- 桑山正進（訳注）1987年 『大唐西域記』大乘仏典中国・日本篇9, 中央公論社。
- 桑山正進 1990年 『カーピシー・ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。
- 定方 晟 1998年 『異端のインド』東海大学出版会。
- 内記 理 2022年 「玄奘が見たタキシラの都城と仏塔」『オリエント』64-2, 217-232。
- 長澤和俊（訳注）1996年 『法顕伝』雄山閣。
- 中村了昭（訳注）2013年 『新訳 ラーマーヤナ』7, 東洋文庫。
- 西川幸治（編）1994/2011年 『ラニガト——ガンダーラ仏教遺跡の総合調査1983-1992』京都大学学術調査隊報告書, 京都大学学術出版会。
- 平岡聡（訳註）2007年 『ブッダが謎解く三世の物語——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上, 大蔵出版。
- 水谷真成（訳注）1971年 『大唐西域記』中国古典文学大系22, 平凡社。
- 水野清一編 1962年 『ハイバクとカシュミル-スマスト——アフガニスタンとパキスタンにおける石窟寺院の調査1960』京都大学。
- 山際素男（訳注）1992年 『マハーバーラタ』第1巻, 三一書房。
- 山崎元一 1979年 『アショーカ王伝説の研究』春秋社。
- Bahadar Khan et al. 2002, *Bhir Mound : The First City of Taxila (Excavations Report 1998-2002)*, Lahore.
- Cunningham, A. 1871, *The Ancient Geography of India*, London.
- Cunningham, A. 1872, *Four Reports Made during the Years 1862-63-64-65*, New Delhi.
- Errington, E. & V. S. Curtis 2007, *From Persepolis to the Punjab : Exploring ancient Iran, Afghanistan and Pakistan*, London.
- Ghafoor Lone, A. et al. 2017, Preliminary Report : Excavation of the Buddhist Stupa at Ban Faqiran-Islamabad, *Pakistan Archaeology* 32, 51-100.
- Ghosh, A. 1948, Taxila (Sirkap), 1944-5, *Ancient India* 4, 41-84.
- Khattak, I. 2012, Jinnah Park- a bone of contention, DAWN, 2012年9月7日記事 <https://www.dawn.com/news/747658/jinnah-park-a-bone-of-contention-2> (最終閲覧日 : 2023年10月31日)
- Lüders, H. 1942, Von Indischen Tieren, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 96, 23-81.
- Marshall, J. 1951, *Taxila*, 3 vols. Cambridge.
- Salomon, R. 2005, The Name of Taxila, *East and West* 55-1-4, 265-277.

## おわりに —残された課題と今後の展望に代えて—

伊藤淳史

今後にもちこされた個別の課題については、それぞれの論考ですでに触れてきたところである。本共同研究の眼目は、「都市化」なるものに関連する多様な現象をとりあげて実態を示しながら、その因子に考察をめぐらすことそのものにある、と考えている。したがって、包括的で明確な結論を呈示することはしていない。ただ、「都市化とは何か」という課題について何ら答えていないではないか、あるいは目的として掲げているように、その人的・環境的要因は何かを、はっきり示していないではないか、という批判があるとすれば、それはその通りであり、残された最大の課題として、甘んじて受け容れたい。

ここでは最後に、今後の展望に代えて、対象地域の近世絵図である『山城国吉田村古図』（京都大学総合博物館蔵）にかかわる展開を記しておきたい。この古図は、前回共同研究の成果紹介の一環として総合博物館で展示されたことを契機として、地域コミュニティで関心が高まり、それらの方々による釈読が進んだ結果、吉田地域で継承されてきた剣鉾祭礼についての記述が見出されるに至った。剣鉾祭礼は、明確なところではおおむね近世初頭以降の京都近郊の各地域に知られるもので、祇園祭などと趣旨や性格が通底する、町衆のまつりと言って良い。近世の吉田界限は、集住した社家町一帯以外は田畑のひろがる近郊農村と位置づけられるが、住まう人々の意識面での都市化は、中世後半期以降の戦乱による荒廃と復興を経て、近代の一時的都市化以前に生じていたとも評価できるのではないだろうか。とするならば、考古学的に遺跡から集住や多量廃棄が確認されるような中世前半期の状況は、いわば「見かけ上」の都市化であって、その地に根付いた人々のものではない、位相の異なるものであった可能性がある、との感を抱かされたのであった。

本共同研究の期間中における上記の顛末を承けて、今回も共同研究の仕上げの活動として予定する総合博物館における展示では、考古資料からの地域史変遷と『山城国吉田村古図』の展観とあわせて、剣鉾祭礼関連の資料を紹介し、地域の歴史遺産への理解を深める内容を企画している。本書に詳細を盛り込むことは時間的になわなないが、広報チラシを参考資料として末尾に添付した。

今回の共同研究では、密度の濃い考古学情報を確保できる地域を拠点とし、長期的な視点で、定点観測的に都市化／非都市化のプロセスの実相を追跡してきたものである。それは、大学構内の埋蔵文化財調査組織としての成果蓄積を学術的に活用する、という現実的必要性に根ざしたのもである。しかし、今回のようなこうした共同研究を展開していくことにより、組織として、地域文化財を総合的に扱うハブ的な役割も果たし得るのではないか、という感触ももつことができた。ここにこのような個人としての希望的観測を記して、結びとしたい。不十分で、また微々たる成果の提出であるが、今後の持続的活動のたたき台として、諸賢の叱正を乞う次第である。

## 活動の記録

### —発表・講演・調査・広報など—

#### 〔2022年度〕

\* 京都大学アカデミックデイ2022ポスター発表参加「埋もれた古道から探る地域の歴史」（2022年6月19日・於ロームシアター京都）

研究代表者・分担者全員で「研究者と立ち話部門」にエントリーし、古道の白川道に関連する既往の調査研究成果の概要と課題を中心に、ひろく一般市民も含めた対象にポスター発表した（下記写真）。行事の概要と評価をまとめたアカデミックデイ2022報告書と発表ポスターは、京都大学学術情報リポジトリKURENAI紅に収録されている。

（報告書<http://hdl.handle.net/2433/279938>）（発表ポスター <http://hdl.handle.net/2433/275935>）



京都大学アカデミックデイ2022「研究者と立ち話」部門におけるポスター発表の様子（2022年6月19日）

- \* 京都大学大学院理学研究科常任委員会にて、科研費による北部構内遺跡探査と試掘調査実施要請にかかる遺跡内容と作業概要説明（伊藤淳史，2022年9月7日）
- \* 遺跡探査および試掘予定地（北部構内理学部6号館西側）におけるGPSによる国土座標基準点設置作業（（公財）京都市埋蔵文化財研究所宮原健吾氏，2022年11月1日）
- \* 試掘予定地における遺跡探査実施（岸田徹氏・桑原久男氏・小田木治太郎氏・橋本英将氏・天理大学遺跡調査チーム・本共同研究関係者全員，2023年2月4日）  
詳細は本書第2章に報告した。
- \* 京都大学総合博物館2022年度特別展・文化財発掘IX「京都白川の巨大土石流—埋もれた先史土砂災害に学ぶ」（2023年3月15日～5月14日）において、歴史時代の洪水砂層利用や石造文化財との関連を展示紹介（担当・富井眞）

## 〔2023年度〕

- \* 北部構内遺跡探査成果の検討会（探査参加者全員・ZOOMオンライン形式・2023年6月30日）

岸田徹氏より探査成果についての報告を受けた後、伊藤が探査地周辺の遺構検出状況を説明して、探査反応の遺構可能性について討議した。これをふまえ、幕末期土佐藩白川邸北堀の可能性が考えられる対象地南側の探査反応箇所、試掘トレンチを入れることに決した。

- \* 尾張藩社会研究会において京都大学本部構内所在の幕末期尾張藩邸関連の研究成果を報告（於愛知県岩倉市生涯学習センター，2023年7月22日）

笹川尚紀「尾張藩吉田屋敷に関する再検討」

伊藤淳史「京都大学構内遺跡における尾張藩邸関連の発掘調査成果」

- \* 千葉豊・伊藤淳史，土佐藩白川邸および出土刻印瓦にかかわる高知県内資料調査（高知市高知城歴史博物館・安芸市歴史民俗資料館・安芸市内本家アキ寅中川製瓦所および粘土採掘地の上エヒイ遺跡踏査，2023年9月17日～18日）

- \* 北部構内BC28区（理学部6号館西側）での10㎡の試掘調査を実施（伊藤淳史・千葉豊・笹川尚紀，2023年12月18日～22日，現地植生復旧2024年1月16日）

詳細は本書第3章に報告した。

- \* 内記理「玄奘が訪れたタキシラとはどこか」講演（iCoToBa第11回グローバルセミナー於愛知県立大学，2023年12月20日）

- \* 千葉豊「考古学から見えてきた白川道」講演（吉田コミュニティカフェ第2回＜吉田の今と昔＞，於第四錦林小学校ふれあいサロン，2023年12月23日）

- \* 笹川尚紀「土佐藩白川邸について」講演（令和5年度連続講演会「さまざまな立場からみる幕末の京都」第5回，於高知県立坂本龍馬記念館，2024年2月24日）

## 〔2024年度〕

- \* 伊藤淳史・千葉豊・笹川尚紀，吉田剣鉾祭礼関連資料の調査（太元講社資料館，2024年4月14日）

- \* 伊藤淳史，吉田今宮社神幸祭の調査（2024年10月13日）

- \* 京都大学総合博物館2024年度特別展・文化財発掘X I 「吉田遺産探訪—遺跡・古図・剣鉾—」（2025年3月19日～5月11日）  
において，吉田地域の遺跡調査成果・吉田村古図・剣鉾祭祀関連資料を展示予定（担当・伊藤淳史）



剣鉾資料の調査（2024年4月14日）

京都大学総合博物館2024年度特別展

文化財発掘Ⅺ

# 吉田遺産探訪

遺跡・古図・剣鉾



2025 3/19 (水) - 5/11 (日)

9:30 - 16:30 (入館は16:00まで)

休館日 月曜日・火曜日 (平日・祝日にかかわらず)

観覧料 一般400円 大学生300円

以下の方々は観覧料無料 (証明書類をご提示ください)

- ・障害者手帳等をお持ちの方と付き添いの方1名
- ・70歳以上、または18歳未満の方
- ・小学生、中学生、高校生
- ・京都府下の大学に在籍する学生
- ・京都大学の学生・教職員

主催：京都大学総合博物館

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

後援：京都府教育委員会／京都市教育委員会

協力：吉田剣鉾保存会／太元講社／吉田村古図を読む会

左京・地域ゆかりの文化実行委員会

京都大学情報環境機構

## 文化財発掘Ⅺ

# 吉田遺産探訪 —遺跡・古図・剣鉾—

明治 22 年 (1889)、本部構内にあたる場所に旧制第三高等中学校が設置され、それまで愛宕郡吉田村と呼ばれていた近郊の農村から、現在わたしたちが目にするような都市の一隅へと、界隈の景観は大きく変貌していくことになります。

構内に残される遺跡の調査成果と、関連する研究を軸に紹介するシリーズ「文化財発掘」の今回は、このような、大学が所在する地域の歴史とのかかわりに焦点を当てます。歴史都市郊外としての盛衰を物語る構内からの出土資料に加えて、遺跡としても確認される古道や地割などをつぶさに記した古絵図、そして、そこに記載が見出され今もこの地に伝承される剣鉾祭礼の姿などを、すべて地域における遺産としてとらえ展観します。

これらを通じて、遺跡の上にある大学の存在に理解を深めていただくとともに、キャンパスの空間と地続きでひろがる「大学のある街」の歴史について、今を生きる私たちとも接点をもつ豊かで身近なもの実感する機会となることを、願っております。

**関連講演会** 参加費無料・申込不要（ただし、博物館の観覧料は必要です）

2025年 4月 19日 (土) 13:30 ~ 15:30 (開場 13:00)

● **伊藤淳史** (京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)

「発掘調査の成果と吉田村古図の世界」

● **上杉和央** (京都府立大学文学部歴史学科)

「地図と景観から読み解く吉田の歴史地理」

会場 京都大学総合博物館 3階講演室 (定員超過の場合、別室での映像受講となります。予めご承知おきください)

2025年 4月 26日 (土) 13:30 ~ 15:30 (開場 13:00)

● **福持昌之** (京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課)

「剣鉾研究の歩みと「吉田木瓜大明神の剣鉾差し」」

● **内田好昭** (粟田剣鉾奉賛会・元京都市考古資料館副館長)

「鴨東の剣鉾について—または、祭の現在」



京都大学吉田南構内出土の土馬 (平安時代)

(表)  
背景：近世の遺構 (吉田南構内・1996年)  
左：時計台前での剣鉾差し (2024年)  
右上：中世瓦溜の発掘 (吉田南構内・2001年)  
右下：山城國吉田村古図 (京都大学総合博物館蔵)



▲ 本展HPはこちら

\*「吉田村古図」は、3月19日~4月13日 複製、4月16日~5月11日 原本 を展示します



## 京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp  
<https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>

### アクセス

市バス停留所「百万遍」より徒歩約2分  
京阪電車「出町柳駅」より徒歩約15分  
※ 駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用ください。

---

令和4～6年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）（課題番号：22K00985）

「都市化」とは何か ー歴史都市京都近郊における長期的検証ー  
研究成果報告書

研究代表者 伊藤淳史

編集・発行 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

発行日 2025年3月30日

---